

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第216集

ふ も ん じ きゅう けい だい
普門寺旧境内

2020

公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団
愛知県埋蔵文化財センター

*本PDFは誤植を訂正したものです。(2020.04.03)

序

愛知県豊橋市と静岡県湖西市の県境の弓張山地にある普門寺は、船形山普門寺と称する高野山真言宗の寺院で、観音霊場としての信仰を守り伝える古刹です。また、近年は「豊橋のもみじ寺」として、石巻山多米県立自然公園の豊かな自然とともに、多くの市民、県民に親しまれています。このような豊かな自然環境を保全し、その機能性を十分に発揮させるため、愛知県では治山事業を推進していますが、このたび、予防治山事業・小規模治山事業に伴い、愛知県埋蔵文化財センターが普門寺旧境内の発掘調査を実施することになりました。

普門寺の本堂が現在の位置に移されたのは江戸時代のことですが、中世には山内の広い範囲を境内とした山寺として、大いにその寺勢を誇っていました。人びとの記憶から忘れ去られていたその姿を再び甦らせるための調査は、地元の愛知大学の有志が草分けとなり、その後、豊橋市教育委員会が遺跡としての普門寺旧境内の全体像を把握するため、継続的な発掘調査を実施してきました。今回の発掘調査は、山寺を構成する平場群を対象としたもので、遺跡の全体像解明に向けての重要な知見を得ることができました。本書はこの成果をまとめたもので、今後、本書の成果が学術的に活用され、ひいては埋蔵文化財の保護につながることを願ってやみません。

最後になりましたが、発掘調査にあたり、普門寺の方々をはじめ、関係者及び関係諸機関のご理解とご協力をいただきましたことに対して、厚く御礼を申し上げます。

令和2年3月
公益財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団
理事長 尾崎 亨

例 言

1. 本書は愛知県豊橋市雲谷町字ナベ山下7ほかに所在する普門寺旧境内（県遺跡番号：790481）の発掘調査報告である。なお、愛知県埋蔵文化財調査センターが実施した立会調査において出土した遺物についても併せて報告する。
2. 普門寺旧境内の発掘調査は、予防治山事業・小規模治山事業にかかる事前調査として、愛知県農林水産部森林保全課東三河農林水産事務所より愛知県教育委員会を通じて委託を受けた公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センターが実施した。
3. 調査期間は平成29年5月から12月で、調査面積は300㎡である。
4. 発掘調査は早野浩二（調査研究専門員）が担当した。
5. 発掘調査にあたっては、次の各関係機関のご指導とご協力を得た。
愛知県教育委員会生涯学習課文化財保護室・愛知県埋蔵文化財調査センター
愛知県農林水産部森林保全課東三河農林水産事務所 豊橋市教育委員会・豊橋市文化財センター 普門寺
6. 発掘調査は掘削業務を株式会社波多野組（現場代理人：小野正就）、測量業務を株式会社フジヤマ（測量技師：足立共司・吉田 始）、空中写真撮影を有限会社写真工房・遊に委託して実施した。
7. 報告書作成にかかる整理作業において、出土遺物の実測・トレースの一部を株式会社イビソク、出土遺物の写真撮影を金子知久氏（有限会社写真工房・遊）、地質図関係の図版作成を国際文化財株式会社、金属製品の保存処理を株式会社東都文化財保存研究所にそれぞれ委託した。
8. 発掘調査、報告書作成の過程で、次の各氏からご指導、ご協力を得た。
雨宮瑞生 安藤 弥 石川明広 石川智江 岩原 剛 小澤一弘 金子健一 河合君近 菊池 直哉
栗原雅也 小林久彦 柴垣勇夫 中川 永 服部 郁 林 隆清 林 義将 長谷川敦章 中嶋 茂
成瀬友広 平山 優 廣瀬憲雄 増山禎之 水野智之 村上 昇 和田 実
9. 本書の執筆は、第2章（1）、第6章を鬼頭 剛（調査研究専門員）、それ以外を早野浩二が担当した。
10. 遺構番号は原則として発掘調査時に用いたものを踏襲した。なお、使用する遺構記号は以下のとおりであるが、厳密な統一性はない。
SK：土坑、SZ：墓、SU：遺物集積、NR：自然流路、SX：その他不明遺構
11. 発掘調査と本書で使用した座標は、国土座標第VII系に準拠した。ただし、表記は新測地系（世界測地系）による。
12. 本書で使用する土層の色調については、『新版標準土色帳』を参考に記述した。
13. 発掘調査の記録（実測図、写真等）は、公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センターで保管している。なお、遺跡の略記号は「4TFM」である。
14. 出土遺物は愛知県埋蔵文化財調査センターで保管している。
〒498-0017 愛知県弥富市前ヶ須町野方 802-24
15. 本書の編集は早野浩二が担当した。

目 次

第1章 調査の概要.....	1
(1) 調査の経緯.....	1
(2) 調査の経過.....	2
第2章 周辺的环境.....	6
(1) 地形・地質.....	6
(2) 普門寺と普門寺旧境内、周辺の遺跡.....	8
第3章 17A 区の調査.....	12
(1) 遺構.....	12
(2) 遺物.....	16
第4章 17B 区の調査.....	18
(1) 遺構.....	18
(2) 遺物.....	26
第5章 立会調査出土遺物.....	34
第6章 地質学的調査.....	38
第7章 総括.....	46
(1) 発掘調査の意義.....	46
(2) 遺構の構造と変遷.....	47
(3) 出土遺物の様相.....	49
遺物一覧表.....	51
報告書抄録	

〈挿図目次〉

第 1 図	遺跡の位置 (1:5,000 万 /1:100 万)	1
第 2 図	普門寺旧境内全体図と調査区の配置 (1:5,000)	4
第 3 図	調査区の配置と周辺の遺構 (1:2,000)	5
第 5 図	普門寺経塚出土品 (1:8)	10
第 6 図	周辺遺跡分布図 (1:25,000)	11
第 7 図	17A 区調査前地形測量図 (1:200)	13
第 8 図	17A 区平面図 (1:200)	14
第 9 図	17A 区出土遺物分布図	15
第 10 図	17A 区土層断面図 (1:100)	15
第 11 図	17A 区出土土器実測図 (1:4)	17
第 12 図	平場 F—1・2 地区採集遺物 (1:4)	18
第 13 図	17B 区調査前地形測量図 (1:200)	19
第 14 図	17B 区平面図 (1:200)	20
第 15 図	17B 区出土遺物分布図	20
第 16 図	17B 区土層断面図 (1:100)	21
第 17 図	008SZ 検出状況平面図・土層断面図 (1:40)	22
第 18 図	008SZ 遺物 (銭貨・鉄製品) 出土状況図 (1:40)	23
第 19 図	008SZ 平面図・立面図 (1:40)	24
第 20 図	17B 区平場 006SX 周辺出土土器実測図 (1:4)	28
第 21 図	17B 区平場 006SX 斜面・石積み 008SZ 出土土器実測図 (1:4)	29
第 22 図	17B 区沢 009NR 出土土器実測図 (1) (1:4)	30
第 23 図	17B 区沢 009NR 出土土器実測図 (2) (1:4)	31
第 24 図	17B 区石積み 008SZ 出土銭貨実測図 (1:1)	32
第 25 図	17B 区沢 009NR 出土金属製品実測図 (1:2)	32
第 26 図	17B 区出土金属製品の X 線写真	33
第 27 図	17B 区出土石製品実測図 (1:2)	33
第 28 図	立会 A 出土遺物実測図 (1:4)	35
第 29 図	立会 B 出土遺物実測図 (1:4)	35
第 30 図	立会 C 出土遺物実測図 (1:4)	36
第 31 図	立会沢採集遺物実測図 (1:4)	37
第 32 図	普門寺旧境内周辺の地質調査ルートマップ (1:5,000)	39
第 33 図	各露頭における岩相写真 (1)	40
第 34 図	各露頭における岩相写真 (2)	41
第 35 図	三河国渥美郡船形山普門密寺略図	46
第 36 図	各種遺構・遺物の分布	48
第 37 図	渥美・湖西産蓮弁文壺・長頸瓶 (水瓶) と関連資料 (1:8)	49

〈挿表目次〉

第 1 表	普門寺の沿革	8
第 2 表	普門寺旧境内調査の沿革	9
第 3 表	17A 区出土遺物集計表	16
第 4 表	17B 区出土遺物集計表	26

〈写真図版目次〉

- 写真図版 1 普門寺旧境内遠景
- 写真図版 2 17 A区調査前状況・完掘状況
調査前状況（南東から）
完掘状況（南東から）
- 写真図版 3 17 A区平場 001SX・平場 002SX
平場001SX完掘状況（北から）
平場001SX北西部分上位土層断面（東から）
平場001SX北西部分下位土層断面（南東から）
平場002SX通路状遺構近景（東から）
平場002SX斜面の開削状況（東から）
- 写真図版 4 17 A区遺物集積 003SU・遺物集積 004SU・土坑 005SK
遺物集積003SU付近近景（南東から）
遺物集積003SU山茶碗（1）出土状況（西から）
遺物集積003SU仏餉具（2）出土状況（南西から）
遺物集積004SU付近土層断面（南から）
土坑005SK土層断面（北西から）
- 写真図版 5 17 B区調査前状況・完掘状況
調査前状況（東から）
完掘状況（南から）
- 写真図版 6 17 B区全景・平場 006SX 周辺
17B区全景（南東から）
平場006SX周辺検出状況・土層断面（東から）
平場006SX周辺巨礫付近遺物出土状況（西から）
平場006SX周辺巨礫付近山茶碗（25）出土状況（南から）
平場006SX周辺斜面礫群検出状況（南から）
- 写真図版 7 17B 区石積み 008SZ（1）
石積み008SZ除草後の確認状況（南東から）
石積み008SZ全石材検出状況（東から）
- 写真図版 8 17B 区石積み 008SZ（2）
石積み008SZ検出状況（東から）
石積み008SZ検出状況（南西から）
石積み008SZ検出状況（西から）
石積み008SZ検出状況（北から）
石積み008SZ検出状況（南から）
- 写真図版 9 17B 区石積み 008SZ・沢 009NR
石積み008SZ基底石検出状況（東から）
石積み008SZ銭貨（M1）出土状況（北東から）
石積み008SZ土層断面（南東から）
沢009NR完掘状況（南東から）
沢009NR土層断面（東から）
- 写真図版 10 17A 区出土遺物
- 写真図版 11 17B 区出土遺物集合写真
平安・鎌倉時代の遺物
戦国時代の遺物
- 写真図版 12 17B 区平場 006SX 周辺・斜面等出土遺物（1）
- 写真図版 13 17B 区出土遺物平場 006SX 周辺・斜面等出土遺物（2）
- 写真図版 14 17B 区沢 009NR 出土遺物
- 写真図版 15 立会調査出土遺物

編年根拠と実年代 豊橋市教育委員会 2016『普門寺旧境内—考古学調査編—』豊橋市埋蔵文化財調査報告書第140集 (一部改変)

実年代	実年代根拠	灰釉陶器	渥美・湖西	尾張・瀬戸	常滑(知多)	輸入磁器	古瀬戸	大窯	登窯
810	(井上ほか)		鈴木	安井					
850	(井上ほか)	K-14							
900	(井上ほか)	K-90							
950	(井上ほか)	O-53							
1000	(井上ほか)	H-72			第1				
1050	(井上ほか)	百代寺			第2				
1080	(井上ほか)								
1100	(鈴木)		I-a		第3	1 a			
1125	(中野)		I-b	1 a	第4	1 b			
1150	(中野)		I-c	1 b					
1175	(中野)		II-a	2 a	第5	2			
1200	(鈴木)					II-b	3		
1190	(中野)		II-c	2 b	第6	4		前I	
1200	(藤澤)								
1220	(中野)				第7	5		前II	
1250	(藤澤・中野)		III-a	3 a	第8	6 a		前III	
1275・1300	(中野)(鈴木)		III-b	3 b	第9	6 b		前IV	
1300	(藤澤・中野)		III-c	3 c	第10	7		中I	
1350	(藤澤・中野)				第11	8		中II	
1400	(藤澤・中野)					9		中III	
1450	(藤澤・中野)					10		中IV	
1480	(藤澤)					11		後I	
1500	(中野)					12		後II	
1530	(藤澤)							後III	
1550	(中野)							後IV古	
1560	(藤澤)							後IV新	
1590	(藤澤)							大窯1前	
1600	(中野)							大窯1後	
1610	(藤澤)							大窯2前	
1650	(藤澤)							大窯2後	
								大窯3前	
								大窯3後	
								大窯4前	
								大窯4後	
								大窯4末	
								大窯5前	
								大窯5後	
								大窯5末	登窯

典拠

- 灰釉陶器 : 井上喜久男ほか 2015『愛知県史 別編窯業1 古代 猿投系』愛知県
 渥美・湖西 : 鈴木敏則 2013「渥美湖西窯の山茶碗編年」『渥美窯編年の再構築』東海土器研究会
 : 安井俊則 2012「渥美窯製品編年表」『愛知県史 別編 中世・近世 常滑系』愛知県
 尾張・瀬戸 : 藤澤良祐 2007「常滑窯製品編年表」『愛知県史 別編 中世・近世 常滑系』愛知県
 常滑(知多) : 中野晴久 2012「常滑・渥美窯」『陶磁器から見る静岡県の中世社会』菊川シンポジウム実行委員会
 輸入磁器 : 原 廣志 1999「横地氏関連遺跡群と周辺遺跡の特徴について」『横地城跡—総合調査報告書—』
 古瀬戸・大窯 : 藤澤良祐 2007「編年表」『愛知県史 別編 中世・近世 常滑系』愛知県

第1章 調査の概要

(1) 調査の経緯

普門寺旧境内（県遺跡番号：790481）が所在する豊橋市は、愛知県南東部、渥美半島基部に位置する人口約37万人の中核市で、東三河の政治・経済、産業・流通、文化の中心地である（第1図）。また、三河湾、豊川、弓張山系に囲まれた豊かな自然環境も産業、文化の発展に大きく寄与している。

遺跡の位置

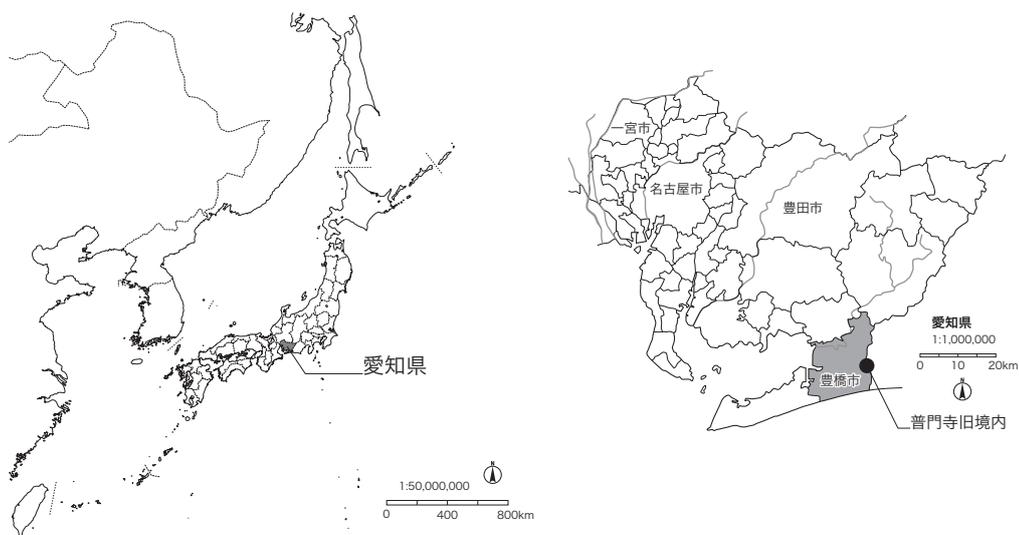
愛知県農林水産部森林保全課東三河農林水産事務所は、豊かな森林資源を保全しつつ、安全で潤いのある生活環境を提供する事業を推進し、石巻山多米県立自然公園周辺山林の予防治山事業・小規模治山事業を計画するに至った。工事は豊橋市雲谷町地内、普門寺旧境内の沢の要所に砂防用の堰堤を構築するもので、事業者と愛知県教育委員会生涯学習課文化財保護室が協議をした結果、堰堤の構築と工事用車両の進入路造成にかかる掘削工事の影響を受ける平場（状の地形）については試掘調査を実施し、発掘調査の要不要を判断することとした。一方、沢については遺物の出土が十分に予測されることから、立会調査で対応することとした。

調査の経緯

この方針に従って、愛知県教育委員会生涯学習課文化財保護室が平成28年度に対象地を試掘調査した結果、明確な遺構は確認されなかったものの、平場状の地形が残存していることが確認された。この結果を受け、平成29年度に愛知県農林水産部森林保全課東三河農林水産事務所が愛知県教育委員会を通じて愛知県埋蔵文化財センターに発掘調査（本発掘調査B）を委託し、同センターが対象地300㎡の発掘調査を実施した。発掘調査は早野浩二（調査研究専門員）が担当した。

試掘調査

発掘調査



第1図 遺跡の位置（1:5,000万/1:100万）

(2) 調査の経過

調査区の設定

発掘調査（本発掘調査B）は工事用車両の進入路造成による影響を受ける現収蔵庫裏手の平場の調査区を17A区（130㎡）、砂防用の堰堤の構築が及ぶ平場の調査区を17B区（170㎡）として、17A区を平成29年5月から6月、17B区を同11月から12月にかけて実施した（第2・3図）。なお、17B区の発掘調査は、工事用車両進入路造成後に周辺を伐採したため、17A区の調査終了後は発掘調査を一時休止した。

地形測量

調査の方法・経過

調査前には調査区付近の除草後、現況の地形測量を実施した。調査区設定後は表土を人力で掘削したが、17A区は近年の暴風雨による倒木の根株、17B区は上流側斜面からの転石が多く散乱していた。また、17B区の岩塊や石積みに密着した根を除去する作業は、樹木を傷めないようにも配慮しつつ、安全を最優先にして進めたため、予想以上の時間と労力を要した。表土除去後は随時、遺構面と土層断面の精査、遺物出土状況の記録と遺物の採取、遺構・土層断面の図化、写真撮影を進めた。

遠景・全景撮影

石積みの解体

普及啓発

概ね掘削が完了した6月9日（17A区）、12月6日（17B区）にはドローンによる遺跡遠景・調査区全景の空中写真撮影を実施した。なお、17B区の石積みの解体に際しては、チェーンブロックを用いた。17B区調査中の12月2日には、豊橋市文化財センターが主催する「史跡ウォーキング 普門寺ウォーク！」の開催に併せて発掘調査を公開し、若干の出土遺物を展示した（参加者210名）。発掘調査終了後は、両調査区とも人力で埋め戻した。



除草後の状況（17A区）



表土の掘削（17A区）



遺物の検出（17A区）



ドローンによる撮影（17A区）



調査区周辺の伐採（17B区）



遺構面の精査（17B区）



岩塊付近の掘削・精査（17B区）



石積みの調査・測量（17B区）



石積みの解体（17B区）



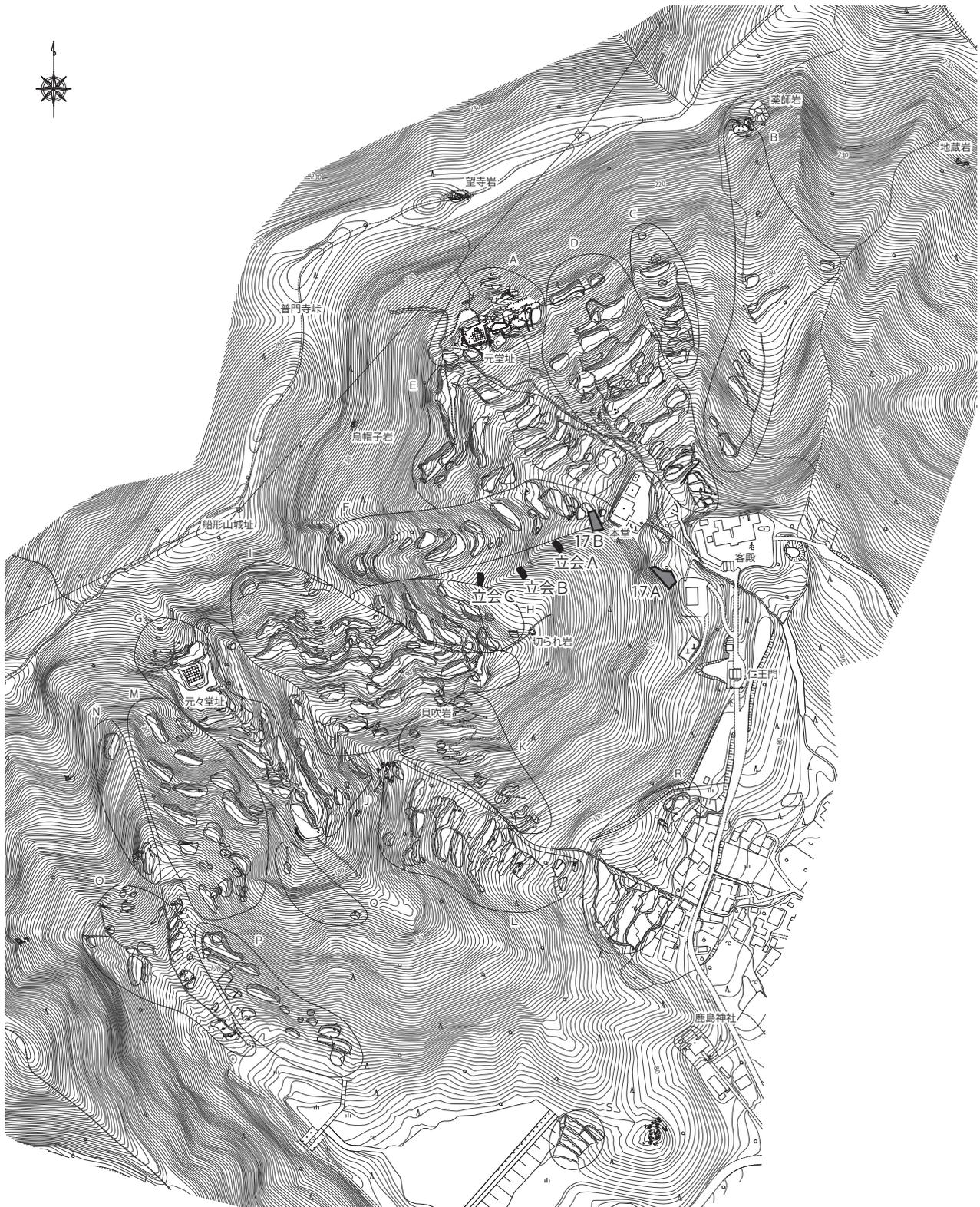
発掘調査の公開（17B区）

出土遺物の洗浄は発掘調査終了後、愛知県埋蔵文化財センターで実施し、洗浄した遺物は愛知県埋蔵文化財調査センターに仮収納した。調査報告書は愛知県埋蔵文化財調査センターが実施した立会調査出土遺物を併せて報告することとし、その作成にかかる遺物の接合・復元、実測・トレース、写真撮影、登録・収納、原稿執筆、図版作成、報告書の編集を令和元年度8月から11月の期間内に実施し、同年度3月に本書を印刷・刊行した。

遺物整理
報告書作成

参考文献

早野浩二 2018「普門寺旧境内」『年報』平成29年度 公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター



第2図 普門寺旧境内全体図と調査区の配置 (1:5,000)



第3図 調査区の配置と周辺の遺構 (1:2,000)

第2章 周辺の環境

(1) 地形・地質

周辺の地形

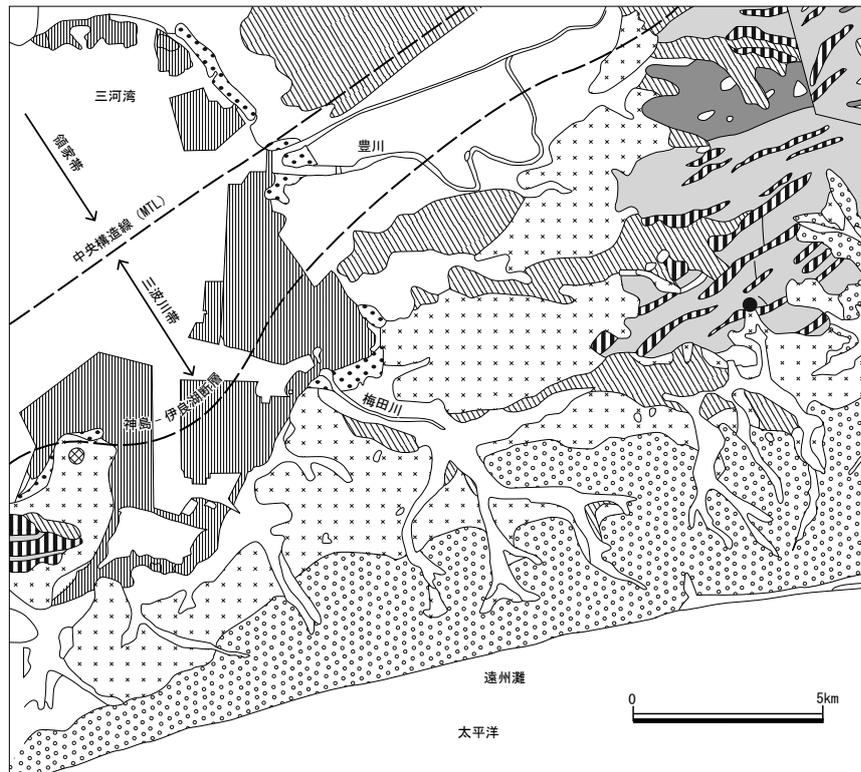
豊橋市は愛知県の東南端に位置し、東側を静岡県に境される。西は三河湾（あるいは渥美湾）、南は太平洋に面しており、渥美半島の南西端にある伊良湖岬から静岡県の御前崎までの約110kmにおよぶ範囲は遠州灘と呼ばれる。豊橋市の東部には、長野県から静岡県にかけて連なる赤石山脈の南西延長である弓張山地が北東から南西にみられる。豊橋市の西では三河湾に注ぐ豊川が北東から南西に流下し、豊橋平野（あるいは東三河平野）を形成している。普門寺旧境内のある豊橋市雲谷町から南西にある豊橋市大岩町（以下では、地名が豊橋市内にある場合は市名を省略する）を弓張山地の南西端として、東海道本線の「二川駅」近くから、岩崎町の航空灯台（標高324m）までを結ぶ南西-北東方向で、標高250～270m前後の山稜は、北西側に傾斜する山腹と南東側に傾く山腹とに2分する。北西側の山腹には西から飯村町、岩田町、岩崎町、多米東町がある。南東側には西から大岩町、大脇町、雲谷町、中原町がある。このうち普門寺旧境内は南東に傾く山腹の雲谷町にある。普門寺旧境内の位置は、弓張山地の一部である静岡県湖西市の嵩山（標高170m）をのせる山地が舌状に東へ突き出た尾根と、その西の大脇町において北西から南東に突き出た尾根とに挟まれた、谷地形の谷頭（標高230m）付近にある。東海道新幹線の「豊橋駅」から南東へ7.8kmの距離にある。

周辺の地質

中部地方の地質帯は、日本海側から太平洋側にかけて順に飛騨変成帯、飛騨外縁帯、三郡帯、舞鶴帯、美濃・丹波帯、領家帯が並び、これらが内帯を構成している。中央構造線（MTL）をはさんで南には三波川帯、秩父帯、四万十帯となる。豊橋市では中央構造線を境にして北側には内帯である領家帯が、南には三波川帯、秩父帯が分布する（第4図）。豊橋市域全体の地質については松澤・嘉藤（1961）によりまとめられているが、1970年代までは豊橋市域周辺でみられる秩父帯の層序は都田層と井伊谷層の2つに層序区分されてきた。1980年代に水垣（1985）によりチャートから古生代ペルム紀—中生代三畳紀の放散虫化石が抽出されて以降、池田（1990）、Ohba（1997）、丹羽・大塚（2001）、堀（2008）により弓張山地および渥美半島に分布する秩父帯付加コンプレックスの多くの地点から古生代ペルム紀—中生代ジュラ紀の放散虫化石が報告されている。普門寺旧境内のある雲谷町ナベ山下も含めた豊橋市周辺の秩父帯は堀（2008）により、構造的な下位層から雲谷ユニット、多米ユニット、嵩山ユニット、石巻山ユニットの4つに区分された。これらのうち、調査地で観察される岩相は砂岩泥岩の互層とチャートの繰り返しが基本的な層序となる雲谷ユニットにあたる。

参考文献

堀 常東, 2008, 秩父帯ジュラ紀付加コンプレックス, 地域地質研究報告 (5万分の1地質図幅) 豊橋および田原地域の地質, 独立行政法人産業技術総合研究所, 地質調査総合センター, 11-37.
 池田芳雄, 1990, 地形・地質・気象・水収支. 葦毛湿原調査報告書, 豊橋市教育委員会, 1-14.
 松澤 勲・嘉藤良次郎, 1961, 豊橋市域の地質. 附豊橋市域地質図. 愛知県建築部, 豊橋市, 27p.
 水垣桂子, 1985, 浜名湖北西地域の秩父系に産する放射虫化石. 瑞浪市化石博研報, no.12, 171-182.
 丹羽耕輔・大塚 勉, 2001, 浜名湖西方地域の秩父帯付加コンプレックスから産出した後期古生代および中生代放射虫化石. 信州大学理学部紀要, vol.36, 77-93.
 Ohba, H., 1997, Mesozoic radiolarians from the western part of the Atsumi Peninsula, Southwest Japan. Jour. Earth planet. Sci. Nagoya Univ., vol.44, 71-87.
 産業技術総合研究所地質調査総合センター編, 2014, 20万分の1日本シームレス地質図 2014年1月14日版, 産業技術総合研究所地質調査総合センター.



- | | |
|--|---------------------------------------|
| 埋立地 | 新生代第四紀 中期更新世
天伯原面 |
| 新生代第四紀 完新世 | 中生代前期-後期ジュラ紀の付加コンプレックス
混在岩からなる基質部分 |
| 新生代第四紀
後期更新世~現在
砂丘堆積物 | 中生代前期-後期ジュラ紀の付加コンプレックス
チャートブロック |
| 新生代第四紀 後期更新世
低位段丘堆積物
小坂井面
豊橋面 | 中生代前期-後期ジュラ紀の付加コンプレックス
玄武岩ブロック |
| 新生代第四紀 後期更新世
中位段丘堆積物
福江面
高師原面 | 超苦鉄質岩類
(超塩基性岩) 時代未詳 |

第4図 豊橋市周辺の地質図

産業技術総合研究所地質調査総合センター編 (2014) の20万分の1日本シームレス地質図2014年1月14日版を引用。
 ●は普門寺の位置を示す。

(2) 普門寺と普門寺旧境内、周辺の遺跡

普門寺の沿革

開基	普門寺は船形山普門寺と称する高野山真言宗の寺院で、寺伝によると、神亀4年(727)
最古の史料	に行基が開基したとされる。普門寺にかかる現存最古の史料は、大治2年(1127)の当
経筒	寺13世勸進僧明意の書写による大般若経である。普門寺と北鎌倉古民家ミュージアムが
普門寺の整備	所蔵する2点の経筒は当寺14世「勝意」の銘があり、久寿3年(1156)に埋納された。袋井市出土梵鐘には当寺名と平治2年(1160)銘がある。これらの金石文や重要文化財の釈迦(薬師)如来坐像や阿弥陀如来坐像、四天王立像等を含む仏像群の時期は12世紀中葉から後葉に集中し、この時期に普門寺が本格的に整備されていることが知られる。
中世	鎌倉初期には初代三河守護である安達盛長が源頼朝の命により、国内に7つの堂宇を建立したという。これを「三河七御堂」と称し、その1つが当寺であった。なお、「普門寺」の名称は13世紀にはすでに存在したようであるが、中世においては主に「船形寺」と「梧桐岡寺(院)」の2寺が併記されている。
戦国時代	戦国時代には船形山城が国境守備の城としてたびたび争乱の対象となり、天文2年(1533)には兵火により全山が焼失したという。この頃からは次第に本寺の名称が「普門寺」に統一されるようになった。
近世	近世になると、慶長7年(1602)に三遠奉行の伊奈忠次によって寺領35石、翌8年

第1表 普門寺の沿革

和暦	西暦	事象
神亀4年	727	行基が開山するという(普門寺縁起)
大治2年	1127	13世明意が大般若経を書写する(普門寺文書等)
久寿3年	1156	14世勝意が父母の息災を願って経塚を造営する(普門寺所蔵銅製経筒銘)
平治元年	1159	二条天皇中宮の高松院が紀里岡寺に銅鐘を施入(袋井市所蔵鐘銘)
嘉応年間	1169~71	叡山の僧侶らに焼き討ちされ全山焼失するという(普門寺縁起)
建久年間	1190~99	源頼朝が上洛に際し立ち寄ったという
鎌倉初期		三河守護・安達盛長が観音堂を建立したという
嘉禄元年	1225	瀧山寺の本堂落成供養に船形寺(普門寺)の蓮道坊が請僧として参列する(瀧山寺縁起)
仁治3年	1242	18世覚忠が寺領の東西南北の境界を記す(普門寺文書)
応永33年	1426	鹿嶋宮(現鹿島神社)の社殿が造営される(鹿島神社棟札銘)
明応8・9年	1499~1500	田原の戸田宗光が船形山城を攻める(宗長日記等)
天文2年	1533	船形山合戦で船形山城とともに全山焼失(普門寺文書)
天文3年	1534	25世賢盛らによって「縁起」が記される(普門寺縁起)
永禄7~11年	1564~68	小笠原氏が徳川家康の命を受け船形山城を守備(寛政譜)
慶長7年	1602	伊奈忠次により35石の寺領が認められる(普門寺文書)
慶長8年	1603	朱印地100石の寺領が認められる(普門寺文書)
寛文8年	1668	仁王門が造営される(垂木墨書銘)
天和2年	1682	十王堂が造営される(普門寺文書)
元禄6年	1693	本堂が山上から現在地へ移転する(普門寺文書)

(1603) に徳川氏から朱印地として雲谷村内 100 石が認められ、高野山平等院末東門中六箇寺の筆頭に位置付けられる。それと同時に、普門寺復興事業として山麓への境内移転が鋭意進められ、寛文 8 年 (1668) の仁王門、天和 2 年 (1682) の十王堂の造営に続き、元禄 6 年 (1693) には本堂が現在地に移設された (第 1 表)。

普門寺旧境内調査の沿革

遺跡にかかる最初の知見は明治年間における経塚の出土で、大正 12 年 (1923) の『渥美郡史』への掲載後、三宅敏之が昭和 33 年 (1958) にそれを報告している。

1970 年代後半には愛知大学文学部史学科考古学研究会が普門寺旧境内と船形山城址の分布調査・測量調査を実施した。その後、遺跡の重要性を鑑みた豊橋市教育委員会は、遺跡の内容把握と保護を目的として、2000 年代に全山と主要遺構の測量調査、2000 年代後半から 2010 年代前半には主要な遺構の確認調査を実施した。併せて 2010 年代には文献、建築、彫刻、美術工芸品、経塚、石造物、地質調査を含めた総合調査を実施し、考古学調査と総合調査の成果を公表した。その後も同教育委員会は普及啓発活動を継続して展開している (第 2 表)。

普門寺旧境内の概要

普門寺旧境内は総面積約 33 万㎡にも及ぶ古代・中世の山寺遺構で、山内には元々堂址、元堂址と呼ばれる 2 つの本堂跡と平場群、さらにその周囲の巨岩、中世墓群、経塚によって一大宗教空間が形成されている。重要文化財にも指定されている経塚出土品 (第 5 図) は学術上の価値も高く、遺構の残存状況が良好であることも特筆される。

山内の分布調査では 7 世紀を主体とする古代の遺物も採集されているが、宗教施設としての成立は元々堂の出現に求められる。その元々堂址は 10 世紀中葉に造成され、12 世紀中葉に大きく拡張されている。平場の中央には岩盤を削り出して基壇とした仏堂が設けられる。造成土からは 8 世紀後葉から 9 世紀前葉の瑞花花枝鏡が出土している。元堂址は 12 世紀前葉に造成され、(織豊期とされる) 2 つの基壇とその間に池が設けられる。池か

普門寺経塚

愛知大学の調査

豊橋市教育委員会

遺構の確認調査

総合調査

普及啓発活動

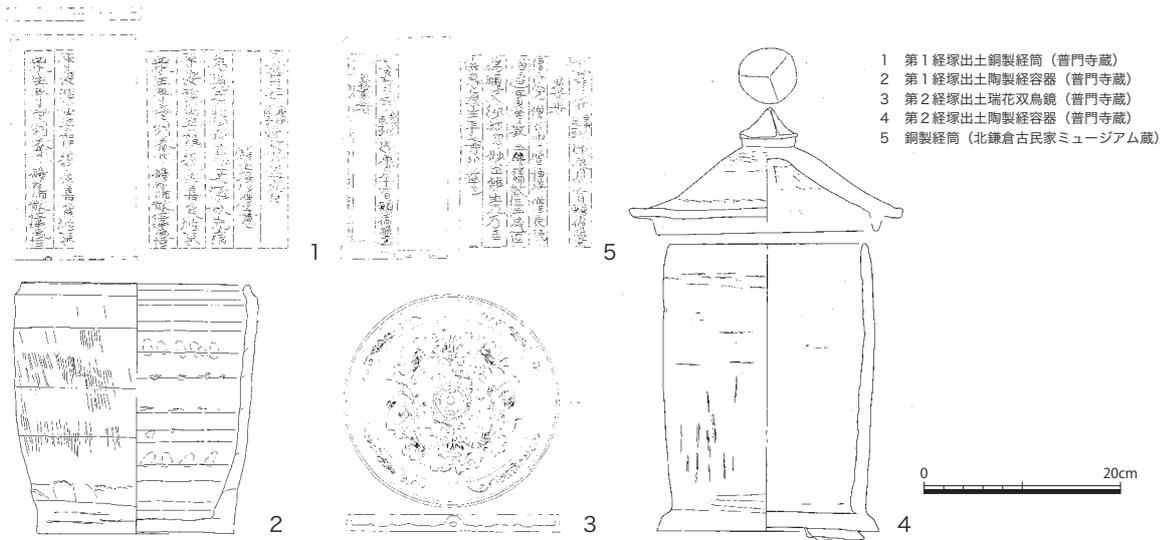
構成

元々堂址

元堂址

第 2 表 普門寺旧境内調査の沿革

和暦	西暦	事象
明治年間		元堂址等から経塚遺物が出土
大正12年	1923	『渥美郡史』に普門寺経塚出土品発見の経緯、出土品は旧国宝に指定
昭和33年	1958	三宅敏之による普門寺経塚の報告
昭和51～55年	1976～1980	愛知大学による普門寺旧境内・船形山城址の分布調査・測量調査
平成10～15年	1998～2003	豊橋市教育委員会による市内遺跡の詳細分布調査
平成16～18年	2004～2006	豊橋市教育委員会による普門寺旧境内の遺構の測量調査
平成21～23年	2009～2011	豊橋市教育委員会による普門寺旧境内の分布調査
平成19～27年	2007～2015	豊橋市教育委員会による普門寺旧境内の発掘調査
平成22～28年	2010～2016	豊橋市教育委員会による普門寺の総合調査
平成28年	2016	豊橋市教育委員会による報告書 (考古学調査編・総合調査編) の刊行
平成29年	2017	愛知県埋蔵文化財センターによる発掘調査
令和 2 年	2020	愛知県埋蔵文化財センターによる報告書の刊行



第5図 普門寺経塚出土品 (1:8)

らは大量の墨書土器、船形木製品を含む遺物が出土している。

平場群 山内には250以上の平場群が展開する。採集される遺物から、平場群は12世紀には旧境内全域に展開し、中世末から近世にかけて再整備されたことが推定されている。

船形山城址 元々堂址の上位の尾根上には戦国時代の山城である船形山城が築かれる。遺構としては、曲輪や堀切、切岸等が現存する。

周辺の遺跡

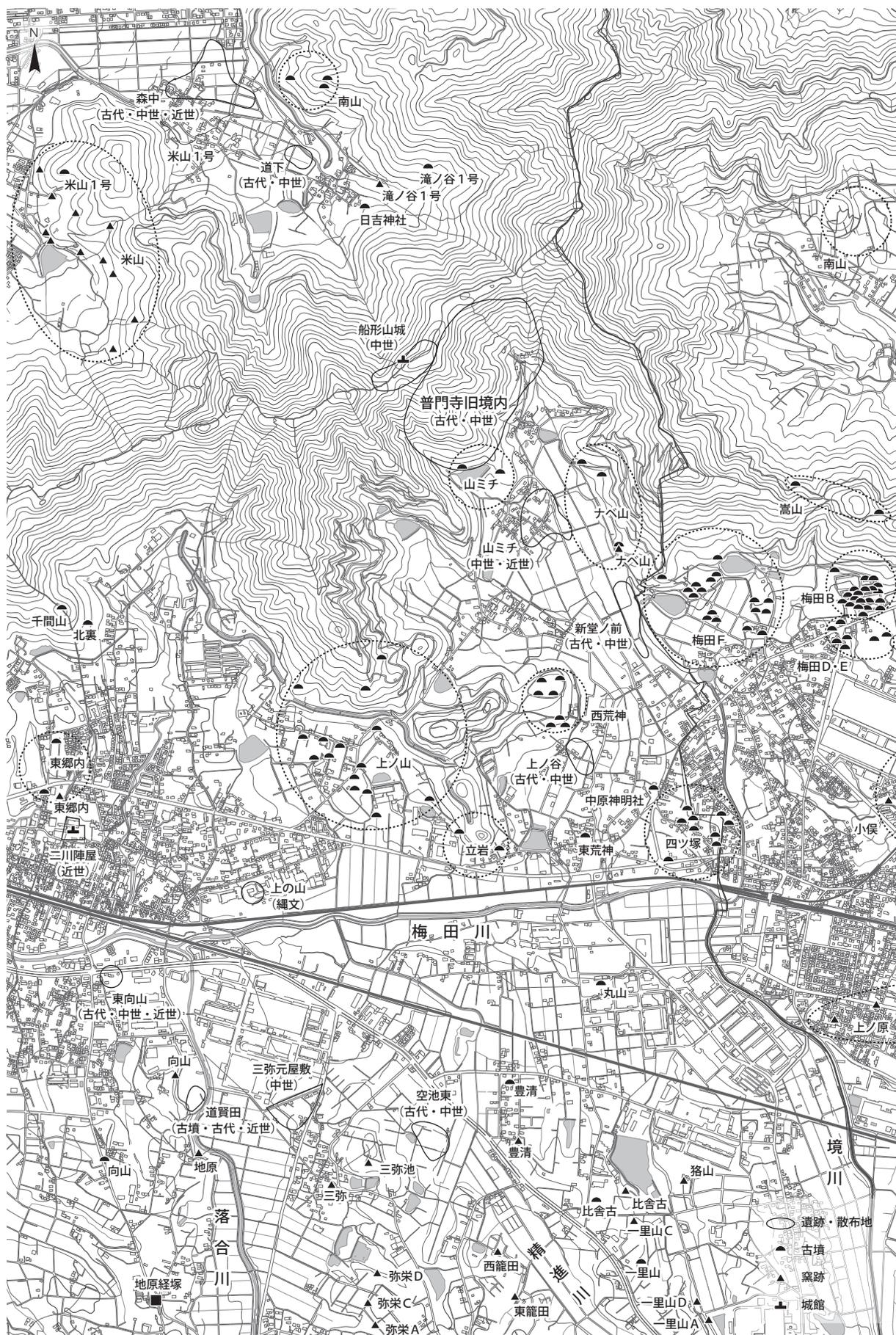
古墳時代以前 弓張山地南端付近における縄文時代から弥生時代の遺跡は希薄である。古墳時代には付近の山腹から山麓にかけて、上ノ山古墳群、西荒神古墳群、四ツ塚古墳群、梅田A・B・C・D・E・F・G古墳群（湖西市）等、多数の古墳が築かれる。

古代・中世 古代の弓張山地南端付近は湖西窯、二川窯として、一大窯業生産地を形成する。遺跡付近の奈良時代の古窯としては、ナベ山古窯等、平安時代の古窯としては、東郷内古窯、米山古窯址群等がある。中世には窯業生産地が渥美窯、湖西窯に移る。遺跡付近の中世の古窯としては、小俣古窯跡群（湖西市）がある。近隣の古代・中世の遺跡としては、灰釉陶器が出土した新堂ノ前遺跡、中世の遺物が散布する山ミチ遺跡がある。

近世 近世には江戸幕府により東海道が整備され、東海道五十三次の33番目の宿場として二川宿が置かれた（第6図）。

参考文献

渥美郡役所 1923『渥美郡史』
 三宅敏之 1958「普門寺経塚について」『考古学雑誌』第44巻第2号 日本考古学会
 湖西市教育委員会 1994『湖西市文化財地図・地名表—改訂版—』湖西市文化財調査報告書第33集
 豊橋市二川宿本陣資料館 1994『鎌倉街道と頼朝伝説の寺 普門寺展』
 小澤一弘・北村和宏 1998「新発見の普門寺経筒—「鎌倉古陶美術館」所蔵の久寿三年陽鋳銘経筒—」
 『榑崎彰一先生古希記念論文集』真陽社
 豊橋市教育委員会 2004『市内遺跡詳細分布調査報告書』豊橋市埋蔵文化財調査報告書第78集
 豊橋市教育委員会 2016a『普門寺旧境内—考古学調査編—』豊橋市埋蔵文化財調査報告書第140集
 豊橋市教育委員会 2016b『普門寺旧境内—総合調査編—』豊橋市埋蔵文化財調査報告書第141集
 豊橋市美術博物館 2017『普門寺と国境のほとけ』
 岩原 剛 2017「普門寺旧境内」『愛知県史』資料編 考古5 鎌倉～江戸 愛知県



第6図 周辺遺跡分布図 (1:25,000)

第3章 17A区の調査

(1) 遺構

概要

山麓付近の平場 山麓付近、現収蔵庫裏手の17A区は豊橋市教育委員会が設定した平場群には含まれていないが、同じく山麓付近の平場群R・S地区は、近世から近代の屋敷地、畑があったことが想定されていることもあって、発掘調査を実施することとした。周囲の標高は約110mである。

層序 17A区は表土下に造成土と思われるオリブ褐色シルト層が部分的に堆積し、それを除去すると著しく風化した明黄褐色砂岩の岩盤に達する。17A区の遺構としては、平場001SX・002SX、遺物集積003SU・004SU、土坑005SKがある(第7～10図)。

遺物集積003SU

検出状況 17A区北東端において検出した遺物群を003SUとした。渥美・湖西産山茶碗、美濃産仏餉具、土師器皿等の遺物(1～10)は横倒しになった根株によって持ち上げられた土中に包含されていた。17A区北東端は沢の崖面に面しているが、遺物の出土状況、残存状況からして、山茶碗を除く遺物は沢の上流から流出したものではなく、周辺において使用され、遺棄されたと推測される。

遺物出土状況

遺物集積004SU

検出状況 17A区東辺の崖面周辺において検出した遺物群を004SUとした。土師器皿等の遺物(11～17)はやや散在して出土したが、003SUと同様、渥美・湖西産甕を除く遺物は周辺において使用され、遺棄されたと推測される。

平場001SX

検出状況 17A区の丘陵斜面の上位において確認した小型の平場を001SXとした。規模は長さ9.5m、最大幅4.5mである。遺構を精査する過程において、初山産天目茶碗と瀬戸産天目茶碗(18・19)が出土しているが、周辺において明確な遺構は検出されていない。

遺物出土状況

平場002SX

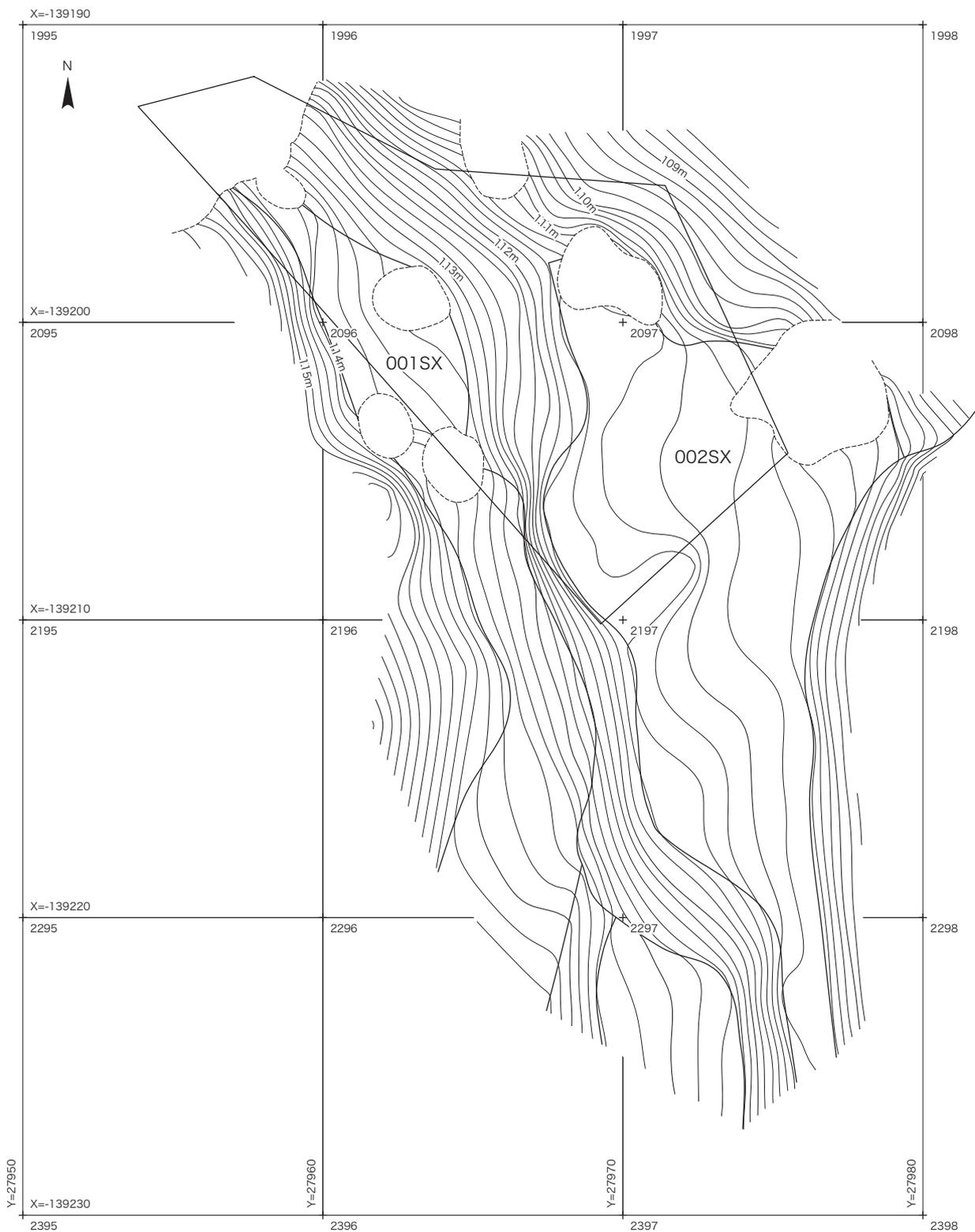
検出状況 調査前に確認されていた平場を002SXとした。平場は丘陵側の軟質な砂岩を大きく開削することによって形成される。規模は長さ18.0m、最大幅12.0mである。遺構を精査する過程において、近世後期の陶磁器類(20～22)が出土した。その他、上位の平場001SXと下位の平場002SXを通行するために開削した通路と思われるような造作(通路状遺構)を確認した。

遺物出土状況

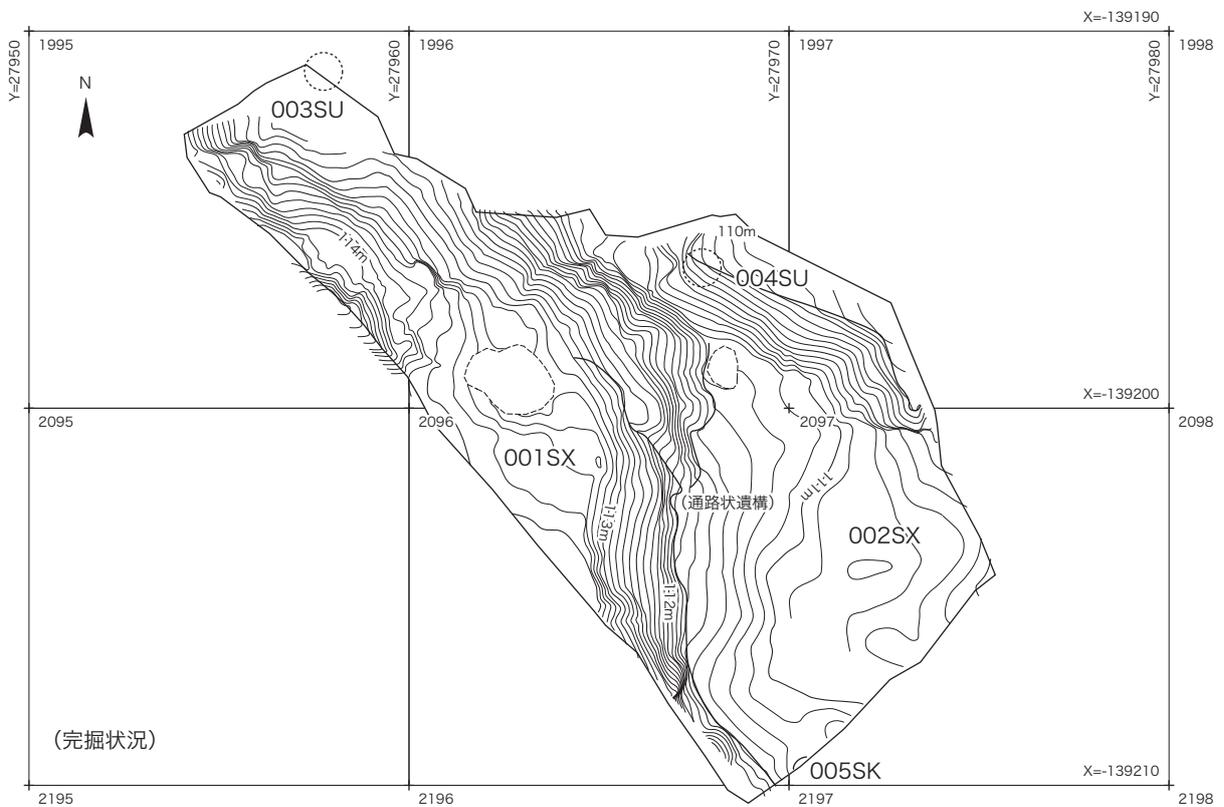
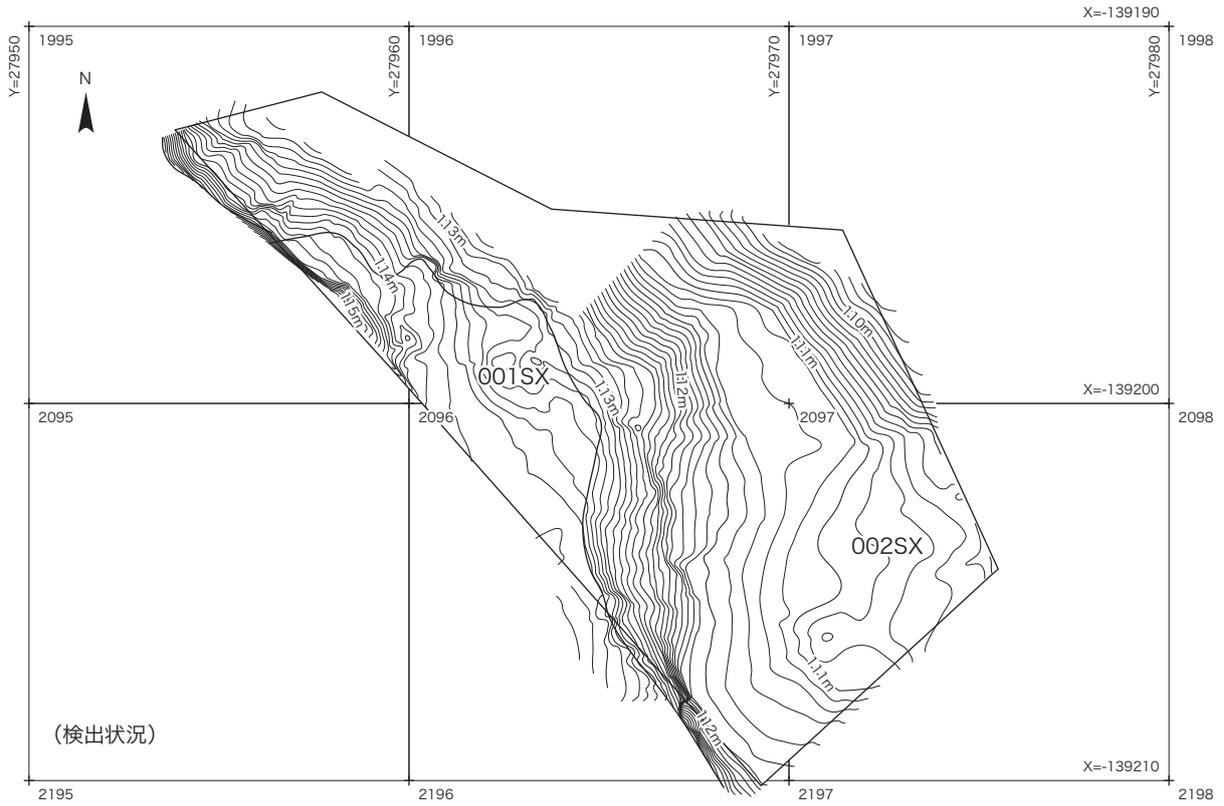
通路状遺構

土坑005SK

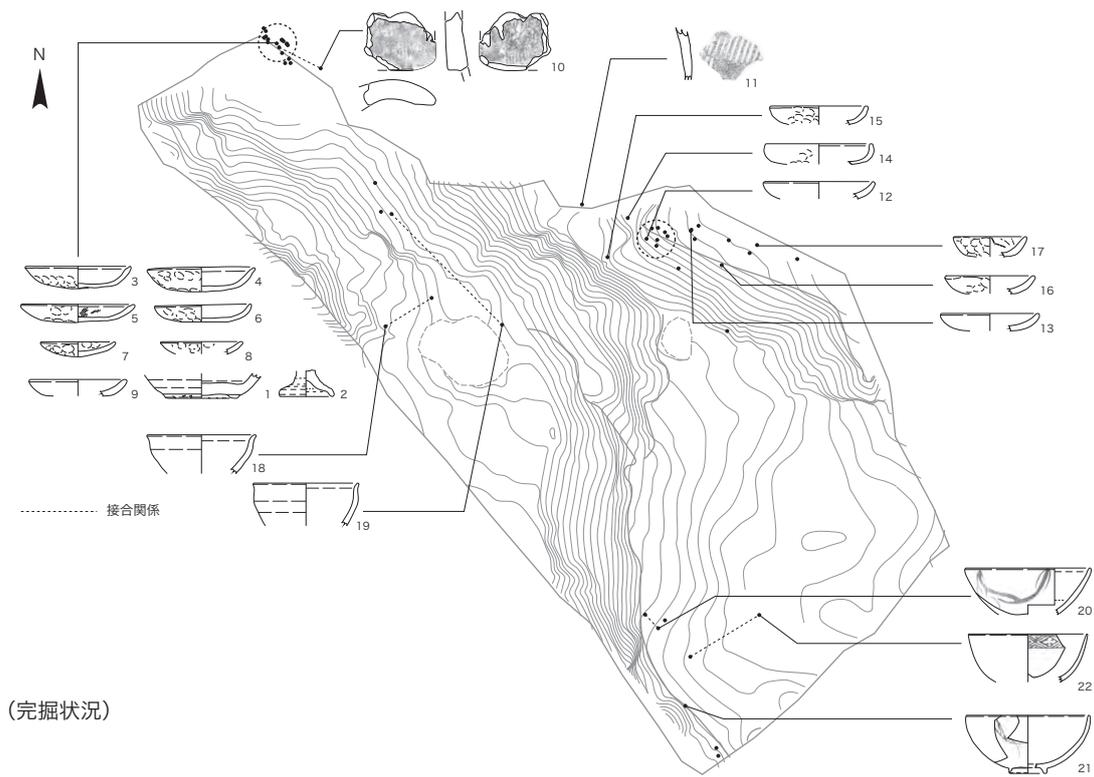
検出状況 平場002SXを精査する過程において検出された。遺物は出土していないが、平場002SXと同様、近世後期(以降)に帰属すると推測される。



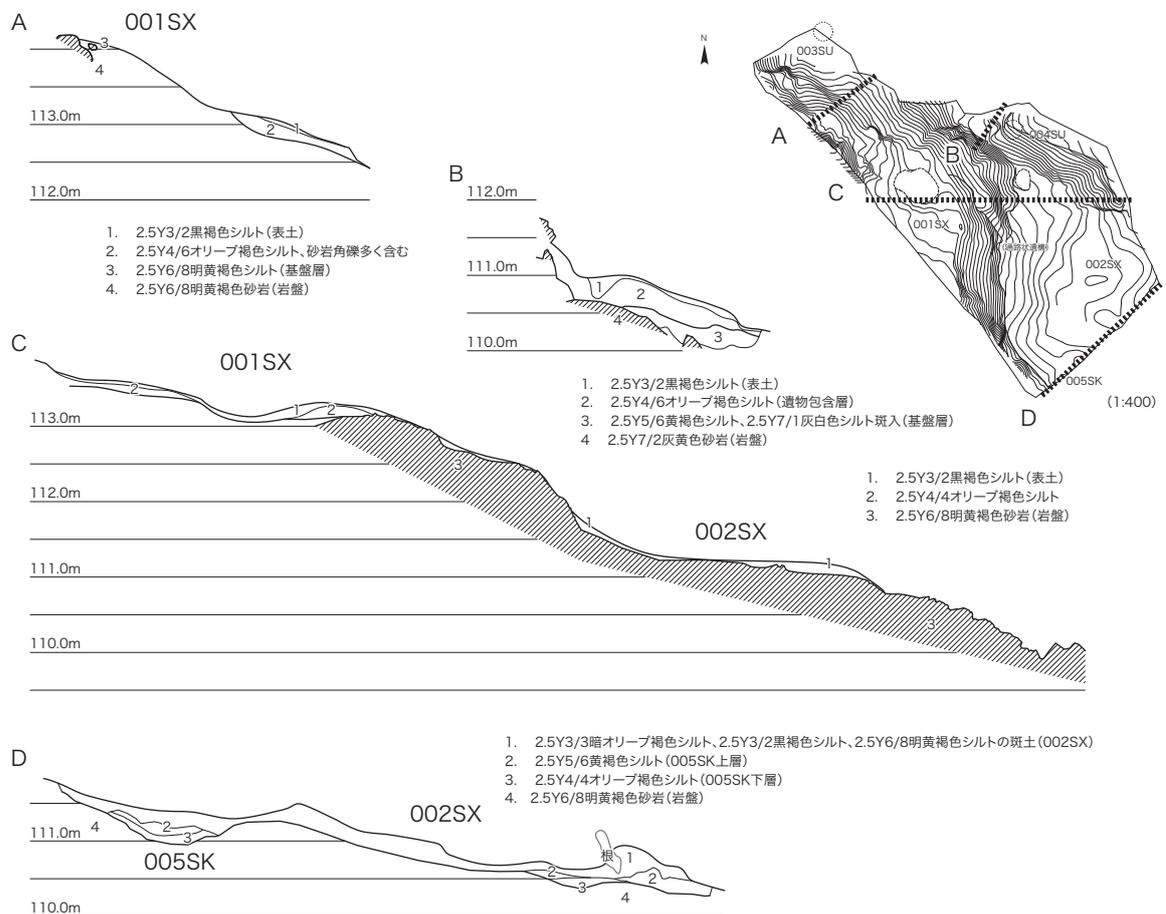
第7図 17A区調査前地形測量図 (1:200)



第8図 17A区平面図 (1:200)



第9図 17A区出土遺物分布図



第10図 17A区土層断面図(1:100)

(2) 遺物

概要

第3表 17A区出土遺物集計表

出土遺物の点数

17A区の調査においては、137点の土器と2点の瓦（接合後破片数）が出土した（第3表）。

出土遺物の組成

（瓦を除く）出土土器の8割以上（全時期の80.3%）は003SUと004SUから出土した土師器皿で、その他の1割程度（全時期の13.0%）が16世紀後

器種／遺構		003SU	004SU	その他	17A区計	計／ 時期別	計／ 全時期
山茶碗	碗	3	0	0	3	75.0%	2.2%
その他中世陶器	壺・甕類	0	1	0	1	25.0%	0.7%
計（中世）		3	1	0	4	100.0%	2.9%
碗類	天目茶碗	0	0	5	5	3.8%	3.6%
	丸碗	0	0	11	11	8.3%	8.0%
鉢・盤類	片口	0	0	1	1	0.8%	0.7%
その他近世陶器	仏餉具	1	0	0	1	0.8%	0.7%
土師器	皿	84	26	2	112	84.2%	81.8%
	鍋	0	1	2	3	2.3%	2.2%
計（近世）		85	27	21	133	100.0%	97.1%
計（全時期）		88	28	21	137	100.0%	
瓦	丸瓦	2	0	0	2		

葉から18世紀後葉の近世陶器・陶磁器である。近世陶器・陶磁器の器種は日常雑器としての碗類（天目茶碗、丸碗）や鉢・盤類（片口）が多く、それに加えて宗教具としての仏器（仏餉具）がある。13世紀の中世陶器も散見されるが、数量はごく少なく（全時期の2.9%）、周辺から混入した可能性が高い。土師器皿や瓦の多くも近世に帰属する可能性が高く、出土状況からは17世紀を中心とする時期が想定される。

遺物集積003SU（1～10）

出土遺物の概要

遺物集積003SU出土土器、瓦（第11図）として、渥美・湖西産山茶碗（1）、美濃産仏餉具（2）、土師器皿（3～9）、瓦（10）がある。渥美・湖西産山茶碗（1）は渥美3b型式に相当する。美濃産仏餉具（2）は灰白色の緻密な胎土が特徴的で、登窯第2段階第6小期、17世紀末葉から18世紀前葉に相当する。土師器皿（3～9）はいずれも非ロクロ成形で、外面未調整の中型品（3～6）、手捏ね成形に近い小型品（7・8）、やや厚手で内外面ナデの小型品（9）がある。口縁部先端に段を有する規格的な一群（3～5）、金雲母を含む胎土の個体（9）が特徴的である。瓦（10）は丸瓦の玉縁部分付近で、内面に縄目痕、吊り紐痕がある。時期は織豊期以降と思われる。

中世の遺物

近世の遺物

遺物集積004SU（11～17）

出土遺物の概要

遺物集積004SU出土土器（第11図）として、渥美・湖西産甕（11）、土師器皿（12～17）がある。土師器皿が集中して出土した地点からやや離れた位置で出土した渥美・湖西産甕（11）は摩滅が著しい。押印文の原体は縦線のみ。土師器皿（12～17）はいずれも非ロクロ成形で、やや厚手で内外面ナデの中型品（12・13）、薄手で体部が直立気味の中型品（14）、外面未調整で内面が平滑な中・小型品（15～17）がある。

中世の遺物

土師器皿

平場001SX（18・19）

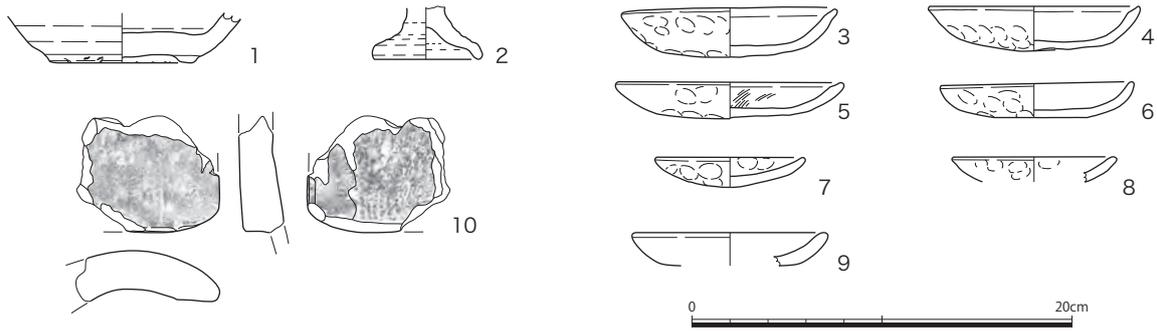
出土遺物の概要

平場001SX出土土器（第11図）として、初山産天目茶碗（18）、瀬戸産天目茶碗（19）がある。初山産天目茶碗（18）は灰色味が強い胎土が特徴的で、16世紀後葉に相当する。瀬戸産天目茶碗（19）は登窯第1段階第3小期前後、17世紀前葉前後に相当する。

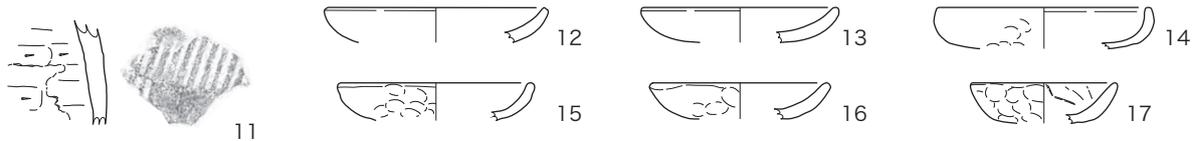
戦国時代の遺物

近世の遺物

遺物集積 003SU (1~10)



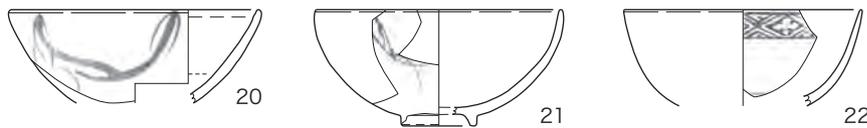
遺物集積 004SU (11~17)



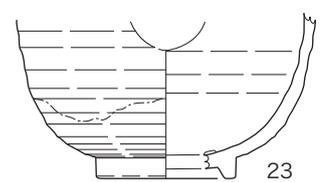
平場 001SX (18・19)



平場 002SX (20~22)



17A区周辺 (23)



第11図 17A区出土土器実測図 (1:4)

平場002SX (20~22)

平場 002SX 出土土器 (第 11 図) として、鉄絵で柳文を描いた瀬戸・美濃産柳茶碗 (20・21)、肥前産青磁染付丸碗 (22) がある。瀬戸・美濃産柳茶碗は瀬戸産 (20) と美濃産 (21) がある。いずれも登窯第 3 段階第 8 小期、18 世紀後葉に相当する。

出土遺物の概要
近世の遺物

17A区周辺 (23)

調査区周辺で採集した土器 (第 11 図) として、瀬戸・美濃産片口 (23) がある。体部が半球形、削り込み高台のいわゆる II 類片口で、高台周辺を除いて灰釉が施される。登窯第 3 段階第 8 小期前後、18 世紀後葉前後に相当する。

近世の遺物

参考文献

- 細江町教育委員会 1985 『初山焼 釜下古窯発掘調査報告書』
- 瀬戸市教育委員会 1990 『尾呂』
- 多治見市教育委員会 2006 『市之倉中 2 号窯・洞窯発掘調査報告書』多治見市埋蔵文化財発掘調査報告書第79号
- 藤澤良祐 2007 「総論」『愛知県史』別編 窯業 2 中世・近世 瀬戸系
- 栗原雅也 2009 「初山焼の紹介」『浜松市博物館館報』第21号 浜松市博物館
- 静岡県考古学会 2012 『古志戸呂の誕生～その生産と流通～』平成23年度静岡県考古学会シンポジウム資料集
- 安井俊則 2012 「渥美窯」『愛知県史』別編 窯業 3 中世・近世 常滑系
- 豊橋市教育委員会 2016 『普門寺旧境内—考古学調査編—』豊橋市埋蔵文化財調査報告書第140集

第4章 17B区の調査

(1) 遺構

概要

平場群F地区

丘陵斜面下位、現本堂裏手の17B区は東向き尾根に設けられた平場群F地区のF-1、F-2（豊橋市教育委員会による）に重複する。周囲の標高は約130mである。豊橋市教育委員会の分布調査によって、F-1は「中央に高さ1mほどの石積み」、「南端近くに一辺1.5mほどの方形の石積み（墓か）」、F-2は南西端に長さ4.5mの岩塊があることがすでに確認されていて、前者において渥美2b・3a型式の山茶碗4点、後者において山茶碗小皿1点（時期不明）の遺物が採集されている（第12図）。17B区の発掘調査としては、平場F-2を平場006SX、平場F-1を平場007SX、「方形の石積み（墓か）」を008SZ、丘陵斜面から続く地形を沢009NRとした（第13・14図）。

平場F-1 (302~304)

(第139図)

302

303

304

平場F-2 (305)

305

0 10cm

検出遺構

第12図 平場F-1・2地区
採集遺物 (1:4)

平場006SX

遺構の概要

豊橋市教育委員会による平場群F地区のF-2に相当する17B区上位の平場（の南端付近）を006SXとした。南端は4.0~5.0mのチャートの岩塊がある。分布調査時の計測値による規模は長さ16.0m、最大幅6.5mで、調査前地形測量による計測値は長さ14.0m、最大幅6.0mである。

層序

表土下は暗褐色シルトが堆積し、同層が平場造成時の整地層であることも考慮して、その上面で遺構検出を試みたが、植生によると思われる土坑状の落ち込み以外、明確な遺構は確認されなかった。トレンチによって堆積状況を確認した際には、同層とその下位に堆積する礫を多く含む明黄褐色シルト層中に戦国時代の土師器鍋等が包含されることが判明したことから、これらを戦国時代以降の堆積と判断して、基盤層上面までを掘削し、遺構を確認することとした（第16図）。しかし、発掘調査は平場の南端のみを対象としたこともあって、周辺に明確な遺構は確認されなかった。

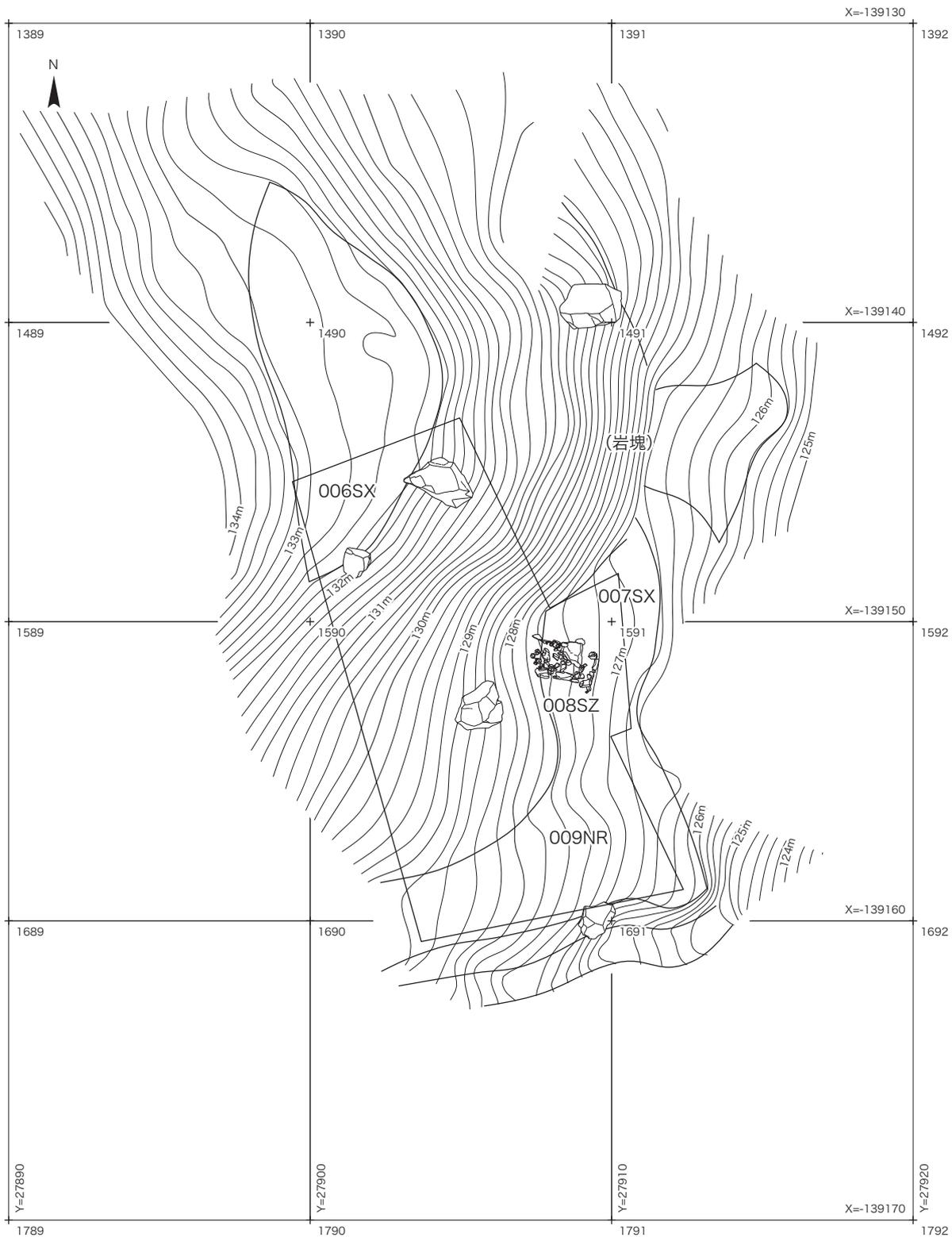
検出状況

東向き斜面の礫群

東向きの斜面側は巨礫までを含むチャートの礫が集中して検出された。これらが平場縁辺を区画した石列が崩落したものである可能性も想定されたが、付近の基盤層中にも同様の礫が多く含まれていたこと等から、石列の施工を積極的に認識することは難しいと判断した。礫群の周囲からは渥美・湖西産山茶碗・甕等、中世前期の遺物に加えて、古瀬戸後期から大窯前半期の播鉢、土師器内耳鍋等、中世後期から戦国時代の遺物（24~71）もまとめて出土した。平場南端付近の巨礫周囲は残存状況が良好な山茶碗が多く、近辺で接合する個体が多い（24・34等）。南向きの丘陵斜面においても、やや散漫ながらも、平場周辺と同様の遺物（72~102）が出土した。遺物、礫の検出状況から、平場の造成

遺物出土状況

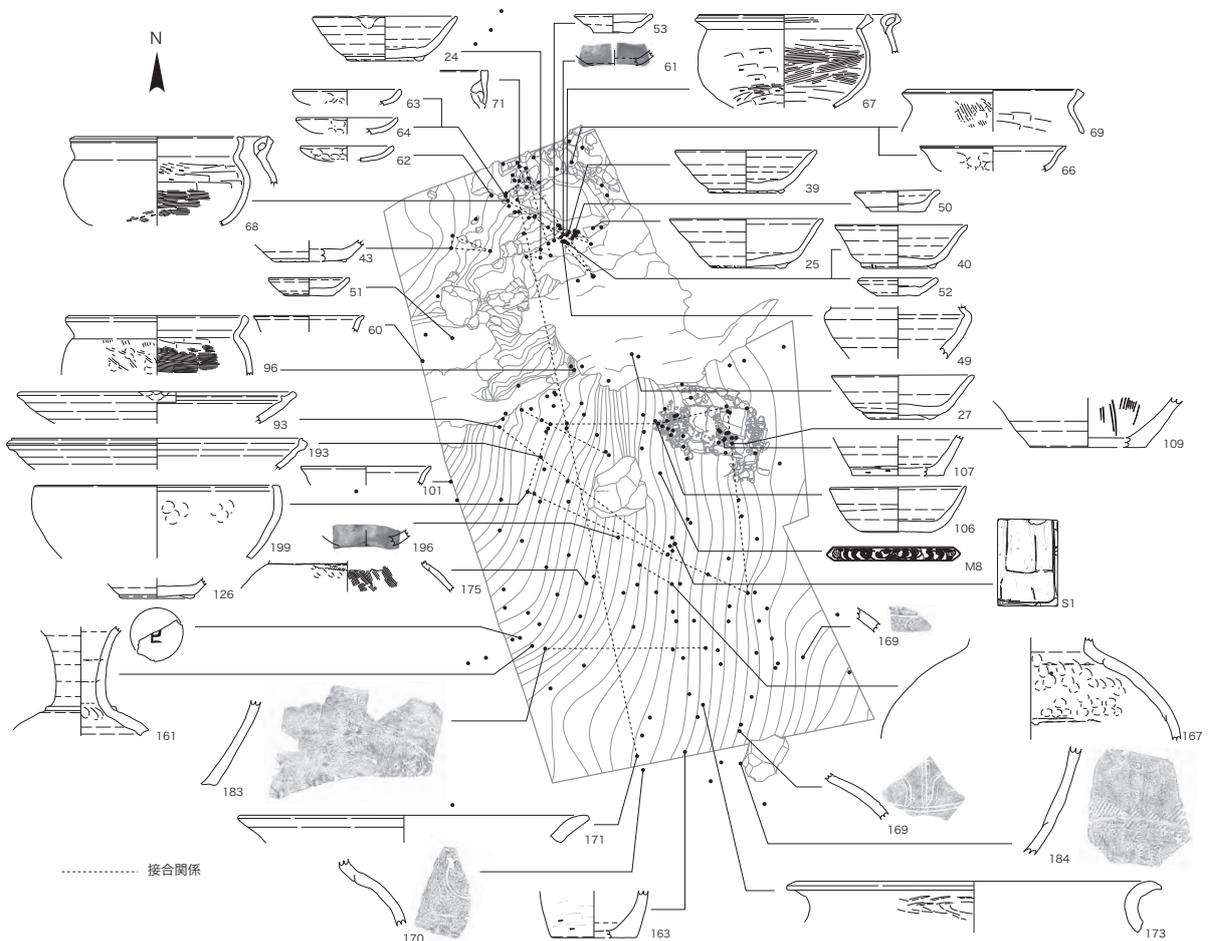
遺物の接合関係



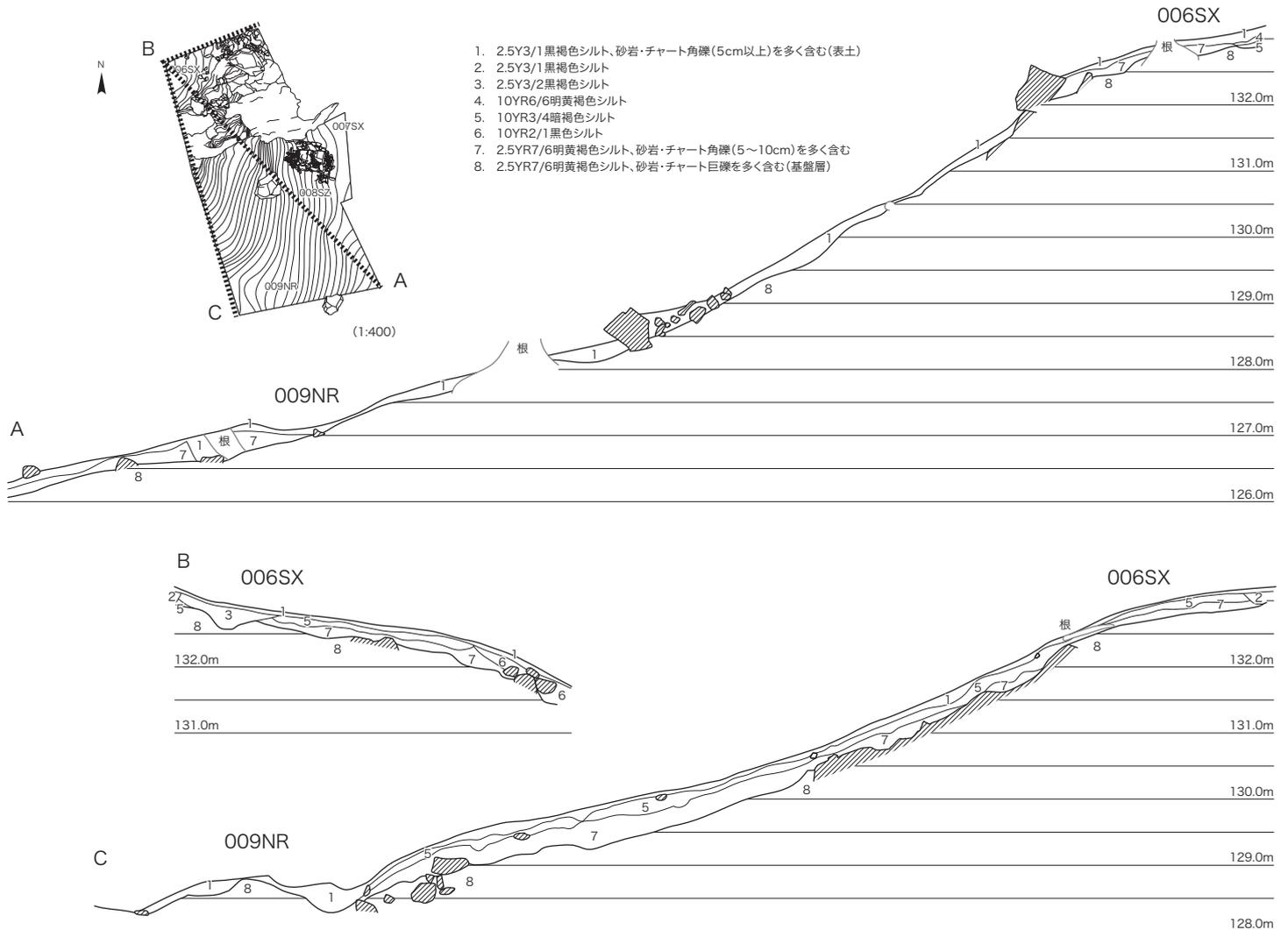
第13図 17B区調査前地形測量図 (1:200)



第14図 17B区平面図 (1:200)



第15図 17B区出土遺物分布図



第16図 17B区土層断面図 (1:100)

以降、機能停止後も斜面の流出、崩壊を繰り返していたことが推測される (第 15 図)。

平場007SX

豊橋市教育委員会によるF地区のF-1に相当する17B区下位の平場を007SXとした。南端は沢009NRに連続する。分布調査時の計測値による規模は長さ15.0m、最大幅5.0mとされるが、平場は小型で、調査前地形測量による計測値は長さ8.0m、最大幅4.5mである。調査前から「墓か」ともされる石積み008SZが露呈していた。

遺構の概要

石積み008SZ

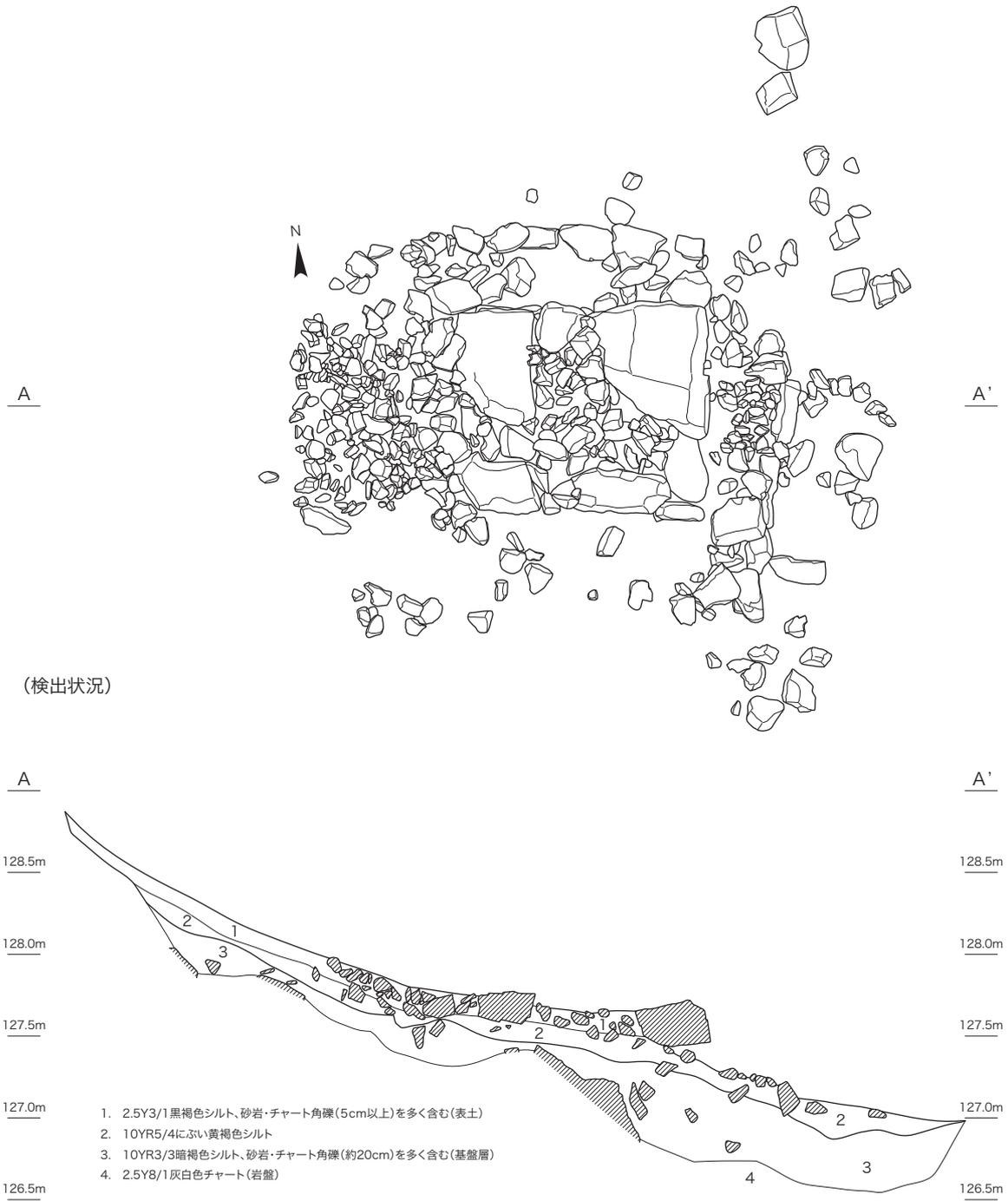
東向き平場007SXに構築され、調査前から「墓か」ともされていた石積みを008SZとした。北端の石列はほぼ岩塊に接するような位置関係にある(第14図)。墓標等は認められない。

石積み008SZ

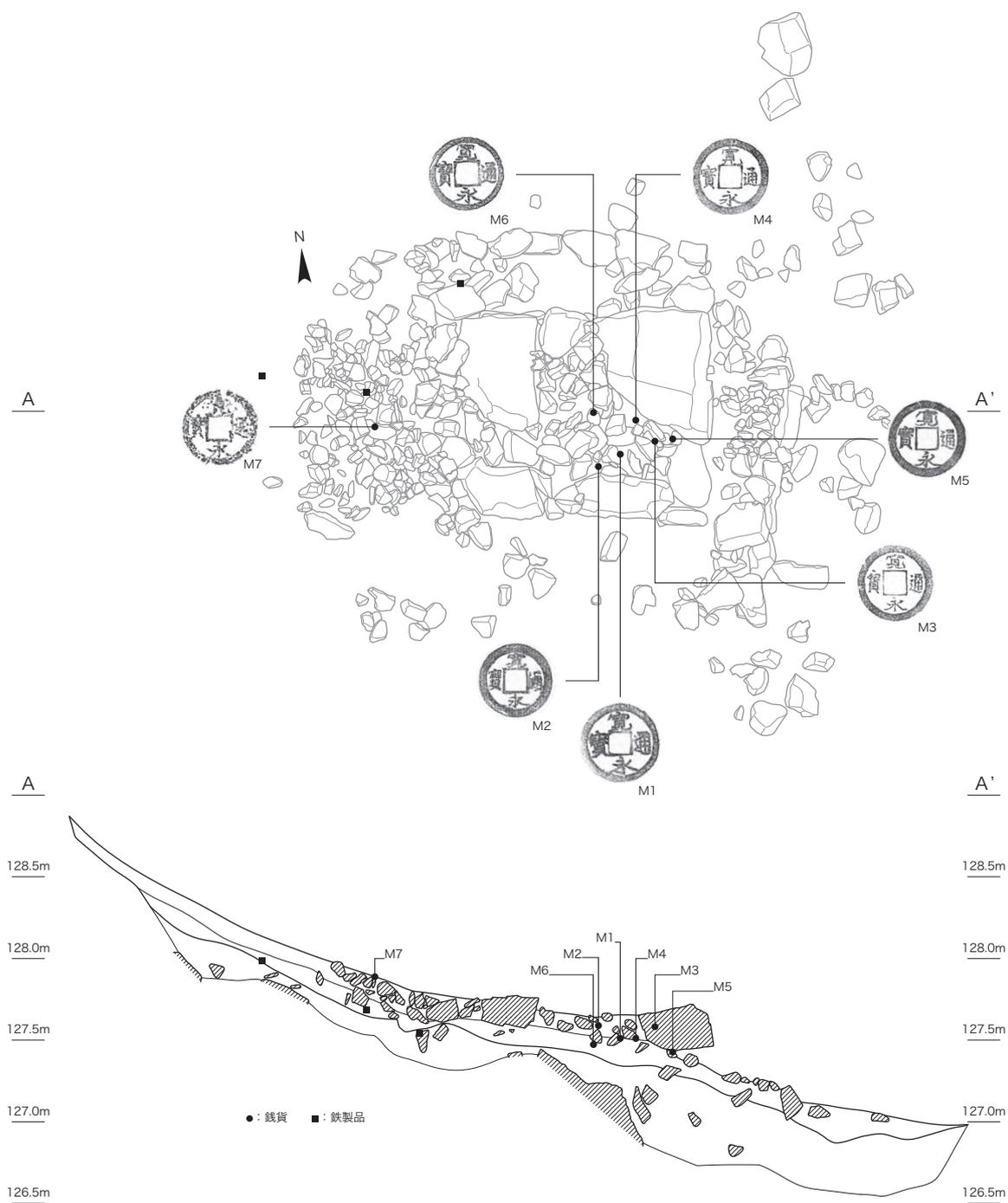
遺構の概要

上段は北西隅と北東隅に大型扁平の石材を据え、南西隅と南東隅は石材の長手が側辺となるように据えている。下段は北東隅と南辺の基底石が失われていた。丘陵側の西辺は周辺に基底石とするような大型の石材が認められないことから、構築時、背後に基底石は据えていなかったと思われる。規模は上段が長軸(東西)1.50m、短軸(南北)1.30m、(上

石積みの構築



第17図 008SZ検出状況平面図・土層断面図 (1:40)



第18図 008SZ遺物（銭貨・鉄製品）出土状況図（1:40）



第19図 008SZ平面図・立面図 (1:40)

段までの)高さ 0.8 mで、南辺と西辺の基底石を欠く下段は確定が難しいが、およそ長軸(東西) 2.7m、短軸(南北) 2.5 m、(下段までの) 高さ 0.4 mである。基底石で囲まれた空間、背後の緩斜面には拳大の礫が「集積」されていた。「集積」された礫は、斜面から崩落した礫や岩塊から剥離した礫と明確に峻別することは難しいが、上段の石列の北辺と南辺にも一致するような状況も看取されることから、石積みの構築に際して「集積」されたと判断した(第 17・19 図)。石積みや集積された礫の石材は周囲に産出するチャートと砂岩で、石材の選択に有意な傾向は認められなかった。

礫の「集積」

使用石材

集積された礫群に混じって銭貨(寛永通宝) 6 点(M1～M6)、石積み背後の礫群上面において銭貨(鉄銭) 1 点(M7)、礫群下面において錆化で細片化した鉄製品が出土した(第 18 図)。その他、石積み構築以前の堆積層中に含まれていたと推測される中世の遺物が礫と混在して出土したが、石積みの構築時の可能性がある遺物としては、土師器皿の細片が出土したのみであった。銭貨には鉄銭(M7)が含まれることから、石積みは 18 世紀中葉以降に構築(または改築)されたと推測される。つまり、石積み 008SZ の構築(または改築)が、17 世紀後葉に進められた普門寺復興事業としての山麓への境内移転後であることからすると、普門寺復興事業の顕彰等に関係する可能性も想定される。

遺物出土状況

構築(改築)時期

沢 009NR

沢に続く緩斜面を 009NR とした。沢の南岸は切り立った砂岩の崖で、北岸にチャートの岩塊が露出する状況とは対照的である。

検出状況

地表から遺物が散乱した状態で、礫を多く含む堆積層中には中世前期を主体とする遺物を包含し、渥美・湖西産山茶碗・甕・蓮弁文壺・刻文壺等(110～200)が多く出土した。平場 006SX 周囲と比較して、個体の残存状況は良好ではなく、出土地点をかなり隔てて接合する個体(183・199 等)も少ない。006SX 周辺(調査区の北端付近)と 009NR(調査区の南端付近)で接合した個体(171)もある(第 15 図)。器種は 006SX と比較して、渥美・湖西産壺・瓶・甕類がやや目立つようにも思われる。これらの遺物は平場や斜面の流出に加えて、沢の上流側からの土砂の流入によってもたらされた一群であることは容易に推察される。その他、009NR から出土した特徴的な遺物として、唐草文をあしらった青銅製飾金具(M8)、著しい錆化で形状の把握が困難な若干の鉄製品、泥質凝灰岩製石硯(S1)がある。

遺物出土状況

遺物の接合関係

金属製品

石製品

(2) 遺物

概要

第4表 17B区出土遺物集計表

出土遺物の点数

17B区の調査においては、800点の土器（接合後破片数）と若干の金属製品、石製品が出土した（第4表）。出土遺物の集計は有意な出土状況が認められなかったことから、調査区で一括した。

出土遺物の組成

出土土器の約半数は中世陶器の山茶碗（54.6%）で、その大部分が碗（47.4%）

器種			17B区計			
中世陶器	山茶碗	碗	379	47.4%	437	54.6%
		小皿	41	5.1%		
		片口鉢	16	2.0%		
		片口碗	1	0.1%		
	壺・瓶・甕類	117	14.6%	117	14.6%	
古瀬戸・大窯陶器	碗類	天目茶碗	2	0.3%	19	2.4%
	皿類	丸皿または稜皿	1	0.1%		
	鉢・盤類	播鉢	14	1.8%		
	その他	匣鉢	2	0.3%		
中国陶磁	青磁	碗	4	0.5%	4	0.5%
土師器	皿		54	6.8%	223	27.9%
	鍋		169	21.1%		
計			800	100.0%	800	100.0%

である。その他、小皿（5.1%）、片口鉢（2.0%）、片口碗（0.1%）がある。同じく中世陶器の壺・瓶・甕類は1、2割程度（14.6%）を占める。これらの多くは渥美・湖西産で、尾張型の山茶碗、常滑産の壺・甕類も散見される。土師器は2、3割程度（27.9%）で、鍋が相対的に多い（21.1%）。鍋は内耳鍋が多く、伊勢型鍋はごく少ない。古瀬戸・大窯陶器は全体としては少ないが、日常雑器としての播鉢が相対的に多い（1.8%）。中国陶磁は龍泉窯系の青磁碗（0.5%）のみで、器種、出土量ともに通常の遺跡と同様の傾向を示す。平場006SX（24～102）

平場の周辺と斜面

平場 006SX から丘陵斜面にかけて出土した土器（第20・21図）について、便宜的に平場 006SX 周辺においてやや集中して出土した土器（24～71）と、平場 006SX 斜面において散在して出土した土器（72～102）に分離した。

出土遺物の概要

平場 006SX 周辺においてやや集中して出土した土器（第20図）として、渥美・湖西産山茶碗（24・25・27～48）、同小皿（50～56）、尾張型山茶碗（26）、同片口鉢（57）、常滑産片口碗（49）、渥美・湖西産甕（58）、同壺・瓶類（59）、瀬戸産天目茶碗（60）、青磁碗（61）、土師器皿（62～66）、土師器鍋（67～71）がある。

山茶碗

渥美・湖西産山茶碗（24・25・27～48）、同小皿（50～56）は渥美 3a 型式（24・25）以外、同 3b 型式（27～47）で占められる。口縁部を輪花状に指で押さえた碗（24）、高台がない碗（44）もある。山茶碗体部（48）内面には朱墨がある。尾張型山茶碗（26）は第6型式に相当する。片口碗（49）は体部上半が強く張り出し、口縁部付近が強く屈曲する形態から、渥美産ではなく常滑産とした。渥美産甕（58）の押印文の原体は縦線のみ。青磁碗（61）は龍泉窯系 I 類に相当する。土師器皿はいずれも非ロクロ成形で、外面未調整で内面が平滑な中型品（62～64）、薄手の小型品（65）、口縁部が外折する大型品（66）がある。土師器鍋（67～71）は体部が半球形で、口縁部が外反する内耳鍋内耳鍋（67～70）と半球形の内耳鍋（71）がある。前者が多く、後者が少ない。

尾張型山茶碗

片口碗

渥美産甕

中国陶磁

土師器皿

土師器鍋

平場 006SX 斜面において散在して出土した土器（第 21 図）として、渥美・湖西産山茶碗（72～83）、同小皿（84～86）、同片口鉢（87・90）、尾張型山茶碗片口鉢（88・89）、渥美・湖西産壺・甕類（91・92）、古瀬戸播鉢（93）、青磁碗（94）、土師器鍋（95・96）、土師器皿（97～102）がある。

出土遺物の概要

渥美・湖西産山茶碗（72～83）、同小皿（84～86）は渥美 3b 型式で占められる。渥美・湖西産甕（91）の押印文の原体は縦線と横線の格子。古瀬戸播鉢（93）は片口がある。後 IV 期新に相当する。青磁碗（94）は体部外面に蓮弁文がある龍泉窯系 I—5 類に相当する。土師器鍋（95・96）は伊勢型鍋（95）と、体部が半球形で口縁部が外反する内耳鍋（96）がある。土師器皿（97～102）はいずれも非ロクロ成形で、内外面ナデの中型品（97）、外面未調整で内面が平滑な小型品（98）も認められるが、口縁部が外折する大型品（99～102）が多い。

渥美・湖西産陶器
古瀬戸
中国陶磁
土師器鍋
土師器皿

以上、平場 006SX の周辺から丘陵斜面にかけて出土した土器については、渥美・湖西製品（24・25・27～48・50～56・58・59・72～87・90～92）のほとんどが 13 世紀中葉に比定される。尾張型山茶碗（26）、常滑産と思われる片口碗（49）、青磁碗（61・94）、土師器伊勢型鍋（95）も同時期の前後に対応する。一方、古瀬戸陶器（93）、瀬戸産陶器（60）、土師器内耳鍋（67～71・96）は 15 世紀から 16 世紀に比定される。土師器皿は薄手の小型品（65・98）が前者の一群、その他（62～64・66・97・99～102）が後者の一群に対応すると考えられる。

出土遺物の時期

石積み 008SX（103～109）

石積み 008SX 出土土器（第 21 図）は、遺構の構築時に周囲に散在していた土器が混入したもので、平場 006SX 斜面、沢 009NR（後述）の出土土器と異なるところはない。出土土器としては、渥美・湖西産山茶碗（103～106）、同壺・瓶類（107）、同甕（108）、瀬戸産播鉢（109）がある。

出土遺物の概要

渥美・湖西産山茶碗（103～106）はいずれも渥美 3b 型式で、高台がない碗（106）もある。同甕（108）の押印文の原体は縦線のみ。瀬戸産播鉢（109）は使用痕が顕著である。

渥美・湖西産陶器
瀬戸・美濃産陶器

沢 009NR（110～200）

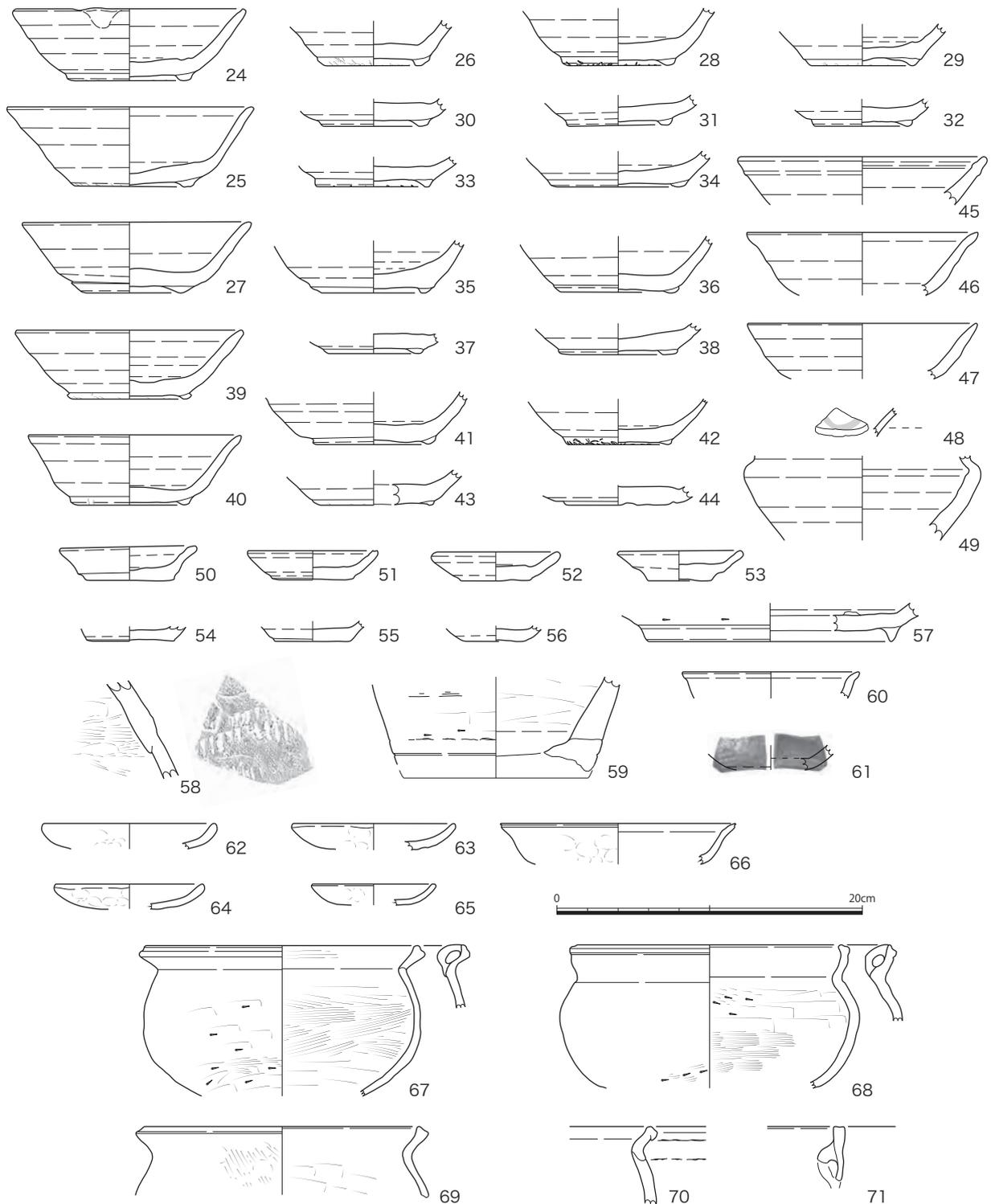
沢 009NR 出土土器（第 22・23 図）として、二川産灰釉陶器（112）、渥美・湖西産山茶碗（110・111・113～148）、同小皿（149～153）、同片口鉢（157～160）、尾張型山茶碗片口鉢（154～156）、渥美・湖西産壺・瓶類（161～170）、同甕（171～190）、常滑産壺・甕類（191）、瀬戸産播鉢（192）、同天目茶碗（193）、同鉄釉丸皿または稜皿（194）、同匣鉢（195）、青磁碗（196）、土師器皿（197）、土師器鍋（198～200）がある。

出土遺物の概要

渥美・湖西産山茶碗（110・111・113～148）、同小皿（150～153）は口縁部が玉縁状を呈する渥美 2a 型式（110・111）を除く多くは同 3b 型式に相当する。126 は底部外面に墨書がある。墨書は記号のようにも思われるが、判然としない。渥美・湖西産片口鉢（158～160）は断面三角形の高台を付す一群（158・159）に加えて、低平な高台を付す個体（160）もある。渥美・湖西産壺・瓶類（161～170）は、頸部に突帯を付す長頸瓶（161・162）、通有の広口壺（166・167）、蓮弁文壺（165・168・170）が含まれる。渥美・湖西産甕（171～190）の押印文の原体は縦線のみ（175・177・178・

渥美・湖西産陶器
墨書

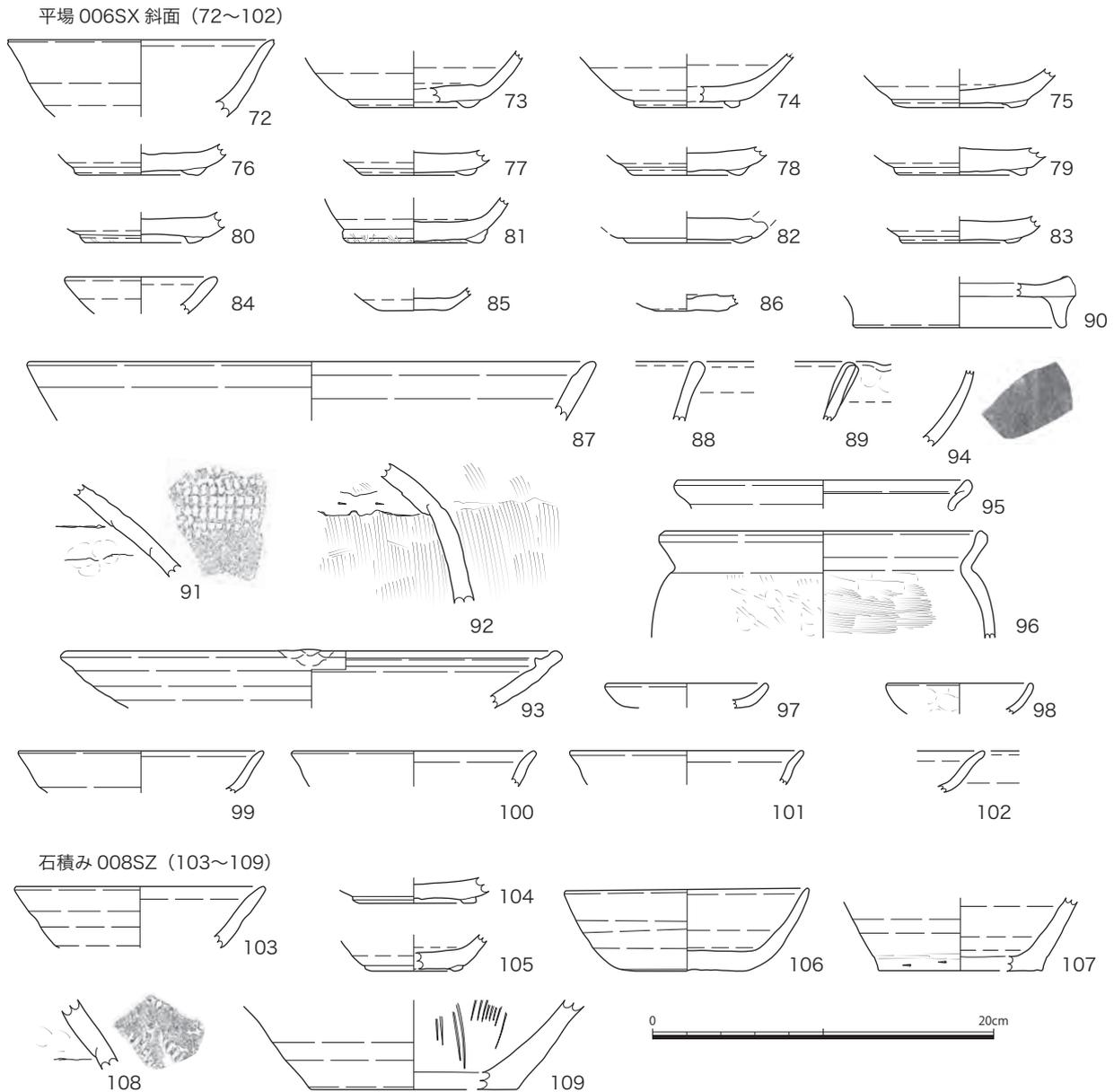
平場 006SX 周辺 (24~71)



第20図 17B区平場006SX周辺出土土器実測図 (1:4)

180~182・184~187・189)が多い。その他、縦線に1条の横線を加えた押印(188)、格子(179・190)がある。瀬戸産播鉢(192)は大窯第1段階に相当する。瀬戸産天目茶碗(193)は平場006SX周辺出土の天目茶碗(60)と同一個体の可能性が高い。高台

大窯



第21図 17B区平場006SX斜面・石積み008SZ出土土器実測図 (1:4)

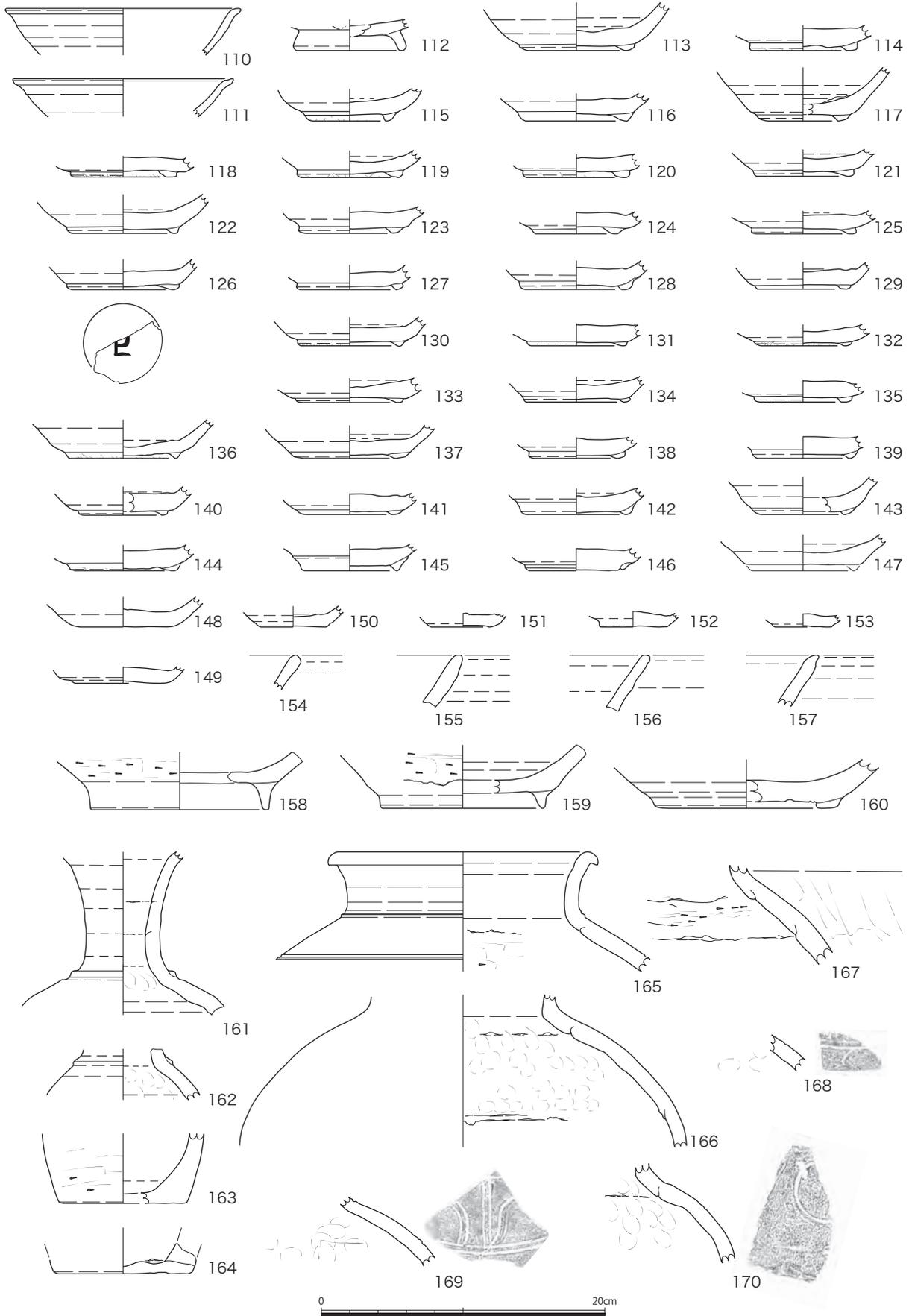
周辺を錆釉で化粧掛けし、鉄釉を施す。瀬戸産鉄釉丸皿または稜皿 (194) を含めて大窯第1・2段階に相当する。匣鉢 (195) も同段階に相当する可能性が高い。青磁碗 (196) は龍泉窯系I類に相当する。土師器鍋 (198~200) は体部が半球形で、口縁部が外反する内耳鍋 (198) と半球形の内耳鍋 (199・200) がある。

中国陶磁
土師器鍋

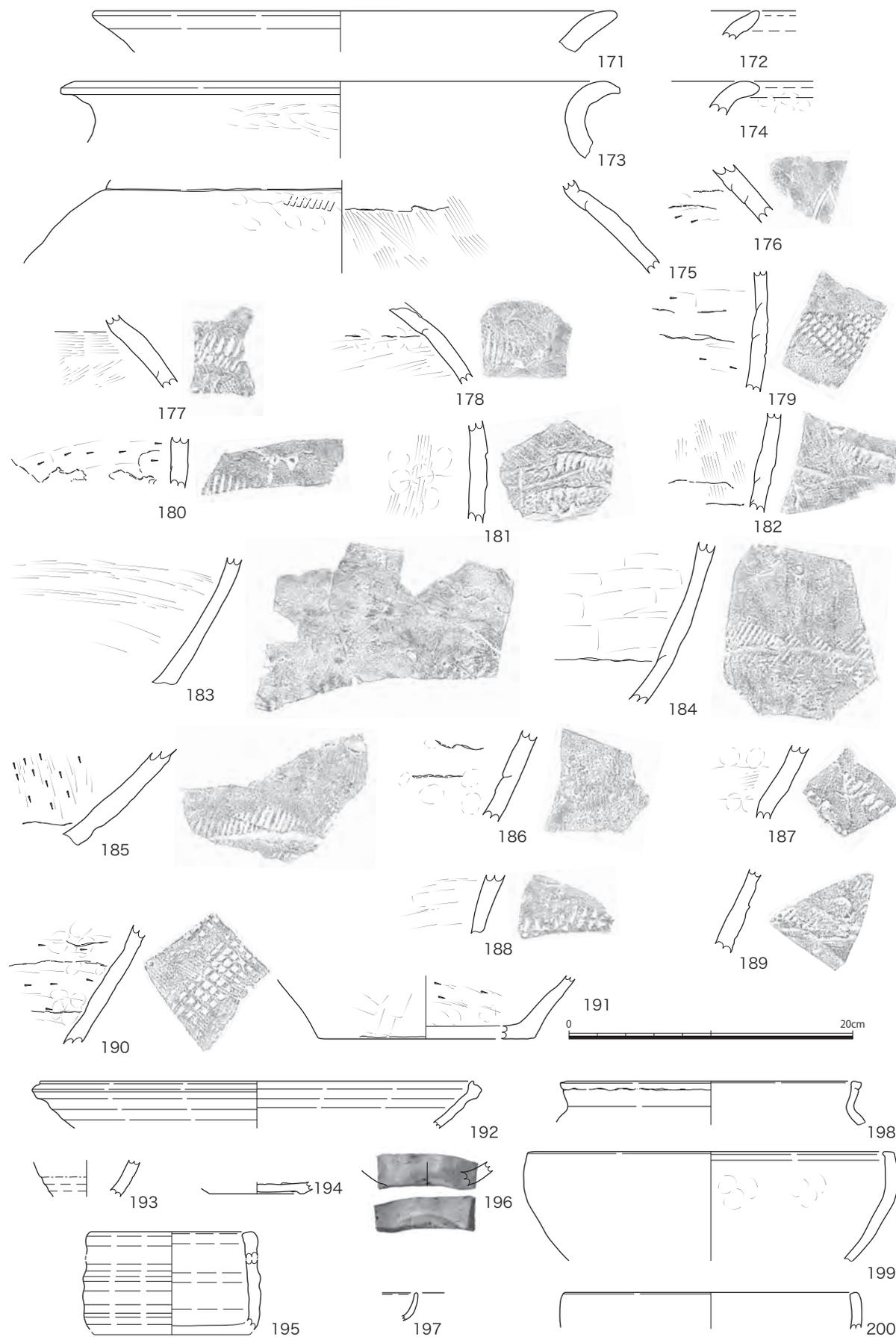
以上、沢009NRにおいて出土した土器については、二川産または渥美・湖西産陶器 (110~153・157~191) が11世紀から13世紀中葉に比定される。青磁碗 (196) を含め、山茶碗、小皿のほとんどは13世紀中葉に比定されるが、長頸瓶 (161・162)、蓮弁文壺 (168・169) 等、12世紀後葉から13世紀前葉に比定される器種も散見される。後者は上流側の平場から流入した遺物群であろう。一方、瀬戸産陶器 (192~195)、土師器内耳鍋 (198~200) は15世紀から16世紀に比定される。

出土遺物の時期

沢 009NR (110~200)



第22図 17B区沢009NR出土土器実測図(1) (1:4)



第23図 17B区沢009NR出土土器実測図(2) (1:4)

金属製品 (M1)

金属製品の概要

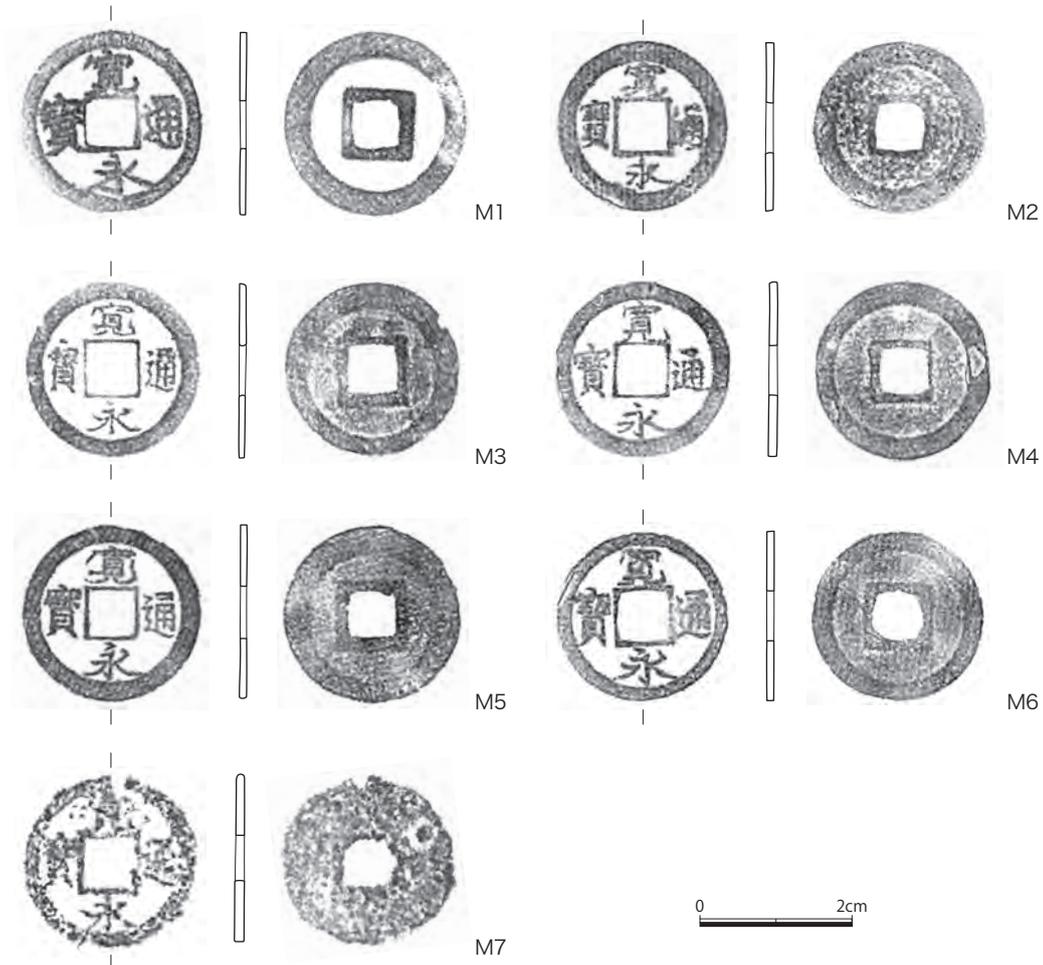
銭貨

青銅製飾金具

蛍光X線分析

17B区において出土した金属製品(第24～26図)として、石積み008SZ出土の銭貨(M1～M7)、沢009NR出土の青銅製飾金具(M8)がある。銭貨(M1～M7)はいずれも寛永通宝で、古寛永(M1・M2)、新寛永(M3～M6)、鉄銭(M7)がある。青銅製飾金具(M8)は折れ曲がった状態であるが、長さ14.2cm、幅0.5cmに復元される。両端は鉄鉾で鉾留めされ、中央付近にも鉾留め用と思われる孔が穿たれる。鉾頭径は0.4cmである。表面は外周に沿った区画と唐草文を陰刻し、刻線間には魚々子文を施す。なお、蛍光X線分析を実施したが、金等の成分は検出されなかった。

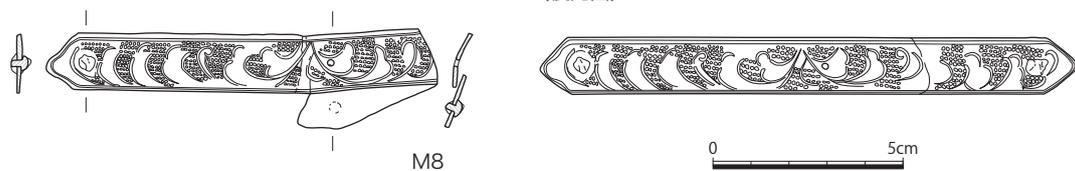
石積み008SZ (M1～M7)



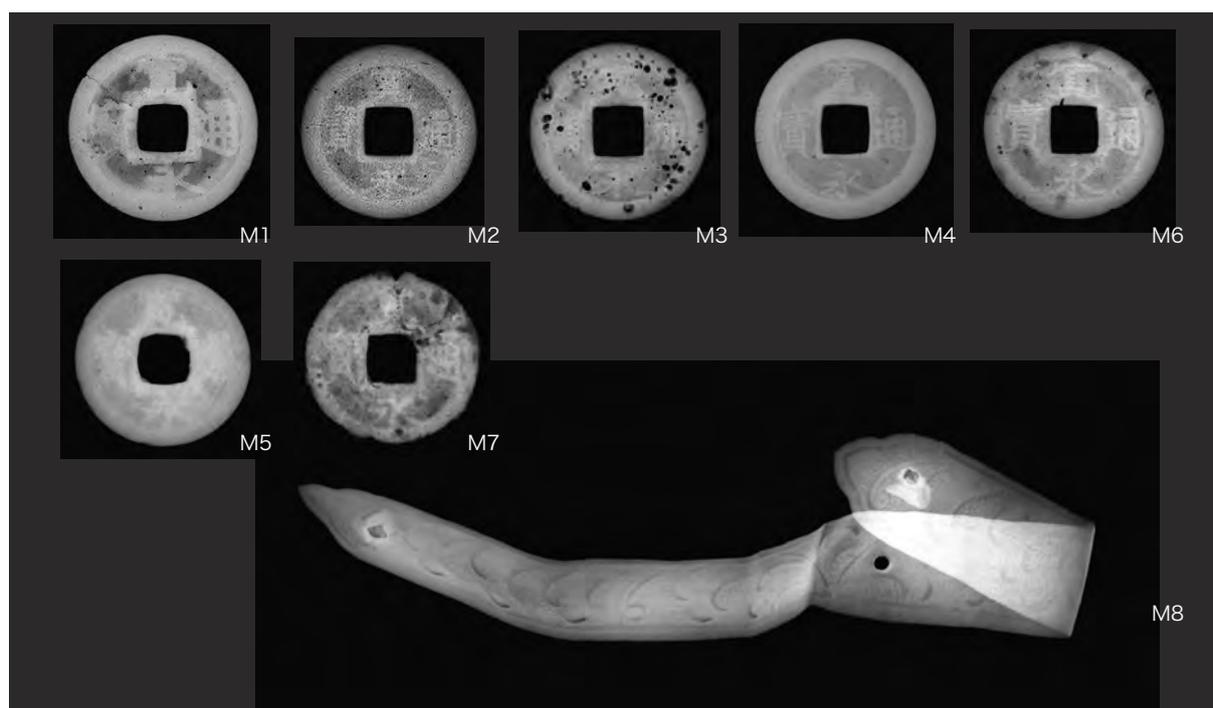
第24図 17B区石積み008SZ出土銭貨実測図 (1:1)

沢009NR (M8)

(復元図)

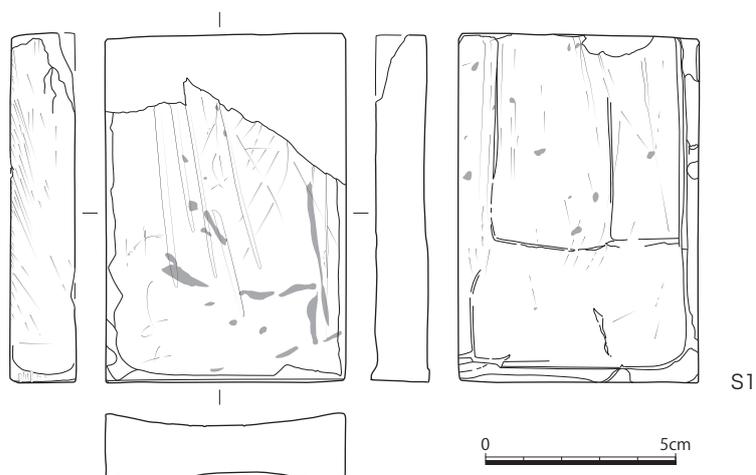


第25図 17B区沢009NR出土金属製品実測図 (1:2)



第26図 17B区出土金属製品のX線写真

沢 009NR (S1)



第27図 17B区出土石製品実測図 (1:2)

石製品 (S1)

17B区において出土した金属製品(第27図)として、沢 009NR 出土の石硯(S1)がある。
石硯(S1)は長方硯で、使用した両面には墨痕もある。石材は泥質凝灰岩である。

石製品の概要
使用石材

参考文献

横田賢次郎・森田 勉 1978「太宰府出土の輸入中国陶磁器について—型式分類と編年を中心として—」『九州歴史資料館研究論集』4 九州歴史資料館
藤澤良祐 2007「総論」『愛知県史』別編 窯業2 中世・近世 瀬戸系
安井俊則 2012「渥美窯」『愛知県史』別編 窯業3 中世・近世 常滑系
豊橋市教育委員会 2016『普門寺旧境内—考古学調査編—』豊橋市埋蔵文化財調査報告書第140集

第5章 立会調査出土遺物

概要

立会調査地点	本章においては、東向きの尾根に設けられた平場群F・Hを隔てる沢の立会調査で出土した遺物を報告する（第28～31図）。報告に際しては、沢の立会調査を実施した3地点
沢の採集遺物	を下流側から、それぞれ「立会A」、「立会B」、「立会C」とした。加えて立会調査地点間やその周囲で、（工事用車両の進入や工事掘削土の移動等によって）地表面が影響を受ける部分においても比較的多くの遺物が採集されている。ここではそれらを「立会沢」とした。
	立会A（201～212）
立会調査地点 出土遺物の概要	立会Aの調査地点は北岸丘陵斜面約20m上方に小型の平場F—9、約30m上方に大型の平場F—7、F—8が分布する。立会A出土遺物（第28図）として、渥美・湖西産山茶碗（201～206）、同片口鉢（207）、同壺・瓶類（208～210）、古瀬戸四耳壺（211・212）がある。渥美・湖西産山茶碗（201～206）はいずれも渥美3b型式に相当する。体部上半を施釉する壺・瓶類（208）は渥美・湖西産としたが、器形、釉調がやや特異で、渥美・湖西産ではない可能性もある。古瀬戸四耳壺（211）は接合しない未図化の体部がある。前期に相当する。同（212）は前期とも思われるが判然としない。
渥美・湖西産陶器	
古瀬戸	
	立会B（213～223）
立会調査地点 出土遺物の概要	立会Bの調査地点は北岸丘陵斜面約40m上方に大型の平場F—10が分布する。立会B出土遺物（第29図）として、渥美・湖西産山茶碗（213～221）、同小皿（222）、瓦（223）がある。渥美・湖西産山茶碗（213～221）、同小皿（222）は渥美3a型式（213・214）以外、いずれも同3b型式に相当する。瓦（223）は凸面は格子叩きで、凹面には離れ砂が付着する。
渥美・湖西産陶器	
瓦	
	立会C（224～296）
立会調査地点 出土遺物の概要	立会Cの調査地点は北岸丘陵斜面約20m上方に小型の平場F—13、南岸丘陵斜面約20m上方に大型の平場H—7が分布する。沢の両岸近くに大型の平場が分布することも関係して、同調査地点においては多くの遺物が出土している。立会C出土遺物（第30図）として、渥美・湖西産山茶碗（224～276）、同小皿（277～282）、同片口鉢（284）、尾張型山茶碗片口鉢（283）、渥美・湖西産壺・甕類（285～287・290～295）、常滑産甕（288・289）、白磁皿（296）がある。渥美・湖西産山茶碗（224～276）、同小皿（277～282）は渥美3a型式（226・227）以外、いずれも同3b型式に相当する。231は内外面から破断面が顕著に被熱する。269は底部外面に墨書がある。1字目は「最」と判読される。2字目（以降）の判読は困難であるが「覚」とした。渥美・湖西産甕の口縁部（286）は内外面から破断面が顕著に被熱する。同体部（287）には記号文または刻文があるが、灰釉が厚く施釉され、全体の意匠は判然としない。常滑産甕の押印文（288）は格子に菊花を加えた意匠で、渥美・湖西産甕の押印文は縦線のみ（290・292・293）に加えて、格子（291）がある。渥美・湖西産蓮弁文壺（295）は渥美2b型式に相当する。白磁皿（296）は口縁端部を口禿げにするIX類で、13世紀後半から14世紀前半に相当する。
渥美・湖西産陶器	
墨書	
煤の付着	
中国陶磁	

立会沢 (297~340)

立会調査時に沢で採集された遺物 (第31図) として、二川産灰釉陶器 (297)、渥美・湖西産山茶碗 (298~314)、同小皿 (315・316)、同片口鉢 (317)、同壺・甕類 (318~337)、常滑産広口壺 (338)、土師器皿 (339)、土師器伊勢型鍋 (340) がある。渥美・湖西産山茶碗 (298~314)、同小皿 (315・316) は渥美3a型式 (298~300)、同3b型式 (301~316) で、後者が多い。同蓮弁文壺 (318・319) は体部上半に突帯を付す個体 (318) が含まれる。突帯によって区画された体部上半には蓮弁文が確認される。同甕の押印文は縦線のみ (323・326・328・331~333・335) に加えて、縦線に1条の横線を加えた押印 (324・327・336)、縦線に交差する斜線を加えた押印 (328)、縦線と横線の格子 (325・330)、斜格子 (329)、縦線と横線の組み合わせ (334) がある。常滑産広口壺は常滑6a型式に相当する。335は外面に煤が付着する。

出土遺物の概要

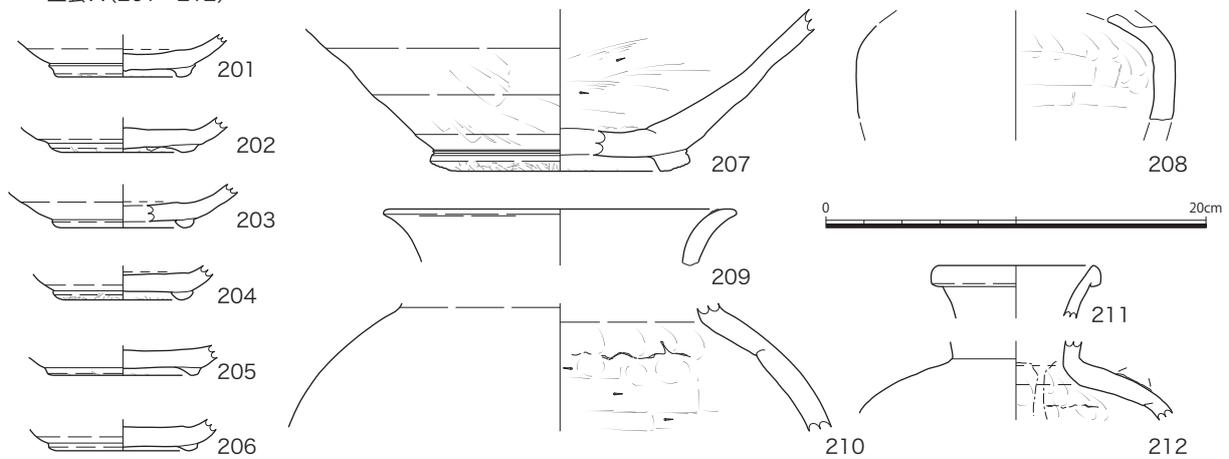
渥美・湖西産陶器

常滑産陶器

参考文献

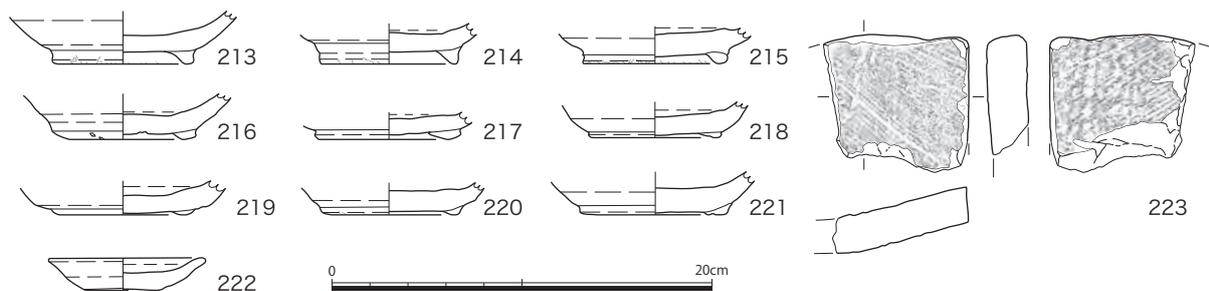
- 原 廣志 1999 「横地氏関連遺跡群と周辺遺跡の特徴について」 『横地城跡—総合調査報告書—』 菊川町教育委員会
 藤澤良祐 2007 「総論」 『愛知県史』別編 窯業2 中世・近世 瀬戸系
 安井俊則 2012 「渥美窯」 『愛知県史』別編 窯業3 中世・近世 常滑系
 中野晴久 2012 「常滑窯」 『愛知県史』別編 窯業3 中世・近世 常滑系
 豊橋市教育委員会 2016 『普門寺旧境内—考古学調査編—』 豊橋市埋蔵文化財調査報告書第140集

立会A (201~212)



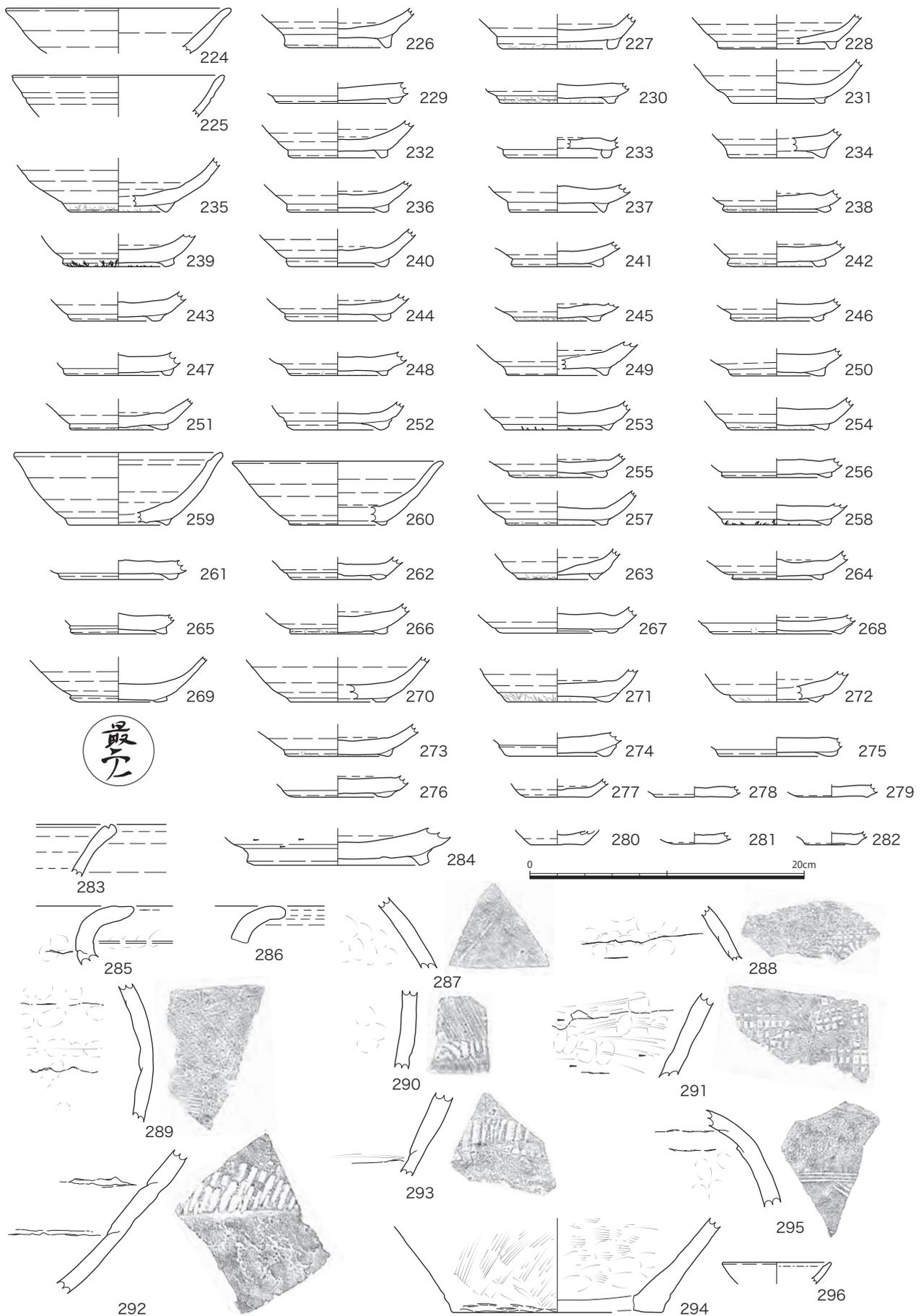
第28図 立会A出土遺物実測図 (1:4)

立会B (213~223)



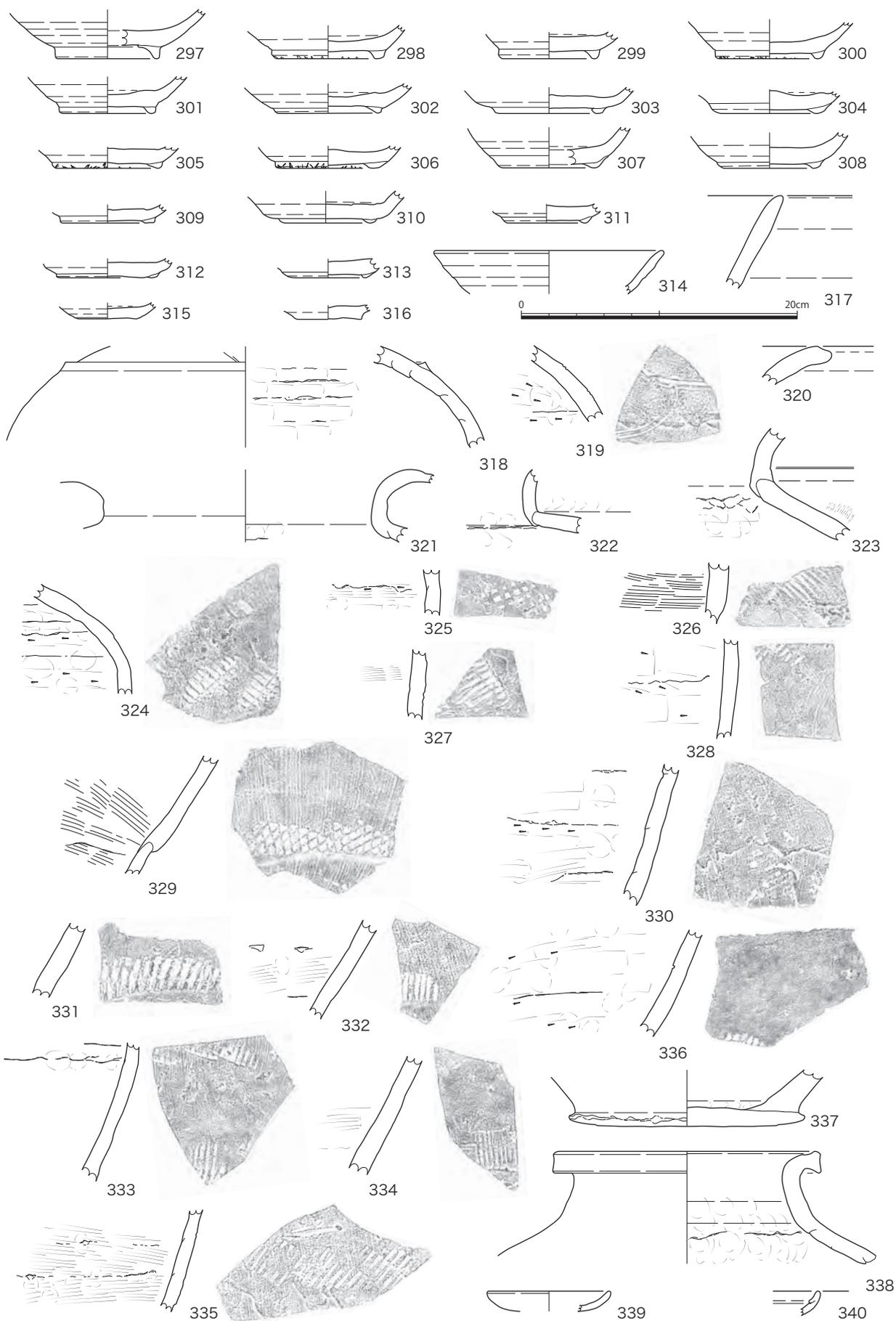
第29図 立会B出土遺物実測図 (1:4)

立会C (224~296)



第30図 立会C出土遺物実測図 (1:4)

立会沢 (297~340)



第31図 立会沢採集遺物実測図 (1:4)

第6章 地質学的調査

はじめに

地質地盤の状況 普門寺旧境内に関わる地質地盤の状況を調べるために、2019年に現在の普門寺およびその周辺と、普門寺の北側にある弓張山地の山稜までの露頭観察を行なったので報告する。
露頭調査

露頭を観察した地点は36地点である(第32図)。地点ごとに観察された岩相とその特徴を記す。

地点1 地点1は仁王門の西側の山腹斜面である。礫層からなる。粘土で構成される基質の中に径1mを超す礫を含む基質支持礫層である。地層は全体に赤褐色を帯びており、地層に含まれる礫はハンマーで打診すると簡単に崩れ、電力中央研究所によるダム基盤岩盤分類のDにあたる。

地点2 地点2は塊状で無層理の中粒～粗粒の砂岩層である(第33図-a)。岩石の表面は風化のため全体に浅黄橙色(マンセル表色系によるカラーチャート:10YR8/3)や黄灰色(2.5Y4/1)を呈する。砂粒子が卓越し、基質成分は少ない。砂岩層の中に中礫程度の大きさの泥岩片を含む場合もある。風化作用を受けて軟質化し、粘土となっている部分と風化作用からまぬがれて岩石部分が残っている部分とに分けられる。岩石が残っている部分はハンマーで打診するとにごった音を発する。電力中央研究所によるダム基盤岩盤分類のC_Mにあたる。

地点3 地点3は地点2と同じく、塊状で無層理の中粒～粗粒の砂岩層である。岩石の表面は全体に浅黄橙色(10YR8/3)や黄灰色(2.5Y4/1)を呈する。砂岩層の中に中礫程度の大きさの泥岩片を含む場合もある。露頭は崖となっており、山腹斜面の地表に近いところでは風化作用が著しく、黄褐色を呈する厚い粘土層となっている。

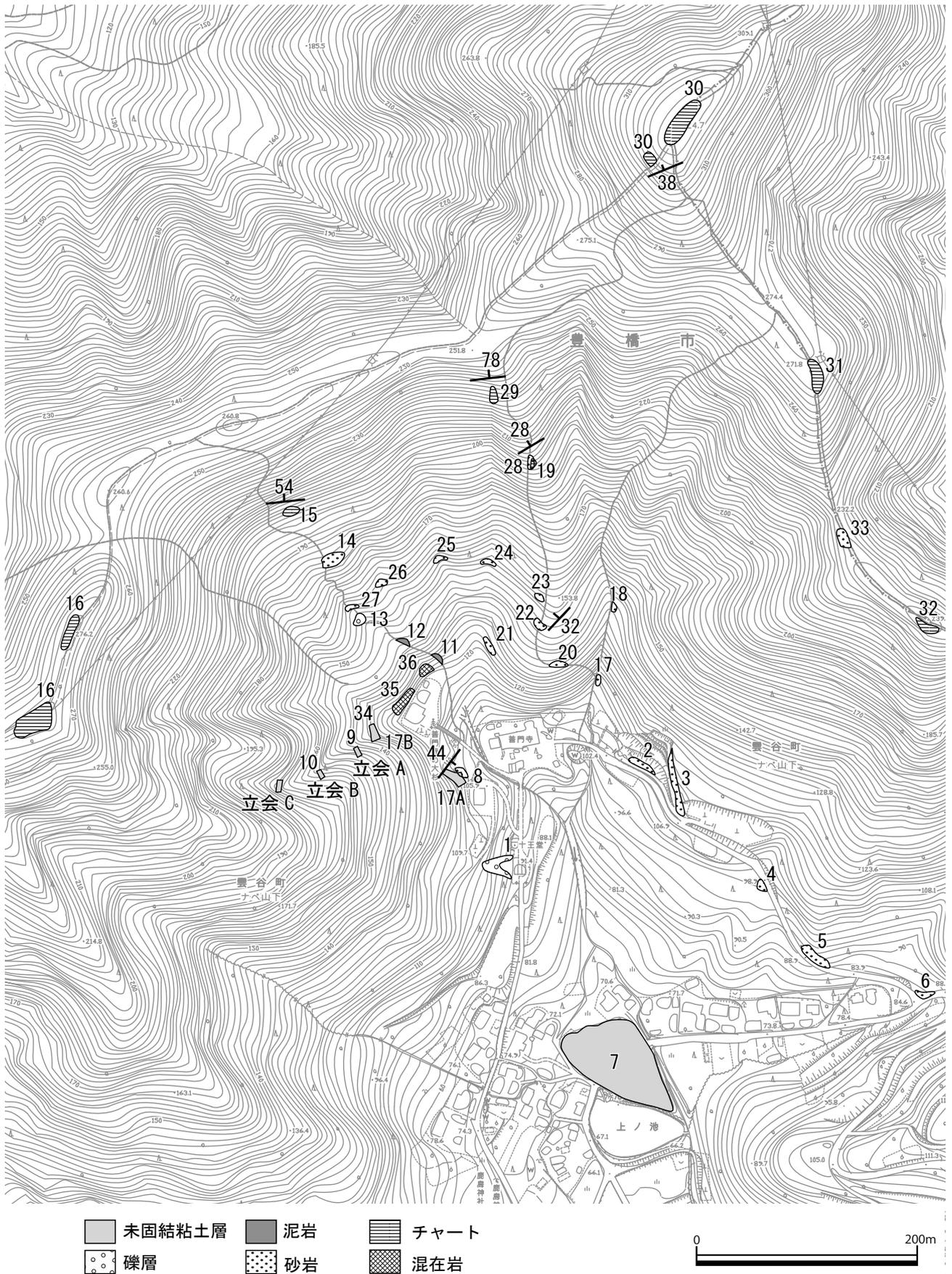
地点4～6 地点4～6は普門寺の本堂から雲谷町ナベ下の麓の集落とを結ぶ道路沿いで見られる、塊状で無層理の中粒～粗粒の砂岩層である。地表付近は風化程度の著しい大礫サイズの砂岩を主体とする礫に覆われているが、その礫に覆われて中粒～粗粒の砂岩層がみられる。

地点7 地点7は雲谷町ナベ山下の麓にある「上の池」という溜池の北で見られる。低平な地形で、現況は耕作地となっている。中礫～大礫サイズの礫を含むシルト質粘土層からなる。本地点は未固結の堆積物からなり、基盤岩となるものは見られない。

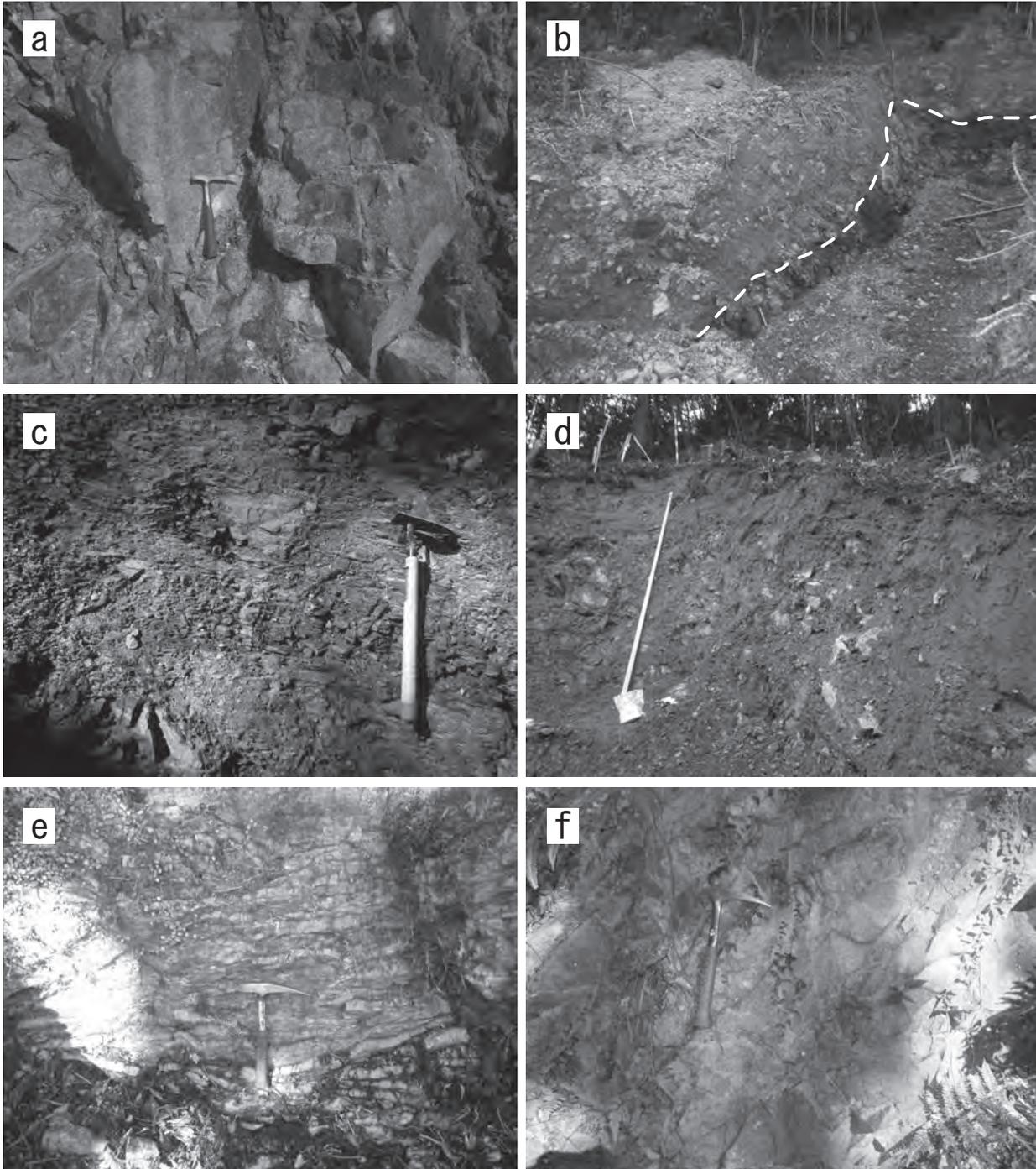
地点8 地点8は調査区17A区の直下で見られる。塊状で中粒～粗粒の砂岩層からなる。層理面が認められる。

地点9 地点9は立会調査A地点である。黒褐色～灰褐色を呈する泥岩からなる。層理面に平行な劈開が発達している(第33図-c)。泥岩を覆って地表まで層厚2～3mの土石流堆積物が見られ(第33図-b)、地表の調査だけでは地下の泥岩に気がつくことはない。調査によりバックホーで掘削をしたからこそ地下の岩石が明らかになった露頭である。

地点10 地点10は立会調査B地点である。地点9と同様に黒褐色～灰褐色を呈する泥岩からなる。本地点も地点9と同じく泥岩を覆って地表まで層厚2～3mの土石流堆積物が覆う(第



第32図 普門寺旧境内周辺の地質調査ルートマップ (1:5,000)



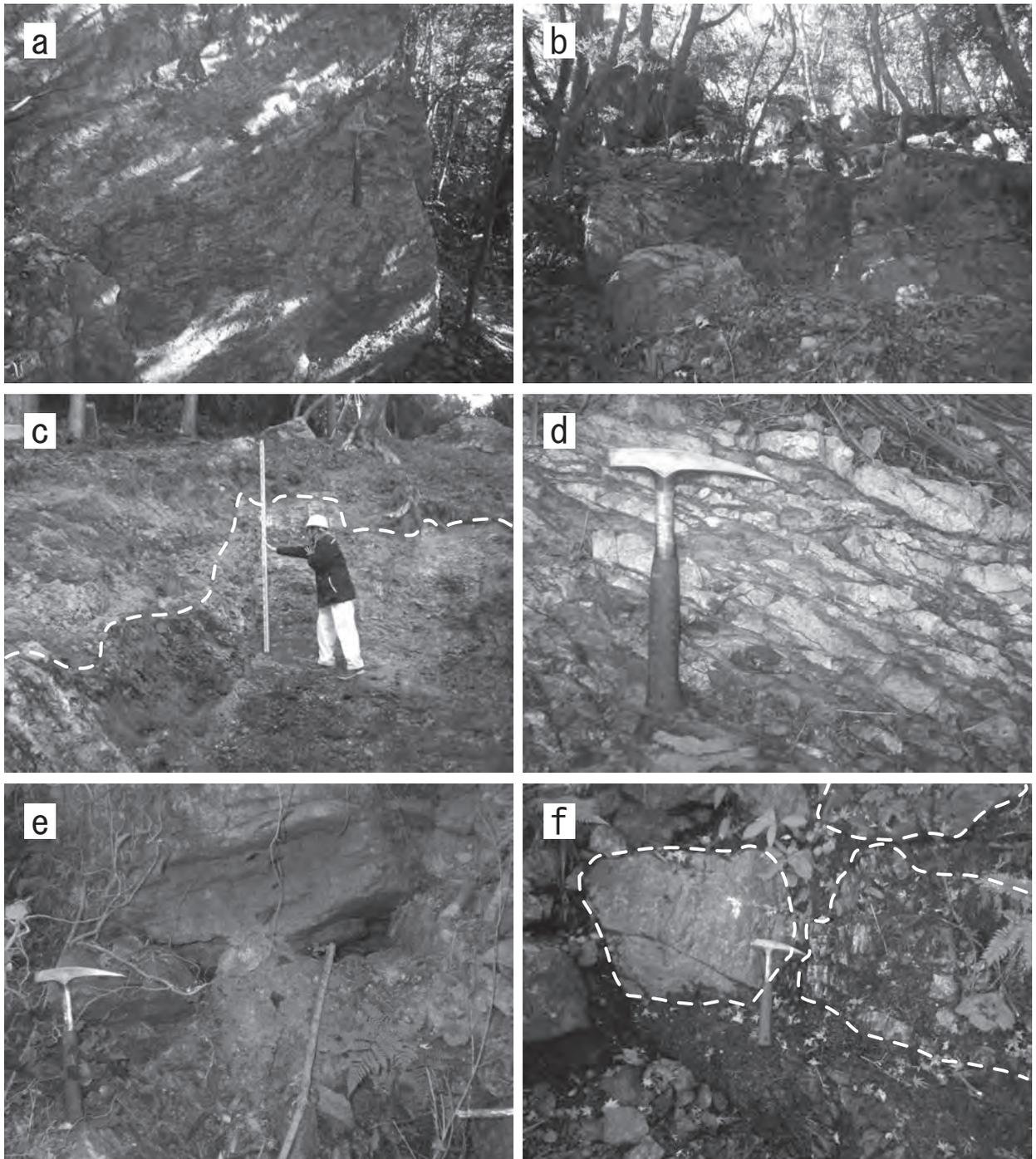
第33図 各露頭における岩相写真(1)

a.地点2の砂岩層。b.地点9の泥岩層とそれを覆う土石流堆積物(点線よりも上側が土石流堆積物)。c.地点9の泥岩層の拡大写真。
d.地点10の泥岩層。e.地点15の層状チャート。f.地点21の砂岩層。a.e.fのハンマーの長さは約30cm。
b.cの草刈り鎌が約40cm。dのスタッフの長さが約5m。

33 図-d)。

地点11~15

地点 11 ~ 15 は普門寺にある豊橋市天然記念物の大杉から普門寺峠へと向かうルート沿いで見られる露頭である。地点 11 および地点 12 は、黒褐色を呈する泥岩からなる。堆積構造は見られない。層理面に平行に劈開が発達する。地点 13 は谷を横切る地点となり、巨礫からなる土石流堆積物である。チャートや砂岩の角礫で構成される。地点 14 は



第34図 各露頭における岩相写真(2)

a.地点30の層状チャート層。b.地点30と地点31との間でみられるチャート層。c.地点34の泥岩層とそれを覆う土石流堆積物(点線よりも上側が土石流堆積物)。d.地点35の層状チャート。e.地点35付近の谷でみられる混在岩層を覆うチャートの巨礫。f.地点36付近の谷底でみられる泥岩と層状チャートの混在岩層(点線で囲んだところが層状チャートの岩塊)。
a.d.eおよびfのハンマーの長さは約30cm。cのスタッフの長さが3m。

塊状で無層理の中粒～粗粒の砂岩層である。風化作用による粘土化が著しい。地点14周辺はほぼ水平に近い地形面を形成しており、本地点のそばには普門寺の元堂址がある。地点15は白色を呈する層状チャートが見られる(第33図-e)。チャートは土壌や堆積物で覆われることなく、新鮮な岩塊が地表に露出している。岩石表面の新鮮な部分は灰白色(N8/0)を呈し、若干風化の進んだ部分では灰黄色(2.5Y7/2)を示す。単層の厚さ

数 cm から 10 数 cm の珪質な部分と、厚さ数 cm の泥質部からなる有律互層からなる。岩石の固結度はきわめて高く、ハンマーで打診するとすんだ音を出す。電力中央研究所によるダム基盤岩盤分類の A にあたる。

地点16 地点 16 は自然歩道の尾根沿いのルートで見られる。白色を呈し有律互層の層状チャートである。

地点17・18 地点 17・18 は普門寺の本堂から南東にある池から北側の山腹をめぐるルート沿いでみられる。塊状で無層理の中粒～粗粒の砂岩層である。電力中央研究所によるダム基盤岩盤分類の C_M にあたる。

地点19 地点 19 では白色を呈する層状チャートが見られる。珪質な部分と泥質な部分からなる有律互層である。変質は受けておらず、ハンマーで打診するとすんだ音を出す。電力中央研究所によるダム基盤岩盤分類の A にあたる。

地点20～28 地点 20～28 は普門寺の本堂の裏手（北側）を主に調査した。すべての地点が塊状の中粒～粗粒の砂岩層からなる。ほとんどの地点で砂岩はルート沿いに小規模に露出するだけであるが、本堂の北側、他の谷に比べて比較的谷の幅の広い地点 21 には高さ約 4m の崖があり、砂岩が良好に露出している（第 33 図 -f）。

地点29 地点 29 では白色を呈する層状チャートが見られる。珪質な部分と泥質な部分からなる有律互層であり、層理面の走向・傾斜は N83° E78° NW である。本地点の周辺には薬師岩がある。

地点30～33 地点 30～33 は、今回の露頭調査における北東方向の航空灯台（標高 324.7m）から南東方向への尾根線を通るルート沿いにあり、そこはちょうど愛知県と静岡県との県境となっている。

地点30 地点 30 では白色を呈する層状チャートが見られる（第 34 図 -a）。珪質な部分と泥質な部分からなる有律互層であり、層理面の走向・傾斜は N63° E38° NW である。変質は受けておらず新鮮で、ハンマーで打診するとすんだ音を出す。電力中央研究所によるダム基盤岩盤分類の A にあたる。

地点31 地点 31 も白色を呈する層状チャートである。有律互層であり、地点 30 から地点 31 に至るルート間は地表での露出が明瞭である（第 34 図 -b）。変質を受けていない新鮮な岩石が露出しており、地形の傾斜角が急である。

地点32 地点 32 は標高 239.5m の三角点のある地点であり、白色を呈する層状チャートが見られる。

地点33 地点 33 は地点 31 と地点 32 とを結ぶ尾根線沿いで、地形的な凸部通しをつないだちょうど中間点付近にあたり、地形的に凹地となっている部分である。ここでは塊状の砂岩層が見られるが、固結した岩石ではなく、変質した粘土を多く含んだ状態で見られる。

地点34 地点 34 は調査地点 17B 区の南側において 2019 年に立会調査が行われた場所である。黒褐色～灰褐色を呈する泥岩からなる。地点 9 や地点 10 と同様に、泥岩を覆って地表まで層厚 2～3m の土石流堆積物が覆っている（第 34 図 -c）。泥岩には層理面に平行な劈開が発達している。

地点35 地点 35 は調査地点 17B 区の北にあり、豊橋市天然記念物の大杉の裏手（西側）の露頭である。地表には径 1m を超えるチャートの巨礫が見られ、当初、露頭全体がチャート礫

からなる礫層とも思われた。しかし、露頭観察の結果、チャート礫の下位には泥岩が認められ、泥岩の基質の中に径1mを超える層状チャートの岩塊が包有されているのが見られ、混在岩層であることがわかった(第34図-d・e)。地点35からさらに北の地点36では、幅5mほどの小規模な谷の底に泥岩の基質の中に包有された層状チャートの岩塊が明瞭に認められ、地点35から地点36には泥岩と層状チャートからなる混在岩が分布することがわかった(第34図-f)。

露頭調査からわかる地質の特徴

普門寺旧境内に関わる地質情報を得るため36地点の地質調査を行なった。観察された岩相は全部で6つに分けられ、続成作用が進み固結した砂岩、泥岩、チャート、混在岩と、未固結の礫層と粘土層であった。これらの岩石や堆積物の露出状況については、地質調査を行なった36地点のうち砂岩が確認されたのが19地点(地点2・地点3・地点4・地点5・地点6・地点8・地点14・地点17・地点18・地点20・地点21・地点22・地点23・地点24・地点25・地点26・地点27・地点28・地点33)、泥岩が確認されたのが5地点(地点9・地点10・地点11・地点12・地点34)、チャートが7地点(地点15・地点16・地点19・地点29・地点30・地点31・地点32)、混在岩が2地点(地点35・地点36)、礫層が2地点(地点1・地点13)、未固結の粘土層が1地点(地点7)であった(第32図)。今回行なった地質調査では砂岩の確認できる露頭が36地点のうち19地点と全体の約53%を占め、砂岩が認められる露頭が多かった。いっぽうで、これらの岩石の分布には偏在傾向があるようである。まず、砂岩と泥岩の分布について、現在の普門寺本堂の北西側、豊橋市天然記念物の大杉の裏手(西側)から普門寺峠へと向かうルート沿いを境にして、それよりも東の広い範囲には砂岩が卓越した。いっぽう、先のルート沿いを境に西では泥岩が見られた。また、標高200mを境にして、それよりも標高の高いところにはチャートが分布した。普門寺を取り囲む弓張山地の尾根線で豊橋市自然歩道が通るルート沿いの露頭では層状チャートが観察できた(地点16・地点30・地点31・地点32)。これらの層状チャートは変質を受けておらず新鮮で、ハンマーで打診するとすんだ音を出すほど固くて緻密な岩質であった。まとめると、現在の普門寺を取り囲む山地の特徴としては1. 普門寺本堂の北西側、豊橋市天然記念物の大杉の裏手(西側)から普門寺峠へと向かうルート沿いを境に、東には砂岩が卓越し、西では泥岩が見られること、2. 標高200m前後を境に、それよりも標高の高いところには層状チャートが分布することがわかった。

日本の地質帯と普門寺旧境内周辺でみられる地質帯

地質学を専門とされない方が、地質学は複雑でわかりづらいという印象をもたれる原因のひとつに、地質学用語の多さが挙げられると思う。ここで地質学を専門にされない方のために簡単に日本の地質帯について解説する。日本海側の石川県から太平洋側の愛知県にいたる中部地方は複雑に地質体が分布する地域でもあり、日本海側から太平洋側にかけて順に飛騨変成帯、飛騨外縁帯、三郡帯、舞鶴帯、美濃・丹波帯、領家帯が並び、これらが内帯を構成する。中央構造線をはさんで南には三波川帯、秩父帯、四万十帯となる。プレート・テクトニクスにより、大陸プレートの縁辺に付け加わった地層を「付加体」あるいは「付加コンプレックス」とよぶ。コンプレックス(complex)とは複合体とか集合体を表わす英語である。先に述べた地質帯を付加コンプレックスにより解釈すれば、内帯は飛騨帯(中

観察された岩相

分布の偏在傾向

日本の地質帯

内帯

外帯
中央構造線

生代ジュラ紀以前の変成岩や花コウ岩)、飛騨外縁帯(中生代ジュラ紀以前の岩石を含む蛇紋岩メランジュ)、三郡帯(変成された古生代ペルム紀の付加体)、舞鶴帯(古生代ペルム紀～中生代三畳紀、夜久野オフィオライト)、美濃・丹波帯(中生代ジュラ紀の付加体)、領家帯(変成された中生代ジュラ紀の付加体)となる。外帯は三波川帯(変成された中生代ジュラ紀の付加体)、秩父帯(中生代ジュラ紀～中生代白亜紀の付加体)、四万十帯(中生代白亜紀～新生代新第三紀の付加体)となる。ところで、先に中央構造線が日本列島を内帯と外帯という地質区に大きく2分することを述べた。中央構造線はその英語表記である Median Tectonic Line の頭文字を取り「MTL」と略記されることもあるが、紀伊半島の和歌山県和歌山市、紀の川市を通ってきた中央構造線は三重県伊勢市の近鉄山田線「宇治山田駅」付近を通り、伊勢市二見浦の海岸、答志島の北を抜けて、対岸の愛知県田原市の立馬崎東の福江漁港、豊橋市前芝町の前芝中学校・小学校の南、JR 飯田線「小坂井駅」を経て新城市の桜淵公園を通っている。豊橋市ではこの中央構造線を境にして北側には内帯である領家帯が、南には三波川帯、秩父帯が分布している。愛知県内の他の市町村の基盤岩がほとんど内帯の地質体から形成されているのに対して、豊橋市では内帯と外帯の地質体の両方を見ることができる。それらの地質体を基盤岩として豊川沿いや三河湾の周辺では、地質時代の中でもっとも新しい時代である第四紀更新世～完新世の固結していない堆積物が覆うのである。このように豊橋市では愛知県内に分布する古い岩石のひとつである中生代ジュラ紀～中生代白亜紀の秩父帯から、もっとも新しい完新世の地層までがひとつの市の中でまとまって観察できるという、県内でも数少ない場所でもある。

豊橋市の地質帯

豊橋市ではこの中央構造線を境にして北側には内帯である領家帯が、南には三波川帯、秩父帯が分布しており、四万十帯はみられない。これらの地質帯のうち、普門寺旧境内で認められるのは秩父帯である。1970年代までは豊橋市域周辺でみられる秩父帯の層序は都田層と井伊谷層の2つに層序区分がされてきた。1980年代になり水垣(1985)がチャートから古生代ペルム紀～中生代三畳紀の放散虫化石を抽出し、その後、池田(1990)、Ohba(1997)、丹羽・大塚(2001)、丹羽(2004)、堀(2008)により弓張山地や渥美半島に分布する秩父帯付加コンプレックスの多くの地点から古生代ペルム紀～中生代ジュラ紀の放散虫化石を報告している。普門寺及びその周辺では古生代ペルム紀～中生代ジュラ紀の秩父帯付加コンプレックスからなる。

普門寺周辺の地質と平坦面(平場)の分布について

岩相の分布

36地点の露頭観察による地質調査により、普門寺を取り囲む弓張山地の特徴として、1.現在の普門寺本堂の北西側、豊橋市天然記念物の大杉の裏手(西側)から普門寺峠へと向かうルート沿いを境に、東には砂岩層が卓越し、西では泥岩層が見られることと、2.標高200m前後を境に、それよりも標高の高いところには層状チャートが分布することがわかった。このうち2のチャートの分布については豊橋市による普門寺旧境内調査において、村上編(2011)、小林(2012, 2013)や菊池編(2013)、村上(2014)によりすでに報告されており、その結果を追認したことになる。

平場の分布

さて、ここで第1章の(2)調査の経緯で提示されている普門寺周辺の弓張山地斜面で認められた平坦面(平場)の分布図(第2図)とを比べると、現在の普門寺の本堂から山地の稜線付近にある薬師岩とを南北方向で結んだところを境にして、平坦面(平場)

は西側に多く、東では極端に少なくなる。また、平坦面（平場）の鉛直方向の特徴では、標高 200m 前後を境にして、それよりも標高が高くなると平坦面（平場）が見られなくなる。これらの平坦面（平場）が分布する範囲と今回の地質調査の結果とを比べると、平坦面（平場）が認められる場所は地質学的に砂岩と泥岩の分布域と調和的である。また、標高 200m 前後を境にして平坦面（平場）が見られなくなる範囲は層状チャートが分布する範囲と調和的であった。ところで、砂岩層には節理の密度が高く岩石表面は黄褐色に風化され、岩石ハンマーの打撃により小片に崩壊してしまうほど脆弱であるものがあつた。いっぽう、チャートは風化に対して極めてつよく、現在でも固く緻密な岩質をもち、ハンマーの打撃でも割ることは難しい。このような岩質の違いは人工的な土地改変において、改変の難易度に大きく関係するであろうことは想像に難くない、強度の弱い砂岩層であれば山腹の掘削も比較的容易であろうが、堅牢なチャートは岩盤掘削作業が極めて難しいだろう。この岩質の違いを、普門寺旧境内を建立した当時の人びとも考慮したと見られ、現在の普門寺本堂の建つ場所はもちろんのこと、それよりも標高の高い旧境内があつた場所までは主に砂岩層から形成されていた。いっぽうで、旧境内遺構よりもさらに標高が高い場所でチャートがそのまま露出する周りには積極的に人が手を加えた跡はあまり見られない（村上，2014）。このように、現在の普門寺や旧境内遺構などの人為的に改変された証拠のある場所は、地質学的には秩父帯付加コンプレックスの砂岩と泥岩から構成されており、そこに見られる砂岩層や泥岩層は風化に弱く脆弱で、その特徴が人為的に土地を改変するためには都合がよかったものと指摘できる。

岩質の違い

人工的な土地改変

謝辞

本論を作成するにあたり、高野山真言宗普門寺の関係者の方々には現地調査をご快諾いただき、お世話になった。愛知県埋蔵文化財調査センターの小坂延仁氏には現地調査でお手伝いいただいた。豊橋市文化財センターの岩原 剛氏、村上 昇氏には普門寺旧境内についてご教示をいただいた。図版の作成では国際文化財株式会社にお手伝いいただいた。原図の作成では整理補助員の前田弘子氏・鈴木好美氏にお手伝いいただいた。記して厚くお礼申し上げます。

参考文献

- 堀 常東, 2008, 秩父帯ジュラ紀付加コンプレックス, 地域地質研究報告 (5万分の1地質図幅) 豊橋および田原地域の地質, 独立行政法人産業技術総合研究所, 地質調査総合センター, 11-37.
- 池田芳雄, 1990, 地形・地質・気象・水収支. 葦毛湿原調査報告書, 豊橋市教育委員会, 1-14.
- 菊池直哉編, 2013, 普門寺旧境内第4次確認調査概要, 豊橋市埋蔵文化財調査報告書第127集 市内遺跡発掘調査-平成22年度-, 豊橋市教育委員会, 167-219.
- 小林久彦, 2012, 遺跡の立地と歴史的環境, 普門寺旧境内第3次確認調査概要, 豊橋市埋蔵文化財調査報告書第119集 市内遺跡発掘調査-平成22年度-, 豊橋市教育委員会, 45-46.
- 小林久彦, 2013, 遺跡の立地と歴史的環境, 普門寺旧境内第4次確認調査概要, 豊橋市埋蔵文化財調査報告書第127集 市内遺跡発掘調査-平成22年度-, 豊橋市教育委員会, 170-171.
- 水垣桂子, 1985, 浜名湖北西地域の秩父系に産する放散虫化石. 瑞浪市化石博研報, no.12, 171-182.
- 村上 昇編, 2011, 普門寺旧境内第2次確認調査概要, 豊橋市埋蔵文化財調査報告書第115集 市内遺跡発掘調査-平成20年度-, 豊橋市教育委員会, 35-77.
- 村上 昇, 2014, 普門寺旧境内第5次確認調査概要, 豊橋市埋蔵文化財調査報告書第129集 市内遺跡発掘調査-平成23年度-, 豊橋市教育委員会, 99-114.
- 丹羽耕輔, 2004, 浜名湖西方地域の秩父帯の再区分. 名古屋大学博物館報告, no.20, 71-78.
- 丹羽耕輔・大塚 勉, 2001, 浜名湖西方地域の秩父帯付加コンプレックスから産出した後期古生代および中生代放散虫化石. 信州大学理学部紀要, vol.36, 77-93.
- Ohba, H, 1997, Mesozoic radiolarians from the western part of the Atsumi Peninsula, Southwest Japan. Jour. Earth planet. Sci. Nagoya Univ., vol.44, 71-87.

第7章 総括

(1) 発掘調査の意義

既往の調査と17A区・17B区の発掘調査

豊橋市教育委員会
による発掘調査
今回の発掘調査

これまでに豊橋市教育委員会が実施した普門寺旧境内の発掘調査は、山寺を構成する主要な遺構である元々堂址とその周辺の平場、元堂址とその周辺の平場、薬師岩とその周辺を対象としたものであった（豊橋市教育委員会 2016a）。今回の発掘調査はごく限られた部分ではあるものの、古代・中世の山寺遺構として山内に広く展開する平場群（17B区）、近世の遺構が想定される山麓付近の平場群（17A区）をそれぞれ対象としたことで、遺跡の構造と変遷、出土遺物の様相に対して幾つかの知見を加えることとなった。

古代・中世の平場群と17B区

平場群の帰属

古代・中世の山寺遺構として山内に展開する平場群は、元々堂址と同一尾根上に展開するG地区の平場、元々堂址西の尾根上で「八十八箇所谷」と呼ばれるM・N・O地区の平場群、元々堂址東の尾根上で「切られ岩」を入口とするH・I・J地区の平場群、元堂址下の「九十九箇所寺」と呼ばれるC・D・E地区の平場群に大別されるが、17B区が重複するF地区の平場群は後二者間に位置する。つまり、平場群の帰属を判断することは難しい。『縁起』の西谷、史料上の船形寺とされる元々堂址、『縁起』の東谷、史料上の梧桐岡院（寺）とされる元堂址が、古代的な様相を呈する前者と、後出ながら中世に主体を担った後者として、性格をやや異にしながら併存すること（岩原 2016b）を踏まえると、この問題を論じる意義は決して小さくない。つまり、17B区の遺構・遺物の様相とその推移は、遺跡における何らかの構造変化にも関連する可能性も想定される。17B区に重複し、愛知県埋蔵文化財調査センターが立会調査を実施した沢も、両者の寺域を分かちように流下する。つまり、同様の問題意識に依拠し、併せて評価する必要がある。

西谷と東谷

近世の平場群と17A区

山麓付近の平場
戦国時代から近世

近世以降の利用が想定される山麓付近は、普門寺旧境内としては多くが遺跡の範囲外とされている。17A区もその範囲外を対象とした調査区であるが、戦国時代以降の断続的な土地利用を初めて確認した。普門寺再興事業が展開する17世紀以降の文献は多いが、それに比して考古学調査による知見は少ない。17A区の調査は遺跡範囲外の調査の一定の有意性を示すものである。



第35図 三河国渥美郡船形山普門密寺略図

(2) 遺構の構造と変遷

古代・中世の一大宗教空間を構成する平場群については、分布調査の成果に依拠した遺構の変遷が詳細に示されている（岩原 2016a）。それとも対比しながら、立会調査出土遺物を含め、以下に遺構の構造と変遷を確認する（第 36 図）。

折戸53号窯式期から東山72号窯式期、10世紀から11世紀

灰釉陶器は 17B 区沢 009NR、立会沢で各 1 点が出土するのみで、元々堂址を中心として同時期の遺構が展開することを追認した。一方、元堂址下位の D-21 地区においても灰釉陶器が採集されていることを踏まえれば、元々堂址から元堂址にかけて山内が広く利用されていたことも確かめられる。

灰釉陶器

渥美・湖西型山茶碗 1 型式期、12世紀前葉

前代と同じく遺物はごく少ない。この時期の遺構は元々堂址と元堂址、一部の大型平場を主体として展開したのであろう。

渥美 1 型式

渥美・湖西型山茶碗 2 型式期、12世紀後葉から13世紀前葉

17B 区や立会沢で蓮弁文壺、長頸瓶（水瓶）を含む壺・瓶類が出土している。大型平場間の小型の平場を含めて山内における平場の面的な展開が顕著となることを追認した。

渥美 2 型式

渥美・湖西型山茶碗 3 型式期、13世紀中葉から14世紀初頭

17B 区と重複する F-2 地区は同時期の山茶碗は採集されていなかったが、今回発掘調査を実施した F-2 地区の一部、つまり、17B 区の平場 006SX 周辺においては、多くの同型式の山茶碗が出土したことで、旧境内全域における平場群の展開、あるいは中世普門寺の完成期とする従来の認識がより明確となった。

渥美 3 型式

古瀬戸後期末から大窯前半併行期、15世紀後葉から16世紀中葉

元々堂址と元堂址、一部の大型平場を中心に遺構が展開し、大型平場は中世末から近世にかけて再整備されたことも推定されているが、大型ではない F-2 地区の平場に重複する 17B 区において、古瀬戸後期末から大窯前半併行期の遺物がまとまって出土した。

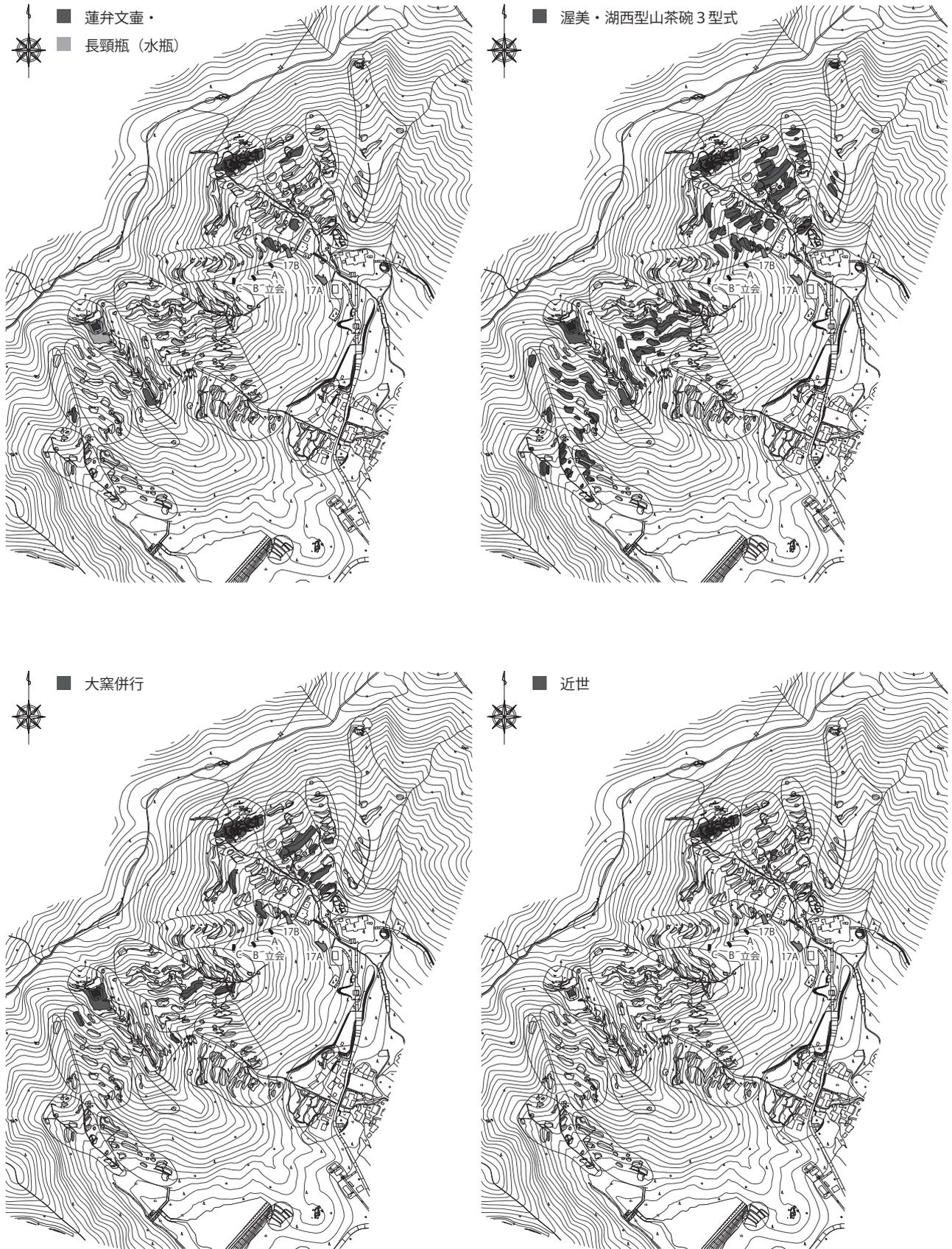
古瀬戸後期末から
大窯前半

これらは古瀬戸後期の遺物が確認されている E 地区の中位から下位、大窯前半併行期の遺物が確認されている F-7 地区と併せて、遺構の一定の分布域を示す。また、この分布域は周辺における遺構の分布状況からして、元堂址との関係が深かったこと、あるいは、『縁起』の東谷、史料上の梧桐岡院（寺）に寺域の主体が移動しつつあったこと示唆する。

大窯後半併行期から近世、16世紀後葉以降

元々堂址周辺は確実に廃絶し、元堂址周辺、現客殿付近のみに遺構が展開するとされる。発掘調査を実施した 17B 区においても、石積み 008SZ が示すように、18 世紀中葉以降における平場群下端の利用はあるものの、同時期の遺物は皆無であることから、平場群の多くも確実に廃絶していたことが確かめられる。山内の中世から継続する遺構の多くが廃絶するのは対照的に、大窯後半併行期、現取蔵庫付近の 17A 区の平場 001SX が示すように、16 世紀後葉以降に山麓付近の利用が開始されるのは、16 世紀における東西両谷の統一、天文 2 年（1533）の普門寺の全山消失から 17 世紀の普門寺再興事業までの普門寺の動静に関連するものとして重要である。続いて確認される 17 世紀末葉から 18 世紀前葉の遺物は、普門寺再興事業としての山麓への境内移転にも関連する可能性がある。

大窯後半から近世



第36図 各種遺構・遺物の分布

(3) 出土遺物の様相

渥美・湖西産陶器

普門寺旧境内の中世の遺物として、日常雑器類の山茶碗の碗、小皿が多いことはこれまでの分布調査ですでに判明しているが(岩原 2016a)、今回の発掘調査の結果、それを定量的に把握した。山茶碗の多くは渥美 3b 型式に比定され、口縁部の形状が把握される個体が少ない資料の状況で、輪花状の口縁部 (24)、玉縁状の口縁部 (110・111) とした「特殊口縁」(増山 2013) の碗が抽出された。今後、遺跡の特性との関連について精査する必要がある。

山茶碗

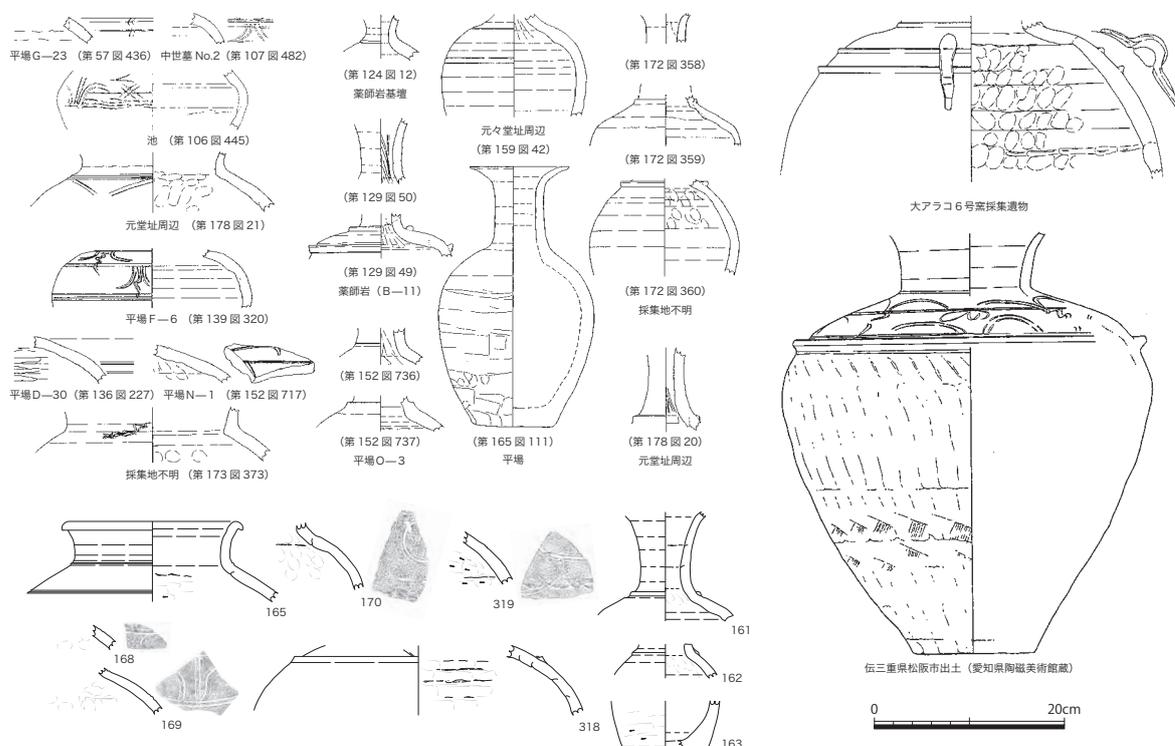
「特殊口縁」の碗

壺・瓶類の出土については、長頸瓶(水瓶)の出土・採集量が多く、山内でも広く使用されたことが指摘されている。型式は渥美 1a 型式から 2b 型式に及ぶ。17B 区の沢 009NR においても、同 2b 型式の同器種が出土している。蓮弁文壺(・袈裟襴文壺)も元々堂址、元堂址の両本堂とその周辺で出土し、特徴的な出土状況を示すものではないが、17B 区沢 009NR、立会沢それぞれで複数個体が出土していることは特筆される。型式は同 2b 型式が多い(第 37 図)。特に体部上半に突帯を付す個体(318)は、同 1a 型式の大アラコ 6 号窯採集の突帯有耳壺(安井 2012)、同 2a 型式に比定される愛知県陶磁美術館所蔵伝三重県松阪市付近出土の蓮弁文壺(安井・中野 2012)、あるいは薬師岩(B-11)採集の突帯を付した長頸瓶(水瓶)が知られる程度で、その特殊性が注目される。その特殊性は、渥美窯が顕密寺院と院を頂点として形成した全国的なネットワークにおける重要な位置を占め、特に普門寺旧境内、伊勢神宮領荘園と密接な関係を有していたこと

長頸瓶(水瓶)

蓮弁文壺

突帯付壺



第37図 渥美・湖西産蓮弁文壺・長頸瓶(水瓶)と関連資料 (1:8)

剣頭文軒平瓦との
関連 (宇野 2000) を端的に示す。こうした示唆は、元々堂址の剣頭文軒平瓦が 12 世紀後半に京都系瓦工人との関係によってもたらされたとする理解 (梶原 2016) も整合的である。

土師器鍋

伊勢型鍋の少な
さ 内耳鍋 これまでの分布調査や発掘調査の成果として、山内における土師器鍋の出土・採集量はごく少なく、特に中世前期の主要な煮炊具である伊勢型鍋はほとんど採集されず、多くは中世後期から近世の内耳鍋であることが指摘されている (岩原 2016b)。今回の発掘調査、立会調査の状況においても同様の状況、特に伊勢型鍋の出土量の少なさに対する中世後期から戦国時代の内耳鍋の多さは明らかである。

初山産陶器

瀬戸・美濃系大窯
製品の出土分布 17A 区の平場 001SX において、初山産天目茶碗が出土した。初山焼は浜名湖北岸から都田川流域において生産された瀬戸・美濃大窯系施釉陶器で、窯としては釜下窯と宝林寺境内窯が知られている。時期は大窯第 3 段階後半に併行するとされる。製品は遠江以東、関東から南東北の城館・城下町に分布することが示され、これまで三河以西における出土はほとんど知られていなかった (栗原 2012)。

徳川氏の寺社政策 初山焼の開窯と営窯には徳川家康の安堵を得た在地の商人が主体的に関わったことも指摘されている (栗原 2009)。普門寺は慶長 7 年 (1602) に徳川家康の家臣伊奈忠次から 35 石の寺領、翌慶長 8 年 (1603) に徳川氏から朱印地 100 石の寺領が安堵されていることからすると、17A 区において出土した初山産陶器は、徳川氏による近世の普門寺再興事業、当地域における寺社政策の背景の一端を示す可能性がある。

中世普門寺
近世普門寺
14世紀の普門寺
総合的な評価 今回、遺跡最大の特徴ともされる平場群の発掘調査を山内 (17B 区) と山麓 (17A 区) の異なる 2 地点において実施した。その結果、前者において中世普門寺、後者において近世普門寺の遺構と遺物を確認し、普門寺旧境内の構造的な変化を図らずも表出させることとなった。その一方で、文献調査から 14 世紀の中世普門寺が活発であったことは知られるが、発掘調査の成果からそれを具体化することが難しいことも改めて認識された。いずれにしても、普門寺旧境内は地質、文献、建築、彫刻、美術工芸品、経塚、石造物を併せた総合的な評価が可能な稀有な埋蔵文化財である (豊橋市教育委員会 2016b)。本書がその理解の一助になることを願い、本報告を閉じることとする。

参考文献

- 宇野隆夫 2000 「渥美窯の世界」 『海道をゆく—渥美半島の考古学—』 豊橋市美術博物館
- 栗原雅也 2009 「初山焼の紹介」 『浜松市博物館館報』 第21号 浜松市博物館
- 栗原雅也 2012 「初山焼の生産体系」 『古志戸呂の誕生～その生産と流通～』 平成23年度静岡県考古学会シンポジウム資料集 静岡県考古学会
- 安井俊則 2012 「大アラコ古窯跡」 『愛知県史』 別編 窯業3 中世・近世 常滑系
- 安井俊則・中野晴久 2012 「押印・刻印」 安井2012前掲
- 増山禎之 2013 「渥美窯の特殊口縁を持つ山茶碗類」 『三河考古』 第23号 三河考古刊行会
- 豊橋市教育委員会 2016a 『普門寺旧境内—考古学調査編—』 豊橋市埋蔵文化財調査報告書第140集
- 豊橋市教育委員会 2016b 『普門寺旧境内—総合調査編—』 豊橋市埋蔵文化財調査報告書第141集
- 岩原 剛 2016a 「分布調査の成果」 豊橋市教育委員会2016a前掲
- 梶原義実 2016 「中世瓦の検討」 豊橋市教育委員会2016a前掲
- 岩原 剛 2016b 「総括」 豊橋市教育委員会2016a前掲

登録番号	調査区	グリッド	遺構	種別	器種	産地	型式	口径 (cm)	口縁部残存 (n/12)	底径 (cm)	底部残存 (n/12)	器高 (cm)	備考
1	17A	1995	003SU	山茶碗	碗	渥美・湖西	渥美3b型式			7.6	12	-2.7	
2	17A	1995	003SU	陶器	仏餉具	美濃	登窯第6小期			5.8	9	-2.8	
3	17A	1995	003SU	土師器	皿			11.2	12	7.0	11	2.6	
4	17A	1995	003SU	土師器	皿			11.0	12	8.0	11	2.4	
5	17A	1995	003SU	土師器	皿			12.0	3	7.0	3	1.9	
6	17A	1995	003SU	土師器	皿			10.2	7	4.8	12	1.9	
7	17A	1995	003SU	土師器	皿			7.8	6	3.0	12	1.6	
8	17A	1995	003SU	土師器	皿			8.4	4			-1.3	
9	17A	1995	003SU	土師器	皿			10.4	1			-1.8	
10	17A	1995	003SU	瓦	丸瓦			長-6.2		幅-7.5		厚さ2.2	重さ101.3g
11	17A	1996	004SU	陶器	甗	渥美・湖西						-5.5	外面施釉、押印文（縦線）
12	17A	1996	004SU	土師器	皿			11.8	1			-1.8	
13	17A	1996	004SU	土師器	皿			10.6	3			-1.8	
14	17A	1996	004SU	土師器	皿			11.4	2			-2.2	
15	17A	1996	004SU	土師器	皿			10.2	2			-1.9	
16	17A	1997	004SU	土師器	皿			9.6	2			-1.9	
17	17A	1996	004SU	土師器	皿			7.8	3			-2.2	
18	17A	1996	001SX	陶器	天目茶碗	初山		11.2	3			-4.4	
19	17A	1996	001SX	陶器	天目茶碗	瀬戸	登窯第3小期前後	11.2	2			-4.1	高台周辺露胎
20	17A	2096	002SX	陶器	柳茶碗	瀬戸	登窯第8小期	13.0	4			-5.0	
21	17A	2096	002SX	陶器	柳茶碗	美濃	登窯第8小期	13.0	1	4.0	1	6.2	
22	17A	2096	002SX	青磁	丸碗	肥前		12.6	3			-5.2	
23	17A	-	採集	陶器	片口	瀬戸・美濃	登窯第8小期前後			7.2	5	-8.8	底部内面トチン痕
24	17B	1490	006SX周辺	山茶碗	輪花碗	渥美・湖西	渥美3a型式	15.2	2	8.2	12	4.8	口縁部輪花状
25	17B	1490	006SX周辺	山茶碗	碗	渥美・湖西	渥美3a型式	16.0	4	8.0	12	5.3	
26	17B	1490	006SX周辺	山茶碗	碗	尾張型	第6型式			7.4	12	-3.0	
27	17B	1490	006SX周辺	山茶碗	碗	渥美・湖西	渥美3b型式	14.4	1	8.0	12	4.7	
28	17B	1490	006SX周辺	山茶碗	碗	渥美・湖西	渥美3b型式			7.4	9	-3.8	
29	17B	1490	006SX周辺	山茶碗	碗	渥美・湖西	渥美3b型式			6.8	6	-2.8	
30	17B	1490	006SX周辺	山茶碗	碗	渥美・湖西	渥美3b型式			7.0	2	-1.9	
31	17B	1490	006SX周辺	山茶碗	碗	渥美・湖西	渥美3b型式			7.0	12	-2.0	
32	17B	1490	006SX周辺	山茶碗	碗	渥美・湖西	渥美3b型式			6.5	12	-1.8	
33	17B	1490	006SX周辺	山茶碗	碗	渥美・湖西	渥美3b型式			7.6	12	-2.0	
34	17B	1490	006SX周辺	山茶碗	碗	渥美・湖西	渥美3b型式			8.8	5	-2.4	
35	17B	1490	006SX周辺	山茶碗	碗	渥美・湖西	渥美3b型式			7.8	12	-3.5	
36	17B	1490	006SX周辺	山茶碗	碗	渥美・湖西	渥美3b型式			8.2	12	-3.7	
37	17B	1490	006SX周辺	山茶碗	碗	渥美・湖西	渥美3b型式			6.6	5	-1.3	
38	17B	1490	006SX周辺	山茶碗	碗	渥美・湖西	渥美3b型式			7.8	7	-1.6	
39	17B	1490	006SX周辺	山茶碗	碗	渥美・湖西	渥美3b型式	14.4	4	8.1	6	4.6	
40	17B	1490	006SX周辺	山茶碗	碗	渥美・湖西	渥美3b型式	13.4	2	6.8	7	4.7	
41	17B	1490	006SX周辺	山茶碗	碗	渥美・湖西	渥美3b型式			8.0	12	-3.5	
42	17B	1490	006SX周辺	山茶碗	碗	渥美・湖西	渥美3b型式			7.2	12	-3.0	
43	17B	1490	006SX周辺	山茶碗	碗	渥美・湖西	渥美3b・3c型式			7.8	7	-2.3	
44	17B	1490	006SX周辺	山茶碗	碗	渥美・湖西	渥美3b型式			7.2	12	-1.2	
45	17B	1490	006SX周辺	山茶碗	碗	渥美・湖西	渥美3b型式	16.4	1			-3.2	
46	17B	1490	006SX周辺	山茶碗	碗	渥美・湖西	渥美3b型式	15.0	4			-4.2	
47	17B	1490	006SX周辺	山茶碗	碗	渥美・湖西	渥美3b型式	15.0	2			-3.7	
48	17B	1490	006SX周辺	山茶碗	碗	渥美・湖西	渥美3b型式					-1.9	体部内面朱墨
49	17B	1490	006SX周辺	山茶碗	片口鉢	常滑?	常滑4・5型式					-5.6	
50	17B	1490	006SX周辺	山茶碗	小皿	渥美・湖西	渥美3b型式	9.1	7	5.8	12	2.3	
51	17B	1490	006SX周辺	山茶碗	小皿	渥美・湖西	渥美3b型式	8.6	1	5.4	7	2.0	
52	17B	1490	006SX周辺	山茶碗	小皿	渥美・湖西	渥美3b型式	8.5	2	4.6	12	1.9	
53	17B	1490	006SX周辺	山茶碗	小皿	渥美・湖西	渥美3b型式	8.3	4	4.0	12	2.0	
54	17B	1490	006SX周辺	山茶碗	小皿	渥美・湖西	渥美3b型式			5.7	9	-1.0	
55	17B	1490	006SX周辺	山茶碗	小皿	渥美・湖西	渥美3b型式			5.0	12	-1.4	
56	17B	1490	006SX周辺	山茶碗	小皿	渥美・湖西	渥美3b型式			3.8	12	-1.1	
57	17B	1490	006SX周辺	山茶碗	片口鉢	尾張型				16.0	2	-2.6	
58	17B	1490	006SX周辺	陶器	甗	渥美・湖西						-6.4	押印文（縦線）
59	17B	1490	006SX周辺	陶器	壺・瓶類	渥美・湖西						-6.3	
60	17B	1490	006SX周辺	陶器	天目茶碗	瀬戸	大窯第1・2段階	11.6	2			-1.7	193と同一個体?
61	17B	1490	006SX周辺	青磁	碗	中国	龍泉窯系I類					-1.6	
62	17B	1490	006SX周辺	土師器	皿			11.4	1			-1.7	
63	17B	1490	006SX周辺	土師器	皿			10.6	1			-1.7	
64	17B	1490	006SX周辺	土師器	皿			9.6	2			-1.7	
65	17B	1490	006SX周辺	土師器	皿			8.2	6			-1.4	
66	17B	1490	006SX周辺	土師器	皿			15.4	2			-2.7	
67	17B	1490	006SX周辺	土師器	内耳鍋			18.6	4			-10.0	
68	17B	1490	006SX周辺	土師器	内耳鍋			18.4	2			-9.4	
69	17B	1490	006SX周辺	土師器	内耳鍋			18.2	2			-4.7	
70	17B	1490	006SX周辺	土師器	内耳鍋				1			-5.2	

-は残存値

普門寺旧境内

登録番号	調査区	グッド	遺構	種別	器種	産地	型式	口径 (cm)	口縁部残存 (n/12)	底径 (cm)	底部残存 (n/12)	器高 (cm)	備考
71	17B	1490	006SX周辺	土師器	内耳鍋			-	1			-3.6	
72	17B	1590	006SX斜面	山茶碗	碗	渥美・湖西	渥美3b型式	15.6	2			-4.6	
73	17B	1590	006SX斜面	山茶碗	碗	渥美・湖西	渥美3b型式			7.8	3	-3.4	
74	17B	1590	006SX斜面	山茶碗	碗	渥美・湖西	渥美3b型式			6.2	6	-3.2	
75	17B	1590	006SX斜面	山茶碗	碗	渥美・湖西	渥美3b型式			7.8	5	-2.3	
76	17B	1590	006SX斜面	山茶碗	碗	渥美・湖西	渥美3b型式			7.4	12	-1.8	
77	17B	1590	006SX斜面	山茶碗	碗	渥美・湖西	渥美3b型式			7.1	7	-1.5	
78	17B	1590	006SX斜面	山茶碗	碗	渥美・湖西	渥美3b型式			7.2	6	-1.7	
79	17B	1590	006SX斜面	山茶碗	碗	渥美・湖西	渥美3b型式			7.8	12	-1.6	
80	17B	1590	006SX斜面	山茶碗	碗	渥美・湖西	渥美3b型式			7.2	12	-1.8	
81	17B	1590	006SX斜面	山茶碗	碗	渥美・湖西	渥美3b型式			8.6	12	-2.7	
82	17B	1590	006SX斜面	山茶碗	碗	渥美・湖西	渥美3b型式			7.0	12	-1.5	
83	17B	1590	006SX斜面	山茶碗	碗	渥美・湖西	渥美3b型式			7.0	12	-1.6	
84	17B	1590	006SX斜面	山茶碗	小皿	渥美・湖西	渥美3b型式	9.0	3			-2.2	
85	17B	1590	006SX斜面	山茶碗	小皿	渥美・湖西	渥美3b型式			4.0	12	-1.4	
86	17B	1590	006SX斜面	山茶碗	小皿	渥美・湖西	渥美3b型式			3.8	12	-1.0	
87	17B	1590	006SX斜面	山茶碗	片口鉢	渥美・湖西	渥美2・3型式	-	1			-3.5	
88	17B	1590	006SX斜面	山茶碗	片口鉢	尾張型		-	1			-3.5	
89	17B	1590	006SX斜面	山茶碗	片口鉢	尾張型		-	1			-3.5	
90	17B	1590	006SX斜面	山茶碗	片口鉢	渥美・湖西	渥美2・3型式			12.4	1	-3.0	
91	17B	1590	006SX斜面	陶器	甗	渥美・湖西						-5.4	押印文(格子)
92	17B	1590	006SX斜面	陶器	甗	渥美・湖西						-8.3	外面施釉
93	17B	1590	006SX斜面	陶器	播鉢	古瀬戸	後IV期新	29.6	4			-3.3	
94	17B	1590	006SX斜面	青磁	碗	中国	龍泉窯系1-5類					-4.5	
95	17B	1590	006SX斜面	土師器	伊勢型鍋			17.2	1			-2.3	
96	17B	1490	006SX斜面	土師器	内耳鍋			18.6	1			-6.4	
97	17B	1590	006SX斜面	土師器	皿			9.4	1			-1.5	
98	17B	1590	006SX斜面	土師器	皿			8.6	2			-1.8	
99	17B	1590	006SX斜面	土師器	皿			14.4	1			-2.5	
100	17B	1590	006SX斜面	土師器	皿			14.4	1			-2.3	
101	17B	1590	006SX斜面	土師器	皿			13.6	1			-2.0	
102	17B	1590	006SX斜面	土師器	皿	渥美・湖西	渥美3b型式	-	1			-2.4	
103	17B	1590	008SZ	山茶碗	碗	渥美・湖西	渥美3b型式	14.6	3			-3.7	
104	17B	1590	008SZ	山茶碗	碗	渥美・湖西	渥美3b型式			7.3	12	-1.5	
105	17B	1590	008SZ	山茶碗	碗	渥美・湖西	渥美3b型式			5.8	6	-2.2	
106	17B	1590	008SZ	山茶碗	碗	渥美・湖西	渥美3b型式	14.2	5	7.4	12	4.9	
107	17B	1590	008SZ	陶器	甗					9.6	3	-4.3	
108	17B	1590	008SZ	陶器	壺・瓶類							-4.2	押印文(縦線)
109	17B	1590	008SZ	陶器	播鉢	瀬戸	大窯			12.0	2	-5.3	
110	17B	1590	009NR	山茶碗	碗	渥美・湖西	渥美2a型式	16.6	2			-4.3	玉縁状口縁
111	17B	1590	009NR	山茶碗	碗	渥美・湖西	渥美2a型式	15.6	2			-2.7	玉縁状口縁
112	17B	1590	009NR	灰釉陶器	碗	二川	H-72・百代寺			8.0	2	-2.3	
113	17B	1590	009NR	山茶碗	碗	渥美・湖西	渥美3b型式			8.1	12	-3.4	
114	17B	-	009NR	山茶碗	碗	渥美・湖西	渥美3b型式			7.6	11	-1.8	
115	17B	1690	009NR	山茶碗	碗	渥美・湖西	渥美3b型式			6.8	4	-2.4	
116	17B	1590	009NR	山茶碗	碗	渥美・湖西	渥美3b型式			8.0	7	-1.9	
117	17B	1590	009NR	山茶碗	碗	渥美・湖西	渥美3b型式			6.5	6	-3.8	
118	17B	1590	009NR	山茶碗	碗	渥美・湖西	渥美3b型式			7.5	12	-1.4	
119	17B	1590	009NR	山茶碗	碗	渥美・湖西	渥美3b型式			7.5	10	-1.9	
120	17B	1590	009NR	山茶碗	碗	渥美・湖西	渥美3b型式			7.6	6	-1.7	
121	17B	1590	009NR	山茶碗	碗	渥美・湖西	渥美3b型式			7.1	12	-1.9	
122	17B	1590	009NR	山茶碗	碗	渥美・湖西	渥美3b型式			7.9	12	-2.8	
123	17B	1590	009NR	山茶碗	碗	渥美・湖西	渥美3b型式			7.4	12	-1.9	
124	17B	1590	009NR	山茶碗	碗	渥美・湖西	渥美3b型式			6.4	12	-1.6	
125	17B	1590	009NR	山茶碗	碗	渥美・湖西	渥美3b型式			7.4	12	-1.7	
126	17B	1590	009NR	山茶碗	碗	渥美・湖西	渥美3b型式			8.0	4	-2.2	底部外面墨書「(記号)?」
127	17B	1590	009NR	山茶碗	碗	渥美・湖西	渥美3b型式			7.6	12	-1.8	
128	17B	1590	009NR	山茶碗	碗	渥美・湖西	渥美3b型式			7.8	12	-2.0	
129	17B	1590	009NR	山茶碗	碗	渥美・湖西	渥美3b型式			6.6	7	-1.9	
130	17B	1590	009NR	山茶碗	碗	渥美・湖西	渥美3b型式			7.7	12	-2.1	
131	17B	1590	009NR	山茶碗	碗	渥美・湖西	渥美3b型式			7.0	9	-1.5	
132	17B	1591	009NR	山茶碗	碗	渥美・湖西	渥美3b型式			6.4	7	-1.5	
133	17B	1590	009NR	山茶碗	碗	渥美・湖西	渥美3b型式			7.6	4	-1.8	
134	17B	1590	009NR	山茶碗	碗	渥美・湖西	渥美3b型式			7.6	12	-1.8	
135	17B	1590	009NR	山茶碗	碗	渥美・湖西	渥美3b型式			6.8	11	-1.5	
136	17B	1590	009NR	山茶碗	碗	渥美・湖西	渥美3b型式			8.2	3	-2.8	
137	17B	1590	009NR	山茶碗	碗	渥美・湖西	渥美3b型式			7.8	3	-2.3	
138	17B	1590	009NR	山茶碗	碗	渥美・湖西	渥美3b型式			6.8	12	-1.5	
139	17B	1590	009NR	山茶碗	碗	渥美・湖西	渥美3b型式			7.2	3	-1.9	
140	17B	1590	009NR	山茶碗	碗	渥美・湖西	渥美3b型式			6.4	3	-2.1	

-は残存値

登録番号	調査区	グッド	遺構	種別	器種	産地	型式	口径 (cm)	口縁部残存 (n/12)	底径 (cm)	底部残存 (n/12)	器高 (cm)	備考
141	17B	1590	009NR	山茶碗	碗	渥美・湖西	渥美3b型式			7.6	6	1.5	
142	17B	1590	009NR	山茶碗	碗	渥美・湖西	渥美3b型式			8.2	4	-1.9	
143	17B	1590	009NR	山茶碗	碗	渥美・湖西	渥美3b型式			7.4	4	-2.7	
144	17B	1590	009NR	山茶碗	碗	渥美・湖西	渥美3b型式			7.8	12	-1.9	
145	17B	1590	009NR	山茶碗	碗	渥美・湖西	渥美3b型式			6.8	7	-1.9	
146	17B	1590	009NR	山茶碗	碗	渥美・湖西	渥美3b型式			7.2	12	-1.6	
147	17B	1590	009NR	山茶碗	碗	渥美・湖西	渥美3b型式			8.0	3	-2.2	
148	17B	1590	009NR	山茶碗	碗	渥美・湖西	渥美3b・3c型式			6.4	12	-2.2	
149	17B	1590	009NR	山茶碗	碗	渥美・湖西	渥美3b・3c型式			6.6	12	-1.2	
150	17B	1590	009NR	山茶碗	小皿	渥美・湖西	渥美3b型式			4.6	10	-1.5	
151	17B	1590	009NR	山茶碗	小皿	渥美・湖西	渥美3b型式			4.2	6	-1.1	
152	17B	1590	009NR	山茶碗	小皿	渥美・湖西	渥美3b型式			4.8	12	-1.1	
153	17B	1590	009NR	山茶碗	片口鉢	渥美・湖西	渥美2・3型式			4.0	11	-0.9	
154	17B	1590	009NR	山茶碗	片口鉢	尾張型		-	1			-2.5	
155	17B	1590	009NR	山茶碗	片口鉢	尾張型		-	1			-3.7	
156	17B	1590	009NR	山茶碗	片口鉢	尾張型		-	1			-4.0	
157	17B	1590	009NR	山茶碗	片口鉢	渥美・湖西	渥美2・3型式	-	1			-3.7	
158	17B	1590	009NR	山茶碗	片口鉢	渥美・湖西	渥美2・3型式			12.6	3	-4.1	
159	17B	1590	009NR	山茶碗	片口鉢	渥美・湖西	渥美2・3型式			11.8	2	-4.5	
160	17B	1590	009NR	山茶碗	片口鉢	渥美・湖西	渥美2・3型式			13.0	5	-3.5	
161	17B	1590	009NR	陶器	長頸瓶	渥美・湖西	渥美2a・2b型式					-11.6	163と同一個体?、外面施釉
162	17B	1590	009NR	陶器	長頸瓶	渥美・湖西	渥美2a・2b型式					-3.7	163と同一個体?、外面施釉
163	17B	1590	009NR	陶器	壺・瓶類	渥美・湖西				9.0	3	-5.0	161か162と同一個体?、外面施釉
164	17B	1590	009NR	陶器	壺・瓶類	渥美・湖西				9.8	3	-2.2	
165	17B	1590	009NR	陶器	蓮弁文壺	渥美・湖西	渥美2b型式	19.0	2			-8.6	外面施釉
166	17B	1590	009NR	陶器	広口壺	渥美・湖西						-10.8	外面施釉
167	17B	1590	009NR	陶器	広口壺	渥美・湖西						-7.1	
168	17B	1590	009NR	陶器	蓮弁文壺	渥美・湖西	渥美2b型式					-2.6	169と同一個体?、外面施釉
169	17B	1590	009NR	陶器	蓮弁文壺	渥美・湖西	渥美2b型式					-4.9	168と同一個体?、外面施釉
170	17B	1590	009NR	陶器	蓮弁文壺	渥美・湖西	渥美2b型式					-7.2	外面施釉
171	17B	1590	009NR	陶器	甗	渥美・湖西		37.0	2			-3.0	内外面施釉
172	17B	1590	009NR	陶器	甗	渥美・湖西		-	1			-2.0	
173	17B	1590	009NR	陶器	甗	渥美・湖西		39.4	1			-5.4	内外面施釉
174	17B	1590	009NR	陶器	甗	渥美・湖西		-	1			-2.3	内面施釉
175	17B	1590	009NR	陶器	甗	渥美・湖西						-6.7	押印文 (縦線)
176	17B	1590	009NR	陶器	甗	渥美・湖西						-4.0	記号文
177	17B	1590	009NR	陶器	甗	渥美・湖西						-5.2	押印文 (縦線)
178	17B	1590	009NR	陶器	甗	渥美・湖西						-5.3	押印文 (縦線)
179	17B	1590	009NR	陶器	甗	渥美・湖西						-8.6	押印文 (格子)
180	17B	1590	009NR	陶器	甗	渥美・湖西						-3.6	外面施釉、押印文 (縦線)
181	17B	1590	009NR	陶器	甗	渥美・湖西						-7.2	内面施釉、押印文 (縦線)
182	17B	1590	009NR	陶器	甗	渥美・湖西						-7.1	内外面施釉、押印文 (縦線)
183	17B	1590	009NR	陶器	甗	渥美・湖西						-9.0	内外面施釉
184	17B	1590	009NR	陶器	甗	渥美・湖西						-11.5	押印文 (縦線)
185	17B	1590	009NR	陶器	甗	渥美・湖西						-6.8	押印文 (縦線)
186	17B	-	009NR	陶器	甗	渥美・湖西						-6.5	押印文 (縦線)
187	17B	1590	009NR	陶器	甗	渥美・湖西						-5.2	押印文 (縦線)
188	17B	1590	009NR	陶器	甗	渥美・湖西						-4.2	内外面施釉、押印文 (縦線と横線)
189	17B	1590	009NR	陶器	甗	渥美・湖西						-5.7	内面施釉、押印文 (縦線)
190	17B	-	009NR	陶器	甗	渥美・湖西						-8.5	押印文 (格子)
191	17B	1590	009NR	陶器	壺・瓶類	常滑				15.4	2	-4.5	
192	17B	1590	009NR	陶器	搦鉢	瀬戸	大窯第1段階	30.4	4			-3.3	
193	17B	1590	009NR	陶器	天目茶碗	瀬戸	大窯第1・2段階					-2.7	60と同一個体?
194	17B	1590	009NR	陶器	丸皿 (稜皿)	瀬戸	大窯第2段階			6.7	1	-0.8	鉄釉
195	17B	1590	009NR	陶器	匣鉢	瀬戸?	大窯?	12.2	1			-7.0	
196	17B	1590	009NR	青磁	碗	中国	龍泉窯系 I-5類					-1.7	
197	17B	1590	009NR	土師器	皿			-	1			-1.8	
198	17B	1590	009NR	土師器	内耳鍋			21.2	2			-3.2	
199	17B	1590	009NR	土師器	内耳鍋			25.8	3			-7.8	
200	17B	1590	009NR	土師器	内耳鍋			20.8	2			-2.6	
M1	17B	1590	008SZ	金属製品	銭貨 (銅銭)		古寛永	径2.42		孔0.64		厚さ0.09 重さ2.4g	
M2	17B	1590	008SZ	金属製品	銭貨 (銅銭)		古寛永	径2.23		孔0.65		厚さ0.09 重さ2.4g	
M3	17B	1590	008SZ	金属製品	銭貨 (銅銭)		新寛永	径2.31		孔0.66		厚さ0.09 重さ2.5g	
M4	17B	1590	008SZ	金属製品	銭貨 (銅銭)		新寛永	径2.31		孔0.66		厚さ0.11 重さ2.5g	
M5	17B	1590	008SZ	金属製品	銭貨 (銅銭)		新寛永	径2.30		孔0.68		厚さ0.09 重さ2.4g	
M6	17B	1590	008SZ下層	金属製品	銭貨 (銅銭)		新寛永	径2.25		孔0.69		厚さ0.10 重さ2.4g	
M7	17B	1590	008SZ	金属製品	銭貨 (鉄銭)		鉄銭	径2.22		孔0.60		厚さ0.12 重さ2.4g	
M8	17B	1590	009NR	金属製品	飾金具			長14.1		幅1.5		厚さ0.10 重さ9.1g	
S1	17B	1590	009NR	石製品	長方硯			長9.2		幅6.3		厚さ1.5 泥質凝灰岩、重さ207g	

-は残存値

登録 番号	調査 区	グリ ッド	遺構	種別	器種	産地	型式	口径 (cm)	口縁部 残存 (n/12)	底径 (cm)	底部 残存 (n/12)	器高 (cm)	備考
201	立会A			山茶碗	碗	渥美・湖西	渥美3b型式			7.2	12	-2.3	
202	立会A			山茶碗	碗	渥美・湖西	渥美3b型式			7.7	12	-1.9	
203	立会A			山茶碗	碗	渥美・湖西	渥美3b型式			7.4	4	-2.3	
204	立会A			山茶碗	碗	渥美・湖西	渥美3b型式			7.3	4	-1.8	
205	立会A			山茶碗	碗	渥美・湖西	渥美3b型式			8.2	4	-1.6	
206	立会A			山茶碗	碗	渥美・湖西	渥美3b型式			7.8	6	-1.7	
207	立会A			山茶碗	片口鉢	渥美・湖西	渥美2・3型式			13.8	4	-8.6	
208	立会A			陶器	壺・瓶類	渥美・湖西?							-5.6 外面施釉
209	立会A			陶器	壺・瓶類	渥美・湖西		18.6	2				-3.0 内外面施釉
210	立会A			陶器	広口壺	渥美・湖西							-6.9 外面施釉
211	立会A			陶器	四耳壺	古瀬戸	前期						-2.8 接合しない体部
212	立会A			陶器	四耳壺	古瀬戸	前期?						-4.2 外面施釉
213	立会B			山茶碗	碗	渥美・湖西	渥美3a型式			7.4	4	-2.8	
214	立会B			山茶碗	碗	渥美・湖西	渥美3a型式			7.3	6	-2.2	
215	立会B			山茶碗	碗	渥美・湖西	渥美3b型式			7.8	12	-1.9	
216	立会B			山茶碗	碗	渥美・湖西	渥美3b型式			7.6	12	-2.4	
217	立会B			山茶碗	碗	渥美・湖西	渥美3b型式			7.6	12	-1.5	
218	立会B			山茶碗	碗	渥美・湖西	渥美3b型式			7.0	7	-1.9	
219	立会B			山茶碗	碗	渥美・湖西	渥美3b型式			7.4	12	-1.8	
220	立会B			山茶碗	碗	渥美・湖西	渥美3b型式			7.6	12	-1.7	
221	立会B			山茶碗	碗	渥美・湖西	渥美3b型式			7.8	11	-2.3	
222	立会B			山茶碗	小皿	渥美・湖西	渥美3b型式			4.2	12	-1.7	
223	立会B			瓦	平瓦			長7.3		幅7.7			厚さ2.1 凹面に離れ砂、重さ159.7g
224	立会C			山茶碗	碗	渥美・湖西	渥美3b型式	16.4	2				-3.3
225	立会C			山茶碗	碗	渥美・湖西	渥美3b型式	15.4	1				-3.1
226	立会C			山茶碗	碗	渥美・湖西	渥美3a型式			7.8	12	-2.9	
227	立会C			山茶碗	碗	渥美・湖西	渥美3a型式			8.8	12	-2.6	
228	立会C			山茶碗	碗	渥美・湖西	渥美3b型式			8.6	3	-2.5	
229	立会C			山茶碗	碗	渥美・湖西	渥美3b型式			8.4	2	-1.5	
230	立会C			山茶碗	碗	渥美・湖西	渥美3b型式			8.4	5	-1.5	
231	立会C			山茶碗	碗	渥美・湖西	渥美3b型式			7.0	12	-3.3	内外面から破断面に顕著な煤
232	立会C			山茶碗	碗	渥美・湖西	渥美3b型式			7.2	5	-2.7	
233	立会C			山茶碗	碗	渥美・湖西	渥美3b型式			7.9	5	-1.5	
234	立会C			山茶碗	碗	渥美・湖西	渥美3b型式			7.2	4	-2.1	
235	立会C			山茶碗	碗	渥美・湖西	渥美3b型式			7.2	6	-4.0	
236	立会C			山茶碗	碗	渥美・湖西	渥美3b型式			7.4	4	-2.3	
237	立会C			山茶碗	碗	渥美・湖西	渥美3b型式			7.2	12	-2.1	
238	立会C			山茶碗	碗	渥美・湖西	渥美3b型式			7.9	4	-1.7	
239	立会C			山茶碗	碗	渥美・湖西	渥美3b型式			8.2	5	-2.4	
240	立会C			山茶碗	碗	渥美・湖西	渥美3b型式			7.4	6	-2.8	
241	立会C			山茶碗	碗	渥美・湖西	渥美3b型式			6.8	12	-1.8	
242	立会C			山茶碗	碗	渥美・湖西	渥美3b型式			7.2	12	-1.9	
243	立会C			山茶碗	碗	渥美・湖西	渥美3b型式			6.7	12	-2.2	
244	立会C			山茶碗	碗	渥美・湖西	渥美3b型式			7.6	6	-2.0	
245	立会C			山茶碗	碗	渥美・湖西	渥美3b型式			6.2	12	-1.3	
246	立会C			山茶碗	碗	渥美・湖西	渥美3b型式			6.8	12	-1.7	
247	立会C			山茶碗	碗	渥美・湖西	渥美3b型式			7.8	10	-1.7	
248	立会C			山茶碗	碗	渥美・湖西	渥美3b型式			7.2	12	-1.7	
249	立会C			山茶碗	碗	渥美・湖西	渥美3b型式			7.4	4	-2.5	
250	立会C			山茶碗	碗	渥美・湖西	渥美3b型式			7.0	12	-2.0	
251	立会C			山茶碗	碗	渥美・湖西	渥美3b型式			7.2	12	-2.3	
252	立会C			山茶碗	碗	渥美・湖西	渥美3b型式			7.5	4	-2.1	
253	立会C			山茶碗	碗	渥美・湖西	渥美3b型式			8.2	3	-2.1	
254	立会C			山茶碗	碗	渥美・湖西	渥美3b型式			7.4	9	-2.4	
255	立会C			山茶碗	碗	渥美・湖西	渥美3b型式			7.2	12	-1.7	
256	立会C			山茶碗	碗	渥美・湖西	渥美3b型式			8.0	6	-1.4	
257	立会C			山茶碗	碗	渥美・湖西	渥美3b型式			7.5	12	-2.5	
258	立会C			山茶碗	碗	渥美・湖西	渥美3b型式			8.0	12	-1.6	
259	立会C			山茶碗	碗	渥美・湖西	渥美3b型式	13.2	2	7.4	2	5.3	
260	立会C			山茶碗	碗	渥美・湖西	渥美3b型式	15.4	1	7.2	3	4.7	
261	立会C			山茶碗	碗	渥美・湖西	渥美3b型式			8.6	3	-1.4	
262	立会C			山茶碗	碗	渥美・湖西	渥美3b型式			7.0	12	-1.7	
263	立会C			山茶碗	碗	渥美・湖西	渥美3b型式			6.6	4	-2.3	
264	立会C			山茶碗	碗	渥美・湖西	渥美3b型式			6.6	6	-2.1	
265	立会C			山茶碗	碗	渥美・湖西	渥美3b型式			7.0	12	-1.5	
266	立会C			山茶碗	碗	渥美・湖西	渥美3b型式			7.1	12	-1.7	
267	立会C			山茶碗	碗	渥美・湖西	渥美3b型式			8.6	6	-2.0	
268	立会C			山茶碗	碗	渥美・湖西	渥美3b型式			9.8	1	-1.4	
269	立会C			山茶碗	碗	渥美・湖西	渥美3b型式			7.0	12	-3.4	底部外面墨書「最口(覺カ)」
270	立会C			山茶碗	碗	渥美・湖西	渥美3b型式			7.4	3	-3.4	

-は残存値

登録番号	調査区	グリッド	遺構	種別	器種	産地	型式	口径 (cm)	口縁部残存 (n/12)	底径 (cm)	底部残存 (n/12)	器高 (cm)	備考
271	立会C			山茶碗	碗	渥美・湖西	渥美3b型式			7.8	7	-2.4	
272	立会C			山茶碗	碗	渥美・湖西	渥美3b型式			6.8	4	-2.3	
273	立会C			山茶碗	碗	渥美・湖西	渥美3b型式			7.9	7	-2.4	
274	立会C			山茶碗	碗	渥美・湖西	渥美3b型式			7.2	6	-1.7	
275	立会C			山茶碗	碗	渥美・湖西	渥美3b型式			8.7	6	-1.4	
276	立会C			山茶碗	碗	渥美・湖西	渥美3b型式			7.6	9	-1.6	
277	立会C			山茶碗	小皿	渥美・湖西	渥美3b型式			4.6	12	-1.4	
278	立会C			山茶碗	小皿	渥美・湖西	渥美3b型式			5.7	6	-0.8	
279	立会C			山茶碗	小皿	渥美・湖西	渥美3b型式			5.0	5	-0.9	
280	立会C			山茶碗	小皿	渥美・湖西	渥美3b型式			3.8	6	-1.1	
281	立会C			山茶碗	小皿	渥美・湖西	渥美3b型式			3.3	12	-0.9	
282	立会C			山茶碗	小皿	渥美・湖西	渥美3b型式			3.9	12	-1.0	
283	立会C			山茶碗	片口鉢	尾張型		-	1			-3.9	
284	立会C			山茶碗	片口鉢	渥美・湖西	渥美2・3型式			13.2	3	-2.7	
285	立会C			陶器	甗	渥美・湖西		-	1			-4.4	内外面施釉
286	立会C			陶器	甗	渥美・湖西		-	1			-2.7	内外面から破断面に顕著な煤
287	立会C			陶器	甗	渥美・湖西						-5.3	外面施釉、記号文または刻文
288	立会C			陶器	甗	常滑						-4.0	押印文 (格子に菊花)
289	立会C			陶器	甗	常滑						-10.2	押印文 (縦線)
290	立会C			陶器	甗	渥美・湖西						-5.8	押印文 (縦線)
291	立会C			陶器	甗	渥美・湖西						-6.4	押印文 (格子)
292	立会C			陶器	甗	渥美・湖西						-10.0	押印文 (縦線)
293	立会C			陶器	甗	渥美・湖西						-6.2	押印文 (縦線)
294	立会C			陶器	甗	渥美・湖西				15.4	3	-7.0	
295	立会C			陶器	蓮弁文壺	渥美・湖西	渥美2b型式					-7.1	
296	立会C			白磁	皿	中国	IX類	8.0	2			-1.6	口縁部口禿げ
297	立会沢			灰釉陶器	碗	二川	H-72・百代寺			7.6	3	-3.6	
298	立会沢			山茶碗	碗	渥美・湖西	渥美3a型式			8.2	12	-2.5	
299	立会沢			山茶碗	碗	渥美・湖西	渥美3a型式			7.4	7	-1.9	
300	立会沢			山茶碗	碗	渥美・湖西	渥美3a型式			7.9	7	-2.7	
301	立会沢			山茶碗	碗	渥美・湖西	渥美3b型式			7.0	6	-2.7	
302	立会沢			山茶碗	碗	渥美・湖西	渥美3b型式			7.6	6	-2.2	
303	立会沢			山茶碗	碗	渥美・湖西	渥美3b型式			7.8	4	-1.9	
304	立会沢			山茶碗	碗	渥美・湖西	渥美3b型式			8.8	12	-1.6	
305	立会沢			山茶碗	碗	渥美・湖西	渥美3b型式			6.8	12	-2.2	
306	立会沢			山茶碗	碗	渥美・湖西	渥美3b型式			7.6	12	-1.7	
307	立会沢			山茶碗	碗	渥美・湖西	渥美3b型式			7.4	3	-3.0	
308	立会沢			山茶碗	碗	渥美・湖西	渥美3b型式			7.6	12	-2.6	
309	立会沢			山茶碗	碗	渥美・湖西	渥美3b型式			6.8	7	-1.4	
310	立会沢			山茶碗	碗	渥美・湖西	渥美3b型式			7.1	12	-2.3	
311	立会沢			山茶碗	碗	渥美・湖西	渥美3b型式			6.6	6	-1.4	
312	立会沢			山茶碗	碗	渥美・湖西	渥美3b型式			7.4	12	-1.4	
313	立会沢			山茶碗	碗	渥美・湖西	渥美3b型式			6.0	10	-1.4	
314	立会沢			山茶碗	碗	渥美・湖西	渥美3b型式	16.6	2			-3.2	
315	立会沢			山茶碗	小皿	渥美・湖西	渥美3b型式			4.8	6	-1.2	
316	立会沢			山茶碗	小皿	渥美・湖西	渥美3b型式			4.8	12	-1.1	
317	立会沢			山茶碗	片口鉢	渥美・湖西	渥美2・3型式	-	1			-6.8	
318	立会沢			陶器	蓮弁文壺	渥美・湖西	渥美2a・2b型式					-7.0	外面施釉
319	立会沢			陶器	蓮弁文壺	渥美・湖西	渥美2b型式					-5.6	外面施釉
320	立会沢			陶器	甗	渥美・湖西		-	1			-2.8	内外面施釉
321	立会沢			陶器	甗	渥美・湖西						-5.3	内外面施釉
322	立会沢			陶器	甗	渥美・湖西						-4.6	外面施釉
323	立会沢			陶器	甗	渥美・湖西						-8.1	押印文 (縦線)
324	立会沢			陶器	甗	渥美・湖西						-8.0	外面施釉、押印文 (縦線と横線)
325	立会沢			陶器	甗	渥美・湖西						-3.4	押印文 (格子)
326	立会沢			陶器	甗	渥美・湖西						-4.5	内外面施釉、押印文 (格子)
327	立会沢			陶器	甗	渥美・湖西						-5.2	押印文 (縦線と横線)
328	立会沢			陶器	甗	渥美・湖西						-7.3	押印文 (縦線と斜線)
329	立会沢			陶器	甗	渥美・湖西						-9.5	押印文 (斜格子)
330	立会沢			陶器	甗	渥美・湖西						-10.4	押印文 (格子)
331	立会沢			陶器	甗	渥美・湖西						-5.4	内面施釉、押印文 (縦線)
332	立会沢			陶器	甗	渥美・湖西						-7.3	外面施釉、押印文 (縦線)
333	立会沢			陶器	甗	渥美・湖西						-10.2	内面施釉、押印文 (縦線)
334	立会沢			陶器	甗	渥美・湖西						-8.7	押印文 (縦線)
335	立会沢			陶器	甗	渥美・湖西						-7.5	押印文 (縦線)、外面に煤
336	立会沢			陶器	甗	渥美・湖西						-7.8	外面施釉、押印文 (縦線と横線)
337	立会沢			陶器	甗	渥美・湖西				17.0	3	-4.2	
338	立会沢			陶器	広口壺	常滑	常滑6a型式	19.4	2			-8.2	
339	立会沢			土師器	皿			9.0	2			-1.5	
340	立会沢			土師器	伊勢型鍋			-	1			-1.7	

-は残存値

報告書抄録

ふりがな	ふもんじきゅうけいだい							
書名	普門寺旧境内							
副書名								
巻次								
シリーズ名	愛知県埋蔵文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第216集							
編著者名	早野浩二・鬼頭 剛							
編集機関	公益財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センター							
所在地	〒498-0017 愛知県弥富市前ヶ須町野方802-24 TEL0567(67)4161							
発行年月日	西暦 2020年 3月 31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ふもんじきゅうけいだい 普門寺旧境内	あいちけん とよはし 愛知県豊橋市 うのやちようあざ やました 雲谷町字ナベ山下 7ほか	23201	790481	34度 44分 40秒	137度 28分 10秒	2017.05.01～ 2017.12.27	300	予防治山 事業・ 小規模 治山事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
普門寺旧境内	寺院跡	平安時代 鎌倉時代 室町時代 戦国時代 江戸時代	平場 平場 平場 平場 平場、通路状遺構 遺物集積、土坑、 石積み	灰釉陶器、山茶碗 山茶碗、渥美窯製品、 常滑窯製品、 瀬戸・美濃窯製品、 初山窯製品、 中国陶磁、土師器、 瓦、 銭貨、金属製品、 石硯		普門寺旧境内は、中 世前期を主体とする 山寺遺構である。2つ の本堂跡を中心とし て展開する250か所 程度の平場群の一部 と山麓付近の平場の 一部を発掘調査した。		
文書番号	発掘届出(29埋セ第4号・2017.4.5) 通知(29教生第204号・2017.4.17) 終了届・保管証・発見届(29埋セ第106号・2018.1.5) 鑑定結果通知(1豊教美第458号・2019.12.19)							
要約	<p>普門寺旧境内は中世前期を主体とする山寺遺構で、愛知大学による分布調査、豊橋市教育委員会による測量調査・分布調査、発掘調査の結果、2つの本堂跡とそれに付随する多数の平場群、さらにその周囲の巨岩、中世墓群、経塚によって構成されることが判明している。</p> <p>山麓付近の平場に重複する17A区の発掘調査においては、戦国時代以降の断続的な平場の利用を確認した。丘陵斜面下位の平場群に重複する17B区の発掘調査においては、中世前期と中世末から戦国時代における平場の利用、近世における墓と思われる石積みの構築を確認した。平場群間の沢の立会調査においても、中世前期を主体とする遺物が大量に出土した。</p>							



普門寺旧境内遠景



17A区調査前状況・完掘状況

上段：調査前状況（南東から）

下段：完掘状況（南東から）



17A区平場001SX・平場002SX

上段：平場001SX完掘状況（北から）

中段左：平場001SX北西部分上位土層断面（東から） 中段右：平場001SX北西部分下位土層断面（南東から）

下段左：平場002SX通路状遺構近景（東から） 下段右：平場002SX斜面の開削状況（東から）



17A区遺物集積003SU・遺物集積004SU・土坑005SK

上段：遺物集積003SU付近近景（南東から）

中段左：遺物集積003SU山茶碗（1）出土状況（西から） 中段右：遺物集積003SU仏餉具（2）出土状況（南西から）

下段左：遺物集積004SU付近土層断面（南から） 下段右：土坑005SK土層断面（北西から）



17B区調査前状況・完掘状況

上段：調査前状況（東から）

下段：完掘状況（南から）



17B区全景・平場006SX周辺

上段：17B区全景（南東から）

中段左：平場006SX周辺検出状況・土層断面（東から） 中段右：平場006SX周辺巨礫付近遺物出土状況（西から）

下段左：平場006SX周辺巨礫付近山茶碗（25）出土状況（南から） 下段右：平場006SX周辺斜面礫群検出状況（南から）



17B区石積み008SZ (1)

上段：石積み008SZ除草後の確認状況（南東から）

下段：石積み008SZ全石材検出状況（東から）



17B区石積み008SZ (2)

上段：石積み008SZ検出状況 (東から)

中段左：石積み008SZ検出状況 (南西から) 中段右：石積み008SZ検出状況 (西から)

下段左：石積み008SZ検出状況 (北から) 下段右：石積み008SZ検出状況 (南から)



17B区石積み008SZ・沢009NR

上段：石積み008SZ基底石検出状況（東から）

中段左：石積み008SZ銭貨（M1）出土状況（北東から） 中段右：石積み008SZ土層断面（南東から）

下段左：沢009NR完掘状況（南東から） 下段右：沢009NR土層断面（東から）



17A区出土遺物



17B区出土遺物集合写真

上段：平安・鎌倉時代の遺物（渥美・湖西産陶器を中心とする。蓮弁文壺、長頸瓶等も含まれる。）

下段：戦国時代の遺物（古瀬戸後期末から大窯期前半の陶器、土師器内耳鍋等の日常雑器類を中心とする。）



17B区平場006SX周辺・斜面等出土遺物（1）



17B区出土遺物平場006SX周辺・斜面等出土遺物（2）



17B区沢009NR出土遺物



愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第216集

普門寺旧境内

2020年3月31日

発行 公益財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団
愛知県埋蔵文化財センター

印刷 サンメッセ株式会社